

334-1



新  
江  
史  
蹟

贈  
48.10.27  
內交

緒言

近江ノ國地旬服ニ接シ文化夙ニ洽ク史蹟最モ富ム會皇太子殿下玉趾ヲ枉ケラル、ノ恩命アリ寔ニ是レ振古未聞ノ盛事ニシテ縣下萬衆ノ歡喜措ク能ハサル所ナリ乃チ特ニ材料ヲ收蒐シ新ニ稿ヲ起シ地理ノ變遷人物ノ推移神社ノ沿革佛閣ノ緣起其他篤學志士勇將猛卒等苟モ國家ノ治亂人文ノ發展ニ繫ルモノ集成以テ台覽ニ供シ名ケテ近江史蹟ト云フ區區タル小冊固ヨリ完璧ヲ期セスト雖モ庶幾クハ一矚以テ史實ノ梗概ヲ知ルニ足ラン乎

明治四十三年十月

滋賀縣

## 凡例

- 一 本書ハ近江國ニ關スル名所古蹟及偉人ノ事蹟ヲ蒐集シタルモノニシテ其ノ撰擇引證ハ最モ正確ニシテ公平ナランコトニ努メタリ
- 一 偉人ハ近江人タルト否トヲ問ハス苟モ近江ニ關係ヲ有シ國民教化ノ資ニ供スヘシト認ムルモノハ成ルヘク多ク其ノ略傳ヲ網羅セリ
- 一 書中章節ノ區分ハ大抵之ヲ郡市ニ依リテ類別セリト雖モ或ハ材料ニ依リ或ハ地勢ニ從ヒ間々其軌ヲ脫スルモノアリ而シテ個個ノ順位ノ如キハ其列次必シモ一定ノ則ヲ設ケス一ニ其ノ便宜ニ據ル
- 一 社寺ノ傳説ニハ荒唐無稽ノ説甚タ多シト雖モ世教ニ害ナ

二  
シト認メタルモノハ之ヲ摘録ス其ノ他口碑傳説ニ於テモ  
亦同シ

一引用書目ノ重ナルモノ左ノ如シ且ツ諸家ノ祕記等引用シ  
タルモノ多シト雖モ今之ヲ掲ケス

六國史 日本外史

源平盛衰記 太平記

江源武鑑 淺井三代記

東鑑 梅松論

近江輿地誌略 日本地理志料

興福寺宮務牒疏 神名帳考證

日本人名辭書 日本地名辭書

國史大辭典 東海道名所圖會

木曾路名所圖會

近江名跡案内記

神社寺院明細帳

國寶目錄

明治四十三年十月

# 近江史蹟

## 目次

第一章 總說	一頁
第二章 大津	三
大津市	三
○逢阪山	五
關禪九神社	六
義仲寺	六
芭蕉翁墳	七
若林強齋	八
○園城寺	一〇
圓滿院	一六
目次	一

○智證大師	一六
新羅義光墓	一八
弘文天皇長等山前陵	一九
大津城附大津合戰	二一
川瀬太宰	二三
第三章 滋賀坂本	二四
大伴黑主祠	二七
大津宮址	二七
崇福梵釋二寺遺址	二九
○唐崎	三一
東坂本古城	三五
坂本古戰場此森可成墓	三六
來迎寺	三八
東照宮	三九

滋賀院	四〇
日吉神社	四〇
西教寺	四二
比叡山	四四
延曆寺	四五
傳教大師	五二
慈惠大師	五四
山門合戰	五五
紀貫之墳	五八
志賀高穴穗宮址	五九
第四章 雄琴以北滋賀郡一圓	六〇
那波加神社	六〇
法光寺	六〇
○堅田	六一

勾當内侍墓	六三
眞野入江	六四
小野	六五
龍華關址	六六
氷室遺跡	六六
小松崎	六七
比良山	六七
白鬚神社	六九
葛川寺	七〇
第五章 高島郡	七一
大溝城墟	七二
近藤重藏墓	七二
水尾神社	七三
高島宮址	七三

藤樹書院	七四
中江藤樹	七四
淺見綱齋	七六
大崎	七七

第六章 膳所石山

膳所	七八
膳所城墟	七九
膳所招魂社	八一
栗津野	八二
今井兼平墓	八四
國分寺舊址	八五
勢多之古戰場	八六
岩間寺	八七
石山寺	八八

第七章 栗太郡

瀬田 九九

瀬田橋 一〇〇

秀郷社 一〇一

勢多古城跡 一〇二

藤原經信別業之地 一〇三

猿丸大夫舊址 一〇三

大石氏邸址 一〇四

佐久奈度神社 一〇四

鹿跳米浙 一〇五

建部神社 一〇六

野路 一〇七

〇矢橋 一〇八

〇觀音寺 一一〇

第八章 野洲郡

草津町 一一一

治田迹 一一三

鈎里 一一四

長東大藏屋敷跡 一一五

金勝寺 一一六

都賀山址 一一九

足利義昭矢島遺址 一二〇

野洲川 一二一

三上山 一二二

御上神社 一二三

三船塚 一二四

淡海毛野臣墳 一二四

祇王寺 一二五



北村季吟……………一三六

錦織寺……………一二七

兵主神社……………一二八

平宗盛墳……………一二九

第九章 甲賀郡東部……………一三〇

石部……………一三一

    ∪ 阿星山常樂寺……………一三一

    ∪ 阿星山長壽寺……………一三三

    ∪ 岩根山善水寺……………一三三

    妙感寺……………一三五

    水口町並水口古城跡……………一三六

    中村栗園……………一三八

    土山行在所……………一四一

    田村神社……………一四一

第十章 甲賀郡西部……………一四二

保良舊都……………一四三

内裏野……………一四三

信樂郷及多羅尾氏……………一四四

第十一章 蒲生郡西部……………一四五

水葦島……………一四五

奥ノ島……………一四七

八幡町……………一四八

西村太郎右衛門……………一四九

伴嵩蹊……………一五一

西川吉輔……………一五二

八幡山城墟……………一五四

沙々貴神社……………一五四

安土山……………一五六

- 淨嚴院……………一五七
- 桑實寺……………一五九
- 鏡山……………一五九
- 蒲生野……………一六一
- 老蘇森並鎌宮……………一六一
- 觀音寺古城址……………一六三
- 觀音正寺……………一六四
- 佐々木氏……………一六四
- 市邊押磐皇子墓……………一六六
- 第十一章 蒲生郡東部……………一六七
- 音羽山古城址……………一六八
- 中野古城址……………一六八
- 蒲生氏郷……………一六九
- 馬見岡綿向神社……………一七〇

- 鬼室集斯墓……………一七〇
- 第十三章 神崎郡……………一七二
- 建部高光……………一七二
- 无屋寺……………一七三
- 石馬寺……………一七四
- 宇賀神社……………一七五
- 第十四章 愛知郡……………一七六
- 愛知川町……………一七七
- 金剛輪寺……………一七八
- 百濟寺……………一七八
- 永源寺……………一七九
- 第十五章 犬上郡……………一八一
- 四十九院……………一八一
- 藤堂高虎……………一八二

西明寺	一八三
多賀神社	一八四
鳥籠山及不知哉川	一八五
佐和山城址	一八六
石田三成	一八七
彦根城	一八九
井伊直政	一九一
井伊直孝	一九二
井伊直中	一九五
井伊直弼	一九八
松原	二〇〇
多景島	二〇〇
第十六章 阪田郡山東部	二〇〇
伊吹山	二〇一

伊夫伎神社	二〇二
伊吹四大寺	二〇二
佐々木氏(京極)	二〇四
成菩提院	二〇四
源具行墓	二〇五
徳源院	二〇六
廣姫皇后墓	二〇六
第十七章 阪田郡山西部	二〇七
磨鍼嶺	二〇八
蓮華寺	二〇九
山津照神社	二一〇
都久麻神社	二一一
山内一豊母墓	二一一
後鳥羽天皇遺跡	二二二

阪田宮……………二二二  
 岡神社……………二二二  
 惣持寺……………二二三  
 徳勝寺……………二二三  
 長濱城址……………二二三  
 神照寺……………二二五  
 八幡神社……………二二五  
**第十八章 東淺井郡**……………二二六  
 大吉寺……………二二六  
 姉川古戰場……………二二七  
 小堀氏邸址……………二二九  
 小谷城址……………二三〇  
 淺井亮政……………二三一  
 淺井長政……………二三三

玉泉寺……………二三三  
 片桐且元……………二三三  
 竹生島……………二三四

**第十九章 伊香郡**……………二三六

觀音堂……………二三六  
 己高山……………二三七  
 伊香具神社……………二三八  
 淨信寺……………二三九  
 菅山寺……………二三九  
 賤ヶ嶽……………二四〇  
 毛受兄弟之墓……………二四二

目次終

近江史蹟

第一章 總說

青山四周翠峯境ヲ繞リテ、一寰宇ヲナシ、中琵琶ノ大湖ヲ湛へ、土地湖面ニ沿フテ肥  
 エ、風光山水ニヨリテ麗カニ眞ニ湖國ノ美ヲ表ハスモノ之ヲ近江國トナス、東美濃  
 伊勢ニ隣リ、南伊賀山城ニ接シ、西山城丹波ニ連リ、北若狹越前ニ界ス、面積二百六十  
 九方里、東西十五里、南北二十五里餘、戸數十三萬二千、人口六十九萬二千アリ、今行政  
 上ノ便宜ニヨリ、一市十二郡十四町百八十八箇村ニ區畫ス、之ヲ史ニ按スルニ、上古  
 ノ淡海ノ國、或ハ佐々浪ノ國、又遠淡海國ニ對シテ近淡海國ト呼ヒシモノ、皆湖水ア  
 ルニ因リテ名ツクル處ナリ、景行、成務ノ朝、玆ニ都シ給ヒシコトアリト雖モ志賀ノ  
 名アリテ近江ノ名アラス、天智帝ノ遷都ニ及ヒテ、近淡海ノ名ヲ付シ、元明帝ノ朝、近  
 江ノ名始メテ起ルト傳フ、中世以降、江州ノ名アリ、又江南江北ニ分チ、江東江西ノ別  
 ヲナスコトアリ、滋賀高島ノ地ヲ西近江ト云ヒ、阪田東淺井伊香ノ地ヲ北近江ト云

皆地理上ノ呼稱ニ本ツク、而シテ西南畿内ヲ控へ東北三道ノ要衝ヲ扼ス、名畿外ニ屬スト雖モ實ハ京師ノ藩屏タリ、其天下ノ治亂興廢ノ渦中ニ投セラレシモノ亦自然ノ數ナリ、記紀既ニ皇親ノ此地ニ封セラレシコトヲ見、高穴穗宮、大津宮ノ遷都ハ亦此地ノ文明ヲ進メシコト幾何ナルヲ知ル可カラス、加フルニ三韓歸化ノ民屢此地ニ配置セラレタルコトアリ、文物工藝ノ進運ヲ助ケシコト少ナシトセス、以テ文化ノ惠ニ浴セシコトノ早キヲ知ルヘシ、武家政柄ヲ執リテ以來、此地佐々木氏ノ管國トナリ、子孫六角京極ノ二家ニ分レテ之ヲ領シ、戰國ノ代、群雄四方ニ起リ、覇ヲ京畿ニ建テントスルモノ、先ツ茲ニ根據ヲ得サルヘカラス、此地戰亂ノ多カリシコト、亦止ムヲ得サルナリ、徳川氏ノ時ニ及ヒ、元勳井伊氏ヲ彦根ニ封シテ、京畿控制ノ大任ヲ負ハシメ、其他大小諸侯ノ領地、犬牙錯綜以テ維新ニ至ル、首ヲ回ラセハ叡山塔上、三千ノ僧兵ヲ蓄ヘシ根據モ、此ニアリ、七層臺上、天下ヲ吞吐セント欲セシ信長ノ城址モ此ニアリ、八景ノ勝、天下ニ鳴リ、竹生ノ景、江湖ニ響ク、全國二百七十方里ノ地、悉ク史蹟タリ、勝地タリ、英雄此ニ戰ヒ、俊塔此ニ起ツ、嗚呼天下ノ盛衰英雄ノ興亡常ニ湖國ニ繫ル亦何ソ興趣ノ多キヤ

## 第二章 大津

我國第一ノ淡水湖タル琵琶ノ湖、盆ニ湛ヘテ四十有五方里ノ水、漸ク南シテ漸ク狹ク正ニ盡キントスル處青山縹緲、形仙鶴ノ兩翼ヲ張リタルカ如ク、湖南唯一ノ要地ヲ占ムルモノ之ヲ大津市街トナス

大津市 ハ東膳所町ニ連ナリ、南山ヲ繞ラシテ近ク京都府宇治郡山科村ニ接シ、西長等山ヲ負ヒ、北玲瓏鏡ノ如キ湖面ヲ隔テ、遠ク比良比叡三上ノ諸山ヲ望ミ、戶數六千一百人口四萬一千有リ、町數九十有七、商肆賈舖、軒ヲ竝ヘ屋ヲ列ネ、百貨輻湊ス、古來湖水ノ利ニヨリテ東山、北陸ノ來往ニ便シ、西陸路ヲ通シ、京阪ニ達シ、其繁盛ヲ致セリ、特ニ明治二十三年運河ヲ開鑿シ、西、京都ニ達セシヨリ以來、此利一層ノ便ヲ増シ、鐵路ト相待チテ益、市ノ隆盛ヲ來シツ、アリ、市ハ素ヨリ工業ヲ以テ誇ルヘキ地ニ非ラスト雖モ、製麻會社アリ、麻布ノ產出少ナカラス、北、村落ニ接スル所、蔬菜ヲ出スコト甚多ク、大津蕪ノ名尤著ハル、滋賀縣廳、裁判所、歩兵第九聯隊等ノ諸官衙アリ、若シ夫レ眺望ノ絶佳ナルニ至リテハ世多ク其ノ偉ヲ見ス、長等山上觀音堂ノ邊

ニ立チ、一見睥ヲ放タンカ湖南ノ山水ハ言フモ更ナリ遠ク伊吹ノ高峰ヲ望ミ、水愈碧ニ氣益爽カナルヲ覺ヘン其ノ近傍ニ散在セル名勝古蹟ノ如キ以下別ニ點綴シテ記録スル所アラントス

今ハ滋賀縣ノ首府、近畿ノ要津トシテ、人口四萬ノ上ニ出テ、八馬絡繹タル大津ノ市街モ之ヲ五百年以前ニ顧ミンカ、漁廬蟹戶僅ニ湖邊ニ點在セルニ過キサリシナリ  
天智天皇ノ遷都シ給ヒシ大津宮ハ、今ノ滋賀郡滋賀村ノ地ニシテ、現在ノ大津ノ地ニアラス、平安ノ朝、延喜ノ昔、屢大津ニ御幸アリシコト、國史ニ見ユルモノ是亦前ノ地ナルカ如シ、現大津市カ稍、町形ヲ成スニ至リシハ、天正十三年、豊臣秀吉カ坂本城ヲ茲ニ移シタルトキニ初マリ、文祿十八年、京極高次城主トナリ、食封六萬石ヲ食ム、幾ハクモナクシテ秀吉伏見ニ薨シ、天下漸ク亂ル、慶長五年、高次家康ノ爲ニ此城ヲ守リ、毛利立花等ト戰テ遂ニ降ル、後チ若狹ニ移封ノ命アリ、城ハ慶長六年ヲ以テ膳所ニ移サレタリト雖モ、世治マリ國安ラカナルニ從ヒ、百貨ノ輻湊舊ニ倍シ商業漸ク殷盛ニ赴ク、加フルニ徳川氏此地ニ代官所ヲ置キテ、別ニ領主ヲ置カス、領地ヲ近江ニ有セシ諸侯ハ皆藏屋敷ヲ構ヘテ貢米ヲ此地ニ貯ヘ、之ヲ京阪地方ニ販賣セ

シヲ以テ自然利ヲ享クルコト大ニ、漸次繁盛ヲ來タシ、以テ今日ニ至レリ  
逢阪山 ハ市ノ南方一帶ノ山ヲ云フ、往古山上ニ官道アリ、崎嶇タル阪路ヲ上下スト雖モ世ノ開明ニ伴ヒ、漸ク人工ヲ以テ之ヲ改修シ、現在ノ形トナレリ、彼ノ有名ナル逢阪ノ關ノ址ハ、今ノ上片原町ニアリ、關剗ヲ置カレシハ、桓武天皇都ヲ平安城ニ奠メ、伊勢ノ鈴鹿美濃ノ不破ト共ニ之ヲ三關ト定メラレシヲ以テ起原トス、文徳實錄天安元年ノ條、逢阪ノ關守十二人又寺門ヨリ及壇衆二十人出テ、兵具嚴重ニ鋸リ、金剛力士ノ如ク、忿怒ノ眼ヲ張テ双ヒ居ルトアリ、又日本紀略ニ、延曆十四年閏七月、近江國相阪ノ關剗ヲ廢ストアリ、爾後久シク廢タレシカ、永祿八年、江陽屋形(佐々木家)江西ノ旗頭ニ命シテ逢阪山ニ新關ヲ建テ山内十兵衛尉ヲシテ之ヲ固メシメタルモ、後又之ヲ廢ス、古詠二三ヲ左ニ録ス

古今 音羽山音にききつゝあふ阪の 在原元方  
せきのこなたに年をふるかな  
續古今 色かはるみのと中山秋こへて 定家  
また遠さかるあふさかのせき

關や旅ねの始なるらん

**關蟬丸神社** 上片原町ニアリ、祭神二座、一座ハ猿田彦命、一座ハ蟬丸ノ靈ヲ祭ル、此邊蟬丸ヲ祭ル社多シ、蟬丸ハ姓氏ヲ詳ニセス、式部卿敦實親王ノ雜色ニシテ、常ニ管弦ヲ嗜ミ、能ク琵琶ヲ彈ス、自ラ流泉啄木ノ曲ヲ愛シ、敢テ之ヲ、人ニ傳ヘス、世ヲ述レテ相阪ニ來リ、菴ヲ結ヒテ生ヲ送ル、平素愛玩スル所ノ琵琶ヲ無名ト云フ、蟬丸頭ハ童子ノ如ク、形僧ニ類ス、時人稱シテ仙トナス、博雅ノ三位、和琴ヲ蟬丸ニ習ハント欲シ、此菴ニ通フコト三年、一夜風雨甚タシク、天地爲ニ咫尺ヲ辨セス、蟬丸謂ヘラク三位モ今夜ハ來ルニ由ナケント、既ニシテ三位ノ影依依トシテ菴前ニ在リ、蟬丸其至情ニ感シ盡ク其祕曲ヲ授クト云フ

**義仲寺** 壽永ノ昔、源義仲終焉ノ地ナリ、往時一僧アリ、義仲ノ墳傍ニ一菴ヲ結ビ、義仲菴ト名ツケタルニ、濫觴スト云フ、江源武鑑ニハ、天文二十二年、近江國司佐々木高頼、石山寺參詣ノ歸途、此古墳ヲ拜シ、源家ノ大將軍タリシ人ノ古跡守戸ナカルヘカラスト、一字ヲ建テ食田ヲ寄附シ、堂守ヲ附セラルトアリ、義仲ノ法號ヲ德音院義山

大居士ト云フ、堂前ニ墓碕アリ、表面ニ朝日將軍源義仲公之墓ト刻ス、裔孫義長ナルモノ葦原檢校ト稱シ、大學頭、林衡ニ文章ヲ請ヒ、此碑ヲ建テシト云フ

參考本盛衰記云、去年六月、木曾義仲北陸道を上りしときは、五萬餘騎と聞えしに、今四宮河原を落けるときは、只七騎には過ぎざりけり、粟津の原の終には、主従二騎になりけり、今井兼平あな向の岡に見ゆる一村の松の下に立寄り、心閑に御自害候へ、其程は防矢仕て應て御伴申へしと勸めければ、木曾は今井を振捨て、暇にまかせて歩ませ行く、比は元應元年正月二十日の事とて、つらゝ結べる田を横に打程に深田に馬を馳入云々

**芭蕉翁墳** ハ義仲寺畔、義仲塚ニ隣ル、又茅室ニ翁ノ木像ヲ安置ス、翁俳諧ヲ以テ天下ヲ歴遊シ、其次此寺ニ住シ、芭蕉ヲ裁ニ幽栖セリ、一歳西園ニ遊ハントシテ、大阪ニ下リ、痢疾ヲ得テ、遂ニ船場御堂前花屋ノ客舎ニ歿ス、時ニ元祿七年甲戌十月十有二日、年知命ヲ過クル僅ニ一歳、門人其角丈艸ノ徒、數張棺ヲ難波ヨリ擔テ此ニ葬ル、乃チ遺言ニ基ツク也、寶曆十年ノ頃、京師ノ俳人、五升菴蝶夢、四方ノ俳士ニ檄シテ、此草室ヲ削シ、蕉門三十六人ノ秀句ヲ集メ、其門弟子ノ血縁ノモノヲ求メテ之ヲ書セシ



メ、堂内四方ニ懸ケタリ、蕉翁遺愛ノ椿杖及漫遊圖卷、此寺ニ藏ム

八

義仲寺に翁を葬りて

其角

なきからを笠にかくすや枯尾花

翁のかくれし翌年此に詣て

素堂

志賀の花湖の水それながら

若林強齋 名ハ進居通稱ハ新七強齋ハ其號ナリ、延寶七年七月八日ヲ以テ平安ニ生ル、後故アリテ大津ニ移リ、三井寺ノ支院微妙寺ノ域内ニ僑居セリ、今ノ小關天神ノ邊母及姉一人ノ家族アリ、之ヲ養ハントスルモ、家貧ニシテ其資ニ乏シ、止ムコトヲ得ス、人ノ爲ニ米ヲ搗キ、賃銀ヲ得テ僅ニ一家ヲ糊セリ、而モ姉ハ性來ノ多病、故ヲ以テ他ニ嫁カス、母亦藥餌ニ親ムコト多ク、貧窶困苦備サニ到レリ、去レト強齋ノ好學心ハ少シモ消磨スルコトナク、少閑ヲ偷ミテ書冊ニ親シミ、以テ其理ヲ窮ム、其ノ頃、京師ニ鴻儒淺見綱齋アリ、名聲藉甚ナリ、依テ贊ヲ其ノ門ニ執ラントス、然レトモ家計意ノ如クナラス、到底京師ニ移住シ難シ、而モ一日春夫タルコトヲ辭センカ、一家三口亦食ヲ辭セサルヲ得ス、進退殆ント谷マルト雖モ、強齋ノ意志ノ強固ナル、之

カ爲メニ毫モ其ノ志ヲ曲ケス、京都ニ通學シテ綱齋ノ門下ニ入ル、炎熱燉クカ如キ時、山阪ヲ攀チテ三里ノ長程ヲ走ル、滿身汗ニ濡レテ短葛亦擦ル可シ、強齋謂ヘラク汗臭以テ先生ニ接スル既ニ禮ヲ失ス、泥ヤ之ヲ擦ランカ、汗水ノ流ル、アルニ至ル到底先生ノ講前ニ坐スル能ハス、然レトモ更衣一著之ヲ購フノ資ナキヤ如何セント、苦慮スルコト多時、乃チ一計ヲ按シ、山阪人ナキ路ヲ行クノ間、衣服ハ之ヲ脱キテ刀ニ纏ヒ、裸體以テ之ヲ擔ヒ、正ニ洛中ニ達セントスルノ時、徐ロニ裝ヲ整ヘテ講壇ニ列ス、常ニ家人ニ告ケテ曰ク、若シ刀ニ衣ヲ纏ヒ書ヲ携ヘテ小關越ニ斃レタルモノアルヲ聞カハ、強齋ナリト知ルヘシト、其勞苦精勵具ニ感スヘキナリ、初メ寬齋ト號セシカ、綱齋先生ヨリ強齋ト命名セラレテ之ヲ改ム、強齋謂ヘラク之レ余カ勉強ヲナスヲ以テカク命名セラレシナリト、既ニシテ更ニ謂ヘラク、若シ勉強スルヲ以テ強字ヲ付セラレシトセハ、自然慢心ノ萌シ之ヨリ起ラン、先生命名ノ意ハ、蓋シ此ニアラサルヘシ、汝必ス勉強スヘシトノ意ナラント、刻苦更ニ勵ム、綱齋ノ家平安錦小路ニ在リ、大津ヲ去ル三里、而モ毎晨辰ノ刻ヲ期シテ、子弟ヲ會シ經書ヲ講ス、故ニ強齋ハ常ニ星ヲ戴テ家ヲ出テ、風雨ヲ厭ハス寒暑ヲ避ケス、勉學最モ努ム、故ヲ以テ

學業大ニ進ミ、遂ニ山本復齋、西依成齋ト共ニ、綱齋門下ノ三傑ト稱セララル、ニ至ル年四十大津ヲ去リテ京師ニ歸リ、錦小路ニ僑居シ、師說ヲ祖述スルヲ以テ己カ務トナス、綱齋ノ學ヲ信スル者、皆之ニ從ヒ、其業一時ニ振フ、又神道ノ說ヲ玉木葦齋ニ受ケ、其蘊奧ヲ極メ、兼テ和歌ヲ善クセリ、享保十七年壬子正月二十日、享年五十四歳ヲ以テ歿ス

強齋夙ニ綱齋ニ從ヒテ其薰化ヲ受ク、故ヲ以テ其學常ニ實踐躬行ヲ以テ先キトナシ、心ヲ文辭ノ末技ニ留ムルヲ欲セス、述作甚少シ、友人山本復齋門人ト謀リ、其遺稿ヲ蒐集シテ之ヲ編次シ、若林子語錄ト名ク、墓ハ市内小關三井寺字五本櫻ニ在リ、墓碣ハ寛政八年門人等ノ建ツル所、西依周行之ヲ書スト云フ

園城寺　ハ長等山ト號シ又三井寺ト云フ、寺ハ大津市ノ西、長等山ノ麓ニアリ、長等山ハ南相阪山ニ連リ北比叡山ニ接ス、海拔一千一百尺、又志賀山ノ名アリ古櫻花多カリシト見エ、古詠甚タ多シ

千載

さよ波やなからの山の峯つよき

みせはや人に花のさかりを

藤原範綱

新古今

見せはやなしかのからさきふもとなる

慈　　圓

なからの山の春のけしきを

園城寺ハ、寺門又ハ單ニ寺トモ云フ、天武天皇白鳳二年、弘文天皇ノ皇子大友與多王父皇ノ遺詔ヲ奉シテ之ヲ建立シ、御井寺ト號シ、氏寺トシテ子孫ニ傳フ、御井トハ地ノ東方ニ池アリ、天智天武持統三帝ノ誕生水ニ充テラレタルヲ以テ之ニ名ツクト云フ、殿堂巍巍トシテ莊嚴玲瓏タリ、大友氏衰フルニ及ンテ當寺亦衰頽セリ、清和天皇天安二年、延曆寺ノ僧圓珍、唐ヨリ歸朝シテ、清和光孝陽成三帝ノ戒師トナリ、盛名一世ニ高シ、幾クモナクシテ此寺ヲ修造シ、貞觀元年九月功成リテ、供養ノ法會ヲ修ス、此時御井寺ヲ改メテ三井寺トナス、其意三天皇浴井ノ義ニ取り、又此井水ヲ挹テ三部灌頂ノ闕伽トシ、遠ク慈氏三會ノ期ニ至ラシムルノ義ヲ表示スト云フ、六年弘文天皇ノ後胤、大友夜須麻呂等、一族ト連署シテ、延曆寺ノ別院トシ、天長地久ノ祈ヲ行ハンコトヲ請フ、八年請ヲ聽シ、且ツ講讀師ヲ停メ、圓珍ヲ別當ニ任シ(圓珍ノ事、後詳カナリ)、俗大別當ハ大友氏長者夜須麿、俗別當ハ大伴黑主ヲ補シタリ、之ヲ別當ノ初トナス、後別當ヲ改メテ長吏トナス、長元三年村上天皇ノ孫永圓長吏トナリシヨリ、親王皇親

攝關ノ子孫、當寺ノ長吏トナリ、圓滿院青蓮院實相院ノ門主交之ニ補シ、一派ノ樞機ヲ握ル、後圓仁圓珍兩門徒相争フコトアリ、正曆四年、分離シテ圓珍ノ徒叡山ヲ擯出セラル、尋テ園城寺勢ヲ得テ、獨立セント欲シ、後奏請シテ戒壇院ヲ立ツルコトヲ許サル、延曆寺ノ僧徒等、嗾訴シテ之ヲ破却ス、之ヨリ山門寺門確執シテ相降ラス、永保元年、山徒三井寺ヲ燒ク、堂院僧房一千四百餘宇、一炬烏有ニ歸ス、應徳三年、再興後、山徒ノ爲ニ燒カル、治承ノ變、以仁王ノ舉ニ與シ、平氏ノ爲メニ燒毀セラル、其他屢次災害アリト雖モ、時ニ從フテ之ヲ復セリ、延元二年、足利方ノ營所トナリ、新田氏ノ兵燹ニ罹ル、天文二十一年、江陽屋形佐々木氏ト、大津四宮祭ニ關シ相争ヒ、亦燒毀セラ、文祿元年、豐臣秀吉一旦當寺ヲ破却シテ、寺領ヲ收ム、慶長三年、北政所遺命ヲ奉シテ、寺領ヲ納メ、金堂ヲ再建ス、元和元年、後水尾天皇、往古ノ清涼殿ヲ賜ハル、今ノ釋迦堂是ナリ、徳川家康秀忠等堂宇坊舎ヲ再建シ、以テ今日ニ至ル

✓ 金堂中院 ハ寺域ノ中央ニアリ、本尊彌勒菩薩ノ像、長三寸二分ナルヲ安置ス、像ハ欽明天皇ノ朝、始メテ百濟ヨリ舶載スル所ナリト云フ、圓珍ノ點セシ常燈不斷ノ三燈、今猶其ノ光ヲ失ハス、堂宇ハ慶長三年、北政所ノ創スル所、現今特別保護建

造物タリ

✓ 關伽井屋 金堂ノ西ニアリ、即チ三井ノ名ノ起リシ祝水ナリ、往昔御所御車寄ノ建物ヲ賜ハリ、玆ニ建設シ、後慶長五年、金堂ト共ニ、北政所ノ再營ニ係ル、現今特別保護建造物ニ列ス

✓ 一切經堂 慶長七年、毛利輝元ノ建立ニシテ、輪藏ニ納ムル一切經ハ、文祿征韓ノ役、戰利スル所、堂舎亦特別保護建造物タリ

✓ 三層塔 元大和國比蘇寺ニ在リ、豐臣秀吉之ヲ伏見ノ城内ニ移シ、慶長六年、徳川家康更ニ之ヲ移築ス、中ニ釋迦文殊普賢ノ三像ヲ安ンス、塔ハ特別保護建造物ナリ

✓ 樓門 左右ニ那羅延密迹ノ像ヲ安置ス、各高八尺一寸三分、傳ヘ云フ、運慶ノ作ナリト、世ニ仁王門ト云フ、此門、元甲賀郡西寺ニアリ、慶長六年、徳川家康ノ命ニヨリ、當寺ニ遷ス、今特別保護建造物ニ列ス

大鍋 釋迦堂内ニアリ、世ニ辨慶ノ汁鍋ト云フモノ是ナリ、往昔大衆ノ炊事ニ用キシモノ、如シ、廻リ一丈五尺

古鐘堂 俗ニ辨慶ノ引摺鐘ト稱シ、其名人口ニ膾炙ス、傳ヘ云フ、印度祇園精舎ノ鐘ニシテ轉傳茲ニアリト

觀音堂 正法寺ト號ス、元南院華谷ノ南峯ニアリ、土御門天皇ノ文明十三年、故アリテ此地ニ移ス、西園十四番ノ札所、本尊如意輪觀世音ハ、智證大師ノ作ナリト云フ、堂前眺望殊ニ宜シク、近江八景ヲ一眸ノ中ニ蒐メ、白帆脚下ニ起ル、中秋月ヲ此ニ賞センカ、瀾瀾タル銀潢碧空ヲ、貫キ壯快實ニ言フヘカラス

三井寺登覽

周 南

何來天地動玄陰

落日樓臺試一臨

秋入九江波蕩漾

雲連三越氣蕭森

湘靈鼓瑟思無盡

楚客行吟恨竟深

不識關門風雨夜

幾人操曲遇知遇

寺城ノ坊舎、枚舉ニ遑アラス、其中ニ藏スル寶物亦甚々多シ、國寶トシテハ、彫刻ニ、木造千手觀世音、護法善神、智證大師、黃不動尊、新羅明神、吉祥天善等ノ像アリ、繪畫ニ、絹本著色ノ黃金剛童子、尊星王、多門天、不動明王、八大童子、八大佛頂、曼荼羅、涅槃

像等アリ、其他逸品尠カラス

高觀音 三井寺五別所ノ一ニシテ、園城寺ト寺域ヲ隔ツ、寺ヲ近松寺トイヒ、本尊ハ千手觀音、智證大師ノ作ナリト云フ、山ヲ連ネテ尾藏寺ニ至ル、是レ亦五別所ノ一ニシテ十一面觀世音ヲ安ンス、像ハ國寶ナリ、此邊一帶櫻楓多ク、眺望甚宜シキヲ以テ遊人ノ登攀スルモノ踵ヲ接シ、山間所所ニ亭榭ヲ構ヘテ客ヲ待ツ、殊ニ近時寺域ニ隣リテ長等公園ノ開カル、アリ、一層ノ般盛ヲ來セリ

園城寺の花を見て

基 良

千載 いにしへにかはらさりけり山櫻

花は我をはいかゝ見るらん

三井十景

- 筒井喬松 金堂白櫻
- 新羅夕蟬 唐院夜雨
- 靈窟古鐘 龜塚曉霜
- 琴谷冷瑩 護法丹楓

龍池寒月 正法眺望

✓新羅善神堂 貞觀二年、圓珍勅ヲ奉シ、清和帝御等身ノ善神像ヲ彫刻シテ、玆ニ奉祀シ、當時護法ノ神トナス、堂ハ曆應三年、足利尊氏ノ再建スル所ナリト云フ、像ハ國寶ニ、堂ハ特別保護建造物ニ指定セラレタリ

✓圓滿院 寛和三年ノ創設ニシテ、元平等院ト稱ス、村上天皇第三皇子、入道悟圓親王ヲ開基トシ、爾來金枝玉葉、連綿トシテ御入住アリ、天正十年、門主養慶大僧正遷化ノ後、一時中絶ノ姿ニ歸セシト雖モ、慶長十二年、常尊大僧正中興、寛永十八年三月、明正天皇古御殿及御文庫ヲ賜ハリ、正保四年六月、遷移工ヲ落ス、現在ノ殿舎是ナリ、現今特別保護建造物タリ、當院所藏ノ佛像經卷古文書等甚多ク、殊ニ圓山派ノ名匠應舉ハ、當寺ニ在リテ、祐常大僧正ノ知遇ヲ辱ウシ、七難七福ノ經說ヲ圖ス、誠ニ稀世ノ逸物ニシテ、夙ニ國寶ニ指定セララル

✓智證大師 釋圓珍俗姓ハ和氣氏、少字ハ廣雄、讚岐國那珂郡ノ人、父ノ名ヲ宅成ト呼ビ、母ハ佐伯氏、空海僧正ノ姪ナリ、其家巨富ニシテ、鄉里之ヲ推重ス、弘仁六年ニ生ル、頂骨隆起、兩眼重腫ナリ、性聰敏、八歳ニシテ能ク因果經ヲ讀ミ、十歳ニシテ毛詩論語

漢書文選等ニ通ス、十四歳京洛ニ入り、翌年比叡山ニ登リテ、僧義真ヲ師トシ、浮圖教ヲ學ブ、天長十年、年十九ニシテ、薙髮菩薩戒ヲ受ケ、山ニ在ルコト十有六年、年三十一ニシテ山ヲ出ツ、其間能ク戒律ヲ護持シ、薰修精練最勵ム、故ヲ以テ、聲譽日ニ高シ、仁壽三年秋、唐商欽良暉國ニ歸ル、圓珍奏シ、請フテ之ト共ニ海ニ航シ、八月、福州ニ入ル、物外良誦法全般若恒羅等ニ謁シテ、或ハ深奥ヲ受ケ、悉曇ヲ學ブ、在唐六年、天安二年、唐商李延壽ノ船ニ乘リ、歸朝ス、其唐ニ在ルヤ、工部郎中李肇及ヒ、慈州ノ人詹景全ト親善シ、智者大師ノ塔國清寺ヲ修シ、止觀堂ヲ建テ、長講ノ所トナス、十二月、京ニ入り、所得ヲ錄シテ表上ス、貞觀五年、灌頂壇ヲ園城寺ニ開キ、六年七月、壇ヲ仁壽殿ニ設ケテ、大悲胎藏ノ灌頂ヲ天皇及ヒ諸大臣ニ授ケ、大日經ヲ講ス、八年五月、園城寺ノ別當ニ任ス、尋テ別當ヲ長吏ト稱ス、圓珍三井寺ヲ中興シテ、寺門派ノ祖ト稱セララル、十年、天台座主ニ補セラレ、元慶七年、法眼和尙位ヲ授カル、仁和二年秋、光孝天皇不豫、圓珍ニ命シテ祈ラシム、驗アリ、寛平三年十月二十九日、齋供常ノ如クニシテ寂ス、年七十有七、叡山南峯ノ東陲ニ葬ル、延長五年十二月、智證大師ノ諡號ヲ賜フ、派祖ノ法ヲ嗣クモノ、康濟尊意良勇等ニシテ、阿闍梨位ヲ受クルモノ百餘人、手度ノ弟子五百餘人

ヲ算ス

新羅義光墓 長等山ノ麓、新羅善神社ノ西南山上ニ在リ、繞ラスニ石柵ヲ以テシ、傍  
ヲ櫻樹ヲ栽エ、園城寺所藏ノ寺徳集ニ曰ク、伊豫守源頼義四人ノ子息アリ、先ツ一人  
ヲ釋氏ニ奉ス、三井西進坊快譽是ナリ、顯密徳高ク、灌頂阿闍梨ニ至ル、一人ヲ八幡大  
菩薩ニ奉シ、石清水ノ祠前ニ冠セシム、八幡太郎義家はナリ、一人ヲ加茂明神ニ奉シ  
其祠前ニ加冠セシム、加茂二郎義綱是ナリ、一人ヲ新羅明神ニ奉ス、新羅ノ祠前ニ冠  
シ、新羅三郎ト稱ス、又義光能ク親父ノ教戒ニ任セ、子息ヲ以テ門徒ニ加入セシム、覺  
義是ナリ、斯カル家庭ニ人ト爲リシ義光ノ釋教ヲ崇ヒシハ、素ヨリ其處ナリ、晚年自  
カラ出家シテ、三井寺ノ北院ニ一堂ヲ建立シ、金光院ト名ツケ、尊法奉佛最勤ム、大治  
二年十一月、奄然トシテ絶ス、年七十有三、今寺徳集ノ記事ニ據リ之ヲ正傳ニ徵スル  
ニ、頼義ノ子、母ハ平直方ノ女、新羅三郎ト稱シ、又館三郎ト名ツク、幼ニシテ弓馬ヲ好  
ミ、長シテ驍勇智謀アリ、左兵衛尉トシテ京師ニ宿衛ス、會後三年ノ役起リ、兄義家屢  
利ヲ失フト聞キ、之ヲ援ケンコトヲ請フ、允サレヌ、然レト友于ノ情、默シ難ク、寛治元  
年八月、遂ニ官ヲ捨テ、陸奥ニ赴ク、義家大ニ喜ヒ、勇氣百倍進ミテ、清原武衡、同家衡

等ヲ討チテ之ヲ亡ホシ、兄ト共ニ京師ニ歸ル、尋テ刑部卿ニ任シ、常陸介甲斐守ヲ歷  
從五位上ニ敘シ、刑部少輔ニ至ル、義光少フシテ音律ヲ好ミ、其精妙ヲ極ム、嘗テ笙ヲ  
豊原時忠ニ學フ、時忠其堪能ニ感シ、持スル所ノ名笙はしりまるヲ與フ、既ニシテ後  
三年ノ役起リ、義光東下スルヤ、時忠之ヲ送リテ從ヒ行ク、義光其心ヲ察シ、謂ヘラク  
「我戰場ニ赴ク、身素ヨリ生還ヲ期スヘカラス、名器亦從テ亡ヒンコト、我本意ニ非ス  
幸ニ之ヲ返納セン」ト、時忠喜ヒテ之ヲ受ケ、別ヲ告ケテ去ル、世以テ美談トナス  
**弘文天皇長等山前陵** 長等山ノ麓ニアリ、由來帝ノ山陵諸説紛紛トシテ決セス、或  
ハ勝所ノ茶臼山ナリト云ヒ、或ハ石山村鳥居川ニ在リト云ヒ、甚シキハ山城國乙訓  
郡山崎ナリト云フ、然ルニ明治九年、本縣滋賀郡ニ陸軍兵舎ヲ設ケラル、ニ當リ、山  
上ノ内字龜丘ト云フ所ヲ發掘セシニ、土中ヨリ劍鏡及曲玉等ノ古物ヲ發見セリ、之  
ヲ園城寺ノ所傳ニ聞ク、三井寺ノ僧教待和尚ト云フモノアリ、平素魚髓ヲ捕リテ之  
ヲ食フ、舊坊ノ遺跡ニ到レハ、唯龜髓ノ殘骨積ミテ丘山ヲナセルヲ見ル、近テ之ヲ熟  
視スレハ、皆悉ク蓮花ナリ、故ニ之ヲ龜丘ト云フト、事素ヨリ無稽ノ説ニ近シト雖モ  
埋藏スル所ノモノ全ク鏡劍ノ類ナリシヲ以テ知事ノ具申ニ依リ、教部省ノ認ムル

所トナリ弘文天皇ノ御陵ト確定シ、方五十間ヲ以テ兆域トセラル、時ニ明治十年ナ  
 リ弘文天皇ハ天智天皇ノ儲君ニシテ、大友皇子ト稱シ奉リ、魁岸奇偉ノ風骨ヲ供ヘ  
 眼中精燿アリ、性至テ聰敏、早ク太政大臣ニ任セラル、是皇子ニシテ大臣ニ任セラル  
 ルノ始ナリ、皇叔大海人皇子アリ、天智帝之ニ大位ヲ禪ラント欲シ給フ、大海人皇子  
 卽チ世ヲ遁レ僧トナリテ高野山ニ入り給フ、因テ大友皇子ヲ召シ、群臣ト共ニ帝前  
 ニ誓ハシメ、天位ヲ禪リテ崩シ給フ、陵土未タ乾カス、壬申ノ難起リ、皇子遂ニ大位ヲ  
 享クルノ禮ヲ行ハスシテ山前ニ崩御シ給フ、時ニ龍算僅ニ二十有五、明治三年諡號  
 ヲ定メラル、天皇文藻アリ、筆ヲ下セハ章ヲナシ、言ヲ出セハ論ヲ成ス、識者以テ其洪  
 學ヲ嘆セシト云フ、五言ノ御詩世ニ傳フ

侍宴一絶

皇明光日月

帝德載天地

三才竝泰昌

萬國表臣儀

述懷一絶

道德承天訓

鹽梅寄真宰

羞無監撫術

安能臨四海

大津城附大津合戰 城址ハ今ノ警察署ノ邊ニシテ、湖岸屈曲ノ度自カラ城濠ノ形  
 勢ヲ存ス、天正十三年、豊臣秀吉坂本城ヲ此地ニ移シ、城櫓ヲ構フ、文祿四年、城主駒澤  
 雅樂頭、上杉景勝ヲ迎フ、十八年、京極高次此ニ居城ス、後食邑六萬石ヲ食ム、高次ノ妹  
 秀吉ノ側室タルアリ、又淀君ト從弟ノ縁アルヲ以テ、秀吉ノ昵近殊ニ深ク、位次連リ  
 ニ進ミ、慶長元年從三位宰相ニ至ル、既ニシテ秀吉伏見ニ薨シ、天下漸ク多事ナラン  
 トス、慶長五年七月、徳川家康兵ヲ率キテ東下シ、上杉景勝ヲ討ツヤ、高次意ヲ徳川氏  
 ニ寄ス、故ヲ以テ直ニ之ヲ大津城ニ迎ヘテ、饗宴ヲ張リ、大ニ其行ヲ盛ニシ、且ツ弟高  
 知ヲシテ軍ニ從ハシム、既ニシテ石田三成等、兵ヲ舉ケテ家康ヲ除カント謀ル、人ヲ  
 シテ高次ニ説キ、且ツ質子ヲ納レシム、高次聽カス、又朽木元綱ヲ遣ハシテ、勸説尤モ  
 勤ム、老臣議シテ曰ク、大津ハ敵地ニ近ク、且ツ要害必シモ百萬ノ軍ヲ拒クニ足ラス  
 然ルニ今大阪ト絶タンカ、其勢支フヘカラス、若カス質ヲ送り、東軍ノ舉動ヲ察シ、旗  
 ヲ反シテ以テ之ヲ拒カンニハト、高次止ムコトヲ得スシテ質ヲ送ル、後數日三成佐  
 和山ニ還ルノ途次、高次ニ謂テ曰ク、浮田毛利ト相議シ、公ヲ以テ北陸道ノ總管トセ

ントス、之レ公家ヲ興スノ兆ナリト、老臣中三成ヲ刺サントスルモノアリシモ之ヲ果サス、遂巡ノ間、三成辭去ス、八月、三成諸軍ト共ニ、北陸道ニ向フ、既ニシテ三成大津ノ守將ニ諭シ、城ヲ納レシム、聞カス、高次ノ意素ヨリ、徳川氏ニアリ、報ヲ得テ、海津ヨリ歸テ、大津城ニ入ル、西軍ノ先隊、立花宗茂等ノ兵粟津ニ陣ス、高次意ヲ決シテ、逢阪ヲ扼シ、大津坂本ノ民倉ヲ燔キ、大ニ城守ノ計ヲナス、宗茂石部ニアリ、變ヲ聞テ、勢多ニ還ル、毛利秀包等、大阪ヨリ到リ之ヲ攻メントス、時ニ淀君女使ヲ遣ハシテ之ヲ諭ス、會、毛利ノ兵、城ニ亂入ス、城兵第三城ヲ保ツ、女使去ル、西軍ノ攻撃甚急ニ、立花宗茂京町口ヲ破ル、山田赤尾ノ諸臣、尾花川口ヲ守リシモ、是レ亦敗レ、第二城ニ入ル、大阪ノ使又來リテ降ヲ勸ム、高次聞カス、既ニシテ西軍高觀音ニ上リ、大砲ヲ以テ天守樓ヲ射ル、高次ノ夫人侍女等震死ス、高次止ムコトヲ得ス、城ヲ致シ、園城寺雲光院ニ退キ、尋テ高野山ニ入ル、幾クモナクシテ、關ヶ原ノ捷報至ル、高次悔恨ノ念禁スル能ハス、深く開城ヲ耻ツ、家康大阪ニ入り、之ヲ召セトモ辭シテ出テス、井伊直政旨ヲ傳フルニ及ヒ、出テ、謁ス、家康曰、卿城ヲ守ル二日ヲ支ヘナハ、近江一國ハ他人ノモノニ非サリシニ、惜ムヘキカナト、乃チ若狹國小濱城ヲ賜ヒテ、八萬五千石ヲ領ス、大津ニ

在テ西軍ヲ阻止スルノ功アルヲ以テナリ

**川瀬太宰** 初ノ名ハ能安後定ト改ム、字ハ子靜、父ハ膳所藩ノ家老、戸田五左衛門、太宰ハ實ニ其ノ五男ナリ、幼ヨリ學ヲ好ミ、博聞強記、殊ニ詩藻ニ巧ニ、藩中其右ニ出ツルモノナシ、嘉永元年、年三十三ニシテ、園城寺ノ有司池田都維那ノ嗣子トナル、其後都維那仕ヲ致シテ、菟裘ヲ大津尾花川ノ湖邊ニ作り、號シテ合秀軒狂菴、又ハ采鈎亭ト呼ビ、之ニ逸居ス、太宰亦從ヒ行ク、後池田氏ヲ他人ニ嗣カシメ、此ヨリ養父實家ノ姓川瀬ヲ冒ス、三年三月、京都聖護院宮法親王ニ仕ヘテ有司トナル、太宰素ヨリ大志アリ、尊攘回天ヲ以テ己レノ任トナス、聖護院宮ニ仕フル亦之カ爲ナリ、初メ養父頗ル餘資ヲ貯フ、其歿スルニ及ヒ、太宰悉ク之ヲ受ク、且ツ其居大湖ニ沿ヒテ人家ニ隔タリ、密談謀議ニ便ナリ、故ヲ以テ慷慨有爲ノ士、來往常ニ此ニ集マル、元治元年九月、太宰志士ト共ニ家ヲ出テ、姓名ヲ變シテ尾川秀軒ト號シ、京師ヲ經テ、因備ノ間ニ遊說シ、更ニ歩ヲ防長ノ間ニ進メテ、七卿ニ謁ス、太宰憤慨シテ時事ヲ論シ、去テ萩ニ赴キ、藩侯ニ謁センコトヲ求ム、時ニ長藩ノ議ニ分レ、俗論黨一時勢ヲ得テ入ルコトヲ得ス、太宰落膽、同志ト別レ、獨リ國ニ歸ル、慶應元年閏五月、聖護院宮ニ伺候シ、翌日



白河越ヲ經テ、大津ノ自宅ニ歸ラントス、捕吏之ヲ探リ、北白川村ニ縛シテ京獄ニ投  
ス、打撃拷問、水火ヲ以テスレトモ實ヲ吐カス、唯口ヲ閉ツルノミ、慶應二年六月遂ニ  
死罪ニ處セララル、年四十八、絶命ノ詞ニ曰ク

吾今死于國 素志終不伸

已矣從容去 九泉多知己

明治二十四年、特旨從四位ヲ贈ラル、初メ太宰ノ捕ヘラル、ヤ、幕吏來リテ家中ヲ搜  
索ス、其妻幸謂ヘラク、夫既ニ殺サルト、乃チ一室ニ入り、七首ヲ以テ喉ヲ刺ス、創淺ク  
シテ殊セス、六月ニ至リ終ニ死ス、世人其貞烈ヲ稱ス

### 第三章 滋賀坂本

大津ノ市街ヲ離レテ北行、西近江路ヲ辿ランカ、西ハ長等ノ山、北ニ互リテ一段高  
ク、比叡ノ絶巔、四明岳ニ連ナルヲ見シ、其間ノ山岳甚タ高カラスト、雖モ連山山城ノ  
國境ヲ歴シ、平野細ク北ニ延ヒテ地漸ク東ニ傾斜シ、東ハ琵琶ノ碧水、汪洋トシテ小  
波ヲ寄セ、漁舟靜カニ蒞渡ノ間ニ止マリ、白帆風ヲ孕ミテ快走スル、越湖東ノ連山、雙

眸ノ間ニ集マリ、真ニ一幅ノ畫圖ヨリモ美ナリト云フヘシ、春日暖カニシテ麥穂正  
ニ出テントスルノ候、歩ヲ長日ニ運ハンカ、煙霞春ヲ籠メテ景趣愈美ニ、天高ク馬肥  
ユルノ時、鈴ヲ郊外ニ曳カンカ、山楓、血ヲ染メ、黃禾正ニ熟シテ、金波渺渺風致益大ナ  
リ、其ノ畫幅中ニアルモノ、滋賀坂本下坂本ノ諸村トナス、人家點點、其間ニ散在シ、純  
然タル農郊ニ過キスト、雖モ仰テ山上ヲ望メハ、堂形塔影、杳トシテ千有餘年山門ノ  
歴史ヲ示シ、俯シテ田圃ノ間ヲ瞰ヘハ、近江朝ノ文化燦然トシテ、當年ノ策源地タル  
コトヲ思ハシム、柿本人麿タラスト、雖モ誰カ近江荒都ノ吟ナカラシヤ、東夷西戎ヲ  
平ケテ、皇風八紘ニ及ヒシ、志賀高穴穗宮ノ宮址モ此ニアリ、唐制模倣ノ大改革ヲ試  
ミテ、我國ニ新生命ヲ附與セラレタル近江朝ノ令ノ出テシモ、此ニアリ、一乘圓頓ノ  
教義ヲ比叡山上ニ唱道シテ、新宗教ノ基礎ヲ樹テ、三千ノ僧兵ヲ蓄フルニ至リシ、大  
勢力ノ發動地モ亦此ニ在リ見來リ思ヒ去リ回顧、二千有餘年、興越感慨綿綿トシテ  
盡クルコトナカシム

志賀里ハ今ノ滋賀村ノ地ナリ古詠左ニ

玉葉 神よいかに都の月に旅ねして

僧正 忠源

おもひや出る志賀の古里

夫木

たちはなの花やはもとの花ならん

光明峰寺關白

香こそむかしの滋賀のふる里

志賀山越 (滋賀村ヨリ京都白川ニ出ル山中越ナリ)

後拾遺

櫻花道みえぬまで散りにけり

橋 成元

いかくはすへき志賀の山こえ

新千載

匂ひ来る風の便を枝折にて

法印定爲

はなに越行しかの山みち

滋賀浦 (大津ヨリ幸崎下坂本邊マテノ浦ヲ云フ)

後拾遺

みるめこそあふみの海はかたからめ

伊勢大輔

吹くたにかよへ志賀の浦風

玉葉

しかの浦や時雨て渡るうき雲に

讀人不知

三上の山を半かくる

新續古今

しかの浦や湖てる沖は霧こめて

後鳥羽院

秋もおほろの有明の月

大伴黒主詞

滋賀郡滋賀村ニアリ古今集六歌仙ノ一人大伴黒主ノ靈ヲ祀ル大伴

黒主ハ大友皇子ノ裔ニシテ後大伴ノ字ヲ用キタリト云ヒ又景行帝ノ時日本武尊

ニ從ヒテ東夷ヲ征伐セシ大伴武日連ノ裔ナリト傳フ何レカ之ヲ詳ニセスト雖モ

此地ヲ領セシコトハ疑ヒナク世人呼テ滋賀黒主ト言ヒシニヨリテ之ヲ證スルヲ

得ヘシ貞觀中園城寺ヲ以テ延曆寺ノ別院トナスニ及ヒ之カ別當ニ補セラル延喜

中宇多法皇石山寺ニ御幸ノ時和歌ヲ獻シテ物ヲ賜ハリシコトアリ又仁和昌泰ノ

大嘗會ニ風俗歌ヲ獻ス黒主尤モ和歌ニ長シ秀吟甚多シ二百四十九歳ノ長壽ヲ保

チタリト云フ

後撰

なにせんにへたのみるめを思ひけん

黒 主

おきつたまもをかつくみにして

大津宮址

滋賀村大字南滋賀ノ地ニシテ今俗ニ御所跡ト云フ天智天皇六年三月

都ヲ近江ニ遷サセ給ヒ志賀ノ大津宮ト名ツケラル之ヲ近江朝ト云フ四民遷都ヲ

喜ハス時ニ怨嗟ノ聲ヲ聞ク十年十一月災アリ火大藏省ノ倉ヨリ出ツ十二月天皇

近江ノ新宮ニ崩シ給フ、弘文天皇ノ世ニ至リ、壬申ノ亂アリ、天武帝都ヲ大和ノ岡本ニ遷シ給ヒ、大津宮廢墟トナル、其ノ間僅ニ七年、宮址遂ニ田圃トナリ、荒涼轉、詩人ノ腸ヲ斷タシムルモノ多ク、遺詠尠ナカラス、殊ニ近傍ニ滋賀ノ花園トテ多クノ花卉ヲ栽エ、叡覽ニ供セシ處アリシモノ、如ク之カ遺詠亦少シトセス、天智天皇、英邁ノ資ヲ抱テ、夙ニ大難ヲ定メ、唐制模倣ノ大改革ヲ企テ、賢相鎌足ノ之ヲ内ニ助クルアリ、上下人心ノ一轉ヲ期セント欲シ、都ヲ近江ニ遷シ給フ、世人此意ヲ諒セス、切リニ其不可ヲ唱ヘ、遷都ノ後亦烏有ノ災アリシト雖モ、著著其歩武ヲ進メテ、近江朝令ヲ布キ、大業殆ント成ルニ暨ンテハ、天龍壽ヲ延ヘス、卒ニ崩御ノ事アリ、大友皇子大統ヲ享ケントシテ、難内ヨリ起リ、天武帝大統ヲ繼テ、大和ニ遷都ス、是ニ於テカ大津宮廢墟トナル

萬葉

近江荒都を過ぐるの歌

柿本人麿

玉手櫛、畝傍の山の、榎原のひしりの御世ゆ、あれまじく、神のこころ、櫻の木の彌繼つきに天の下、知しめしよを、空にみつ、大和を置て、青丹吉、奈良山を越え、いかさまに、おもほしめせか、天さかる、鄙にはあれど、石走る、淡海の國の、樂浪の、大

津の宮に、天の下、しろし召けむ、天皇の、神の命の、大宮は、こころ聞けとも、大殿は、こころといへとも、春草の、茂く生ひたる、霞たつ、春日の、される、百磯城の、大宮所見れば、かなしも

感傷近江舊都作歌

萬葉

古人爾和禮有哉樂浪乃

高市連黒人

故京乎見者悲寸

崇福梵釋二寺遺址 崇福寺ハ、一名志賀山寺、又ハ長等寺ト云ヒ、月晴集に所謂、浪にたくふ鐘の音こそ哀なれ、夕さひしき志賀の山寺ノ吟アリ、枕草紙、春曙抄、八雲御抄等ニ何レモ崇福寺志賀山寺等ノ名見エタリ、寺ハ天智天皇都ヲ志賀ニ遷サレシトキ、種種ノ奇瑞ニ感シ、建立アリシト傳フ、續日本紀ニヨレハ、聖武天皇、神龜十二年十月、二月野洲ヨリ志賀ノ木津ノ頓宮ニ到リ、更ニ志賀山寺ニ幸シテ、佛ヲ禮シ給ヒ、類聚國史ニヨレハ、弘仁六年ヲ以テ、嵯峨天皇、滋賀ノ韓崎ニ幸シテ、崇福寺ヲ過キリ給フ時ニ、大僧都永忠、護命法師等衆僧ヲ率キテ、門外ニ迎ヘ奉ル、天皇乃興テ降リテ、堂ニ升リ佛ヲ禮シ給フト、其他延喜式等此寺ニ關シテ載スル所ハ、天智天皇ノ御靈ヲ供

養スルヲ以テ一義トシ、寺領等亦頗ル多ク、高僧碩徳交、相住シ、屢朝廷ノ祈願禳災ヲ  
 籠メ、金堂講堂ヲ初メ、堂塔僧房葺ヲ竝ヘ、大津宮荒レタリト雖モ寺宇獨リ燦然トシ  
 テ其美ヲ樂波ニ映シタルカ如シ延喜二十一年十一月、佛閣火アリ、幾クモナク之ヲ  
 復シテ供養ノ典アリ、康保二年九月、鳥有亦起リ、治安二年、天喜四年、永保元年、長寛元  
 年等、屢回祿ノ災ニ罹リ、遂ニ之ヲ回復スルノ途ヲ失シ、崇福寺ヲ引移シテ國城寺ノ  
 一部トナシ、當寺全ク廢ス、今滋賀郡滋賀村大字滋賀里ノ地、炊煙淡ク、松杉年古ル處  
 諸堂ノ遺址僅ニ其名ヲ存スルノミ、梵釋寺ハ其遺跡猶且ツ之ヲ知ルニ由ナシト雖  
 モ堂塔ノ燦然タルモノアリシコトハ史實ニヨリテ明カナリ、寺ハ延暦五年桓武天  
 皇ノ創立ニシテ、梵王帝釋二天ノ像ヲ安スルヲ以テ此號ヲ付ス、弘仁六年四月、嵯峨  
 天皇、崇福寺ヨリ此寺ニ幸シ、輿ヲ駐メテ、時ヲ賦シ、皇太弟及群臣之ニ和シ奉ル者多  
 シ、十一年閏正月、銅四王ノ像ヲ遷ス、十四年九月、近江ノ水田一百町、下總越前ノ封戶  
 等ヲ修理供養ノ料ニ充ツ、嘉祥三年二月、天皇不豫、近江國ニ下知シ、殺生ヲ禁斷シ、梵  
 釋寺ニ於テ延命法ヲ修セシメラル、崇福梵釋ノ二寺、往古ハ大官寺ニ列シ、伽藍宏壯  
 ニシテ大刹ナリシト雖モ中世以後衰頽シテ址ヲ止メス、唯梵釋寺ハ崇福寺ノ傍ナ

リシコトヲ聞クノミ

唐崎 古ハ韓崎ノ字ヲ用キ或ハ可樂崎幸崎等ノ字ヲ充ツ、下坂本村ノ南湖中ニ突  
 出シタル一角ナリ、樂波靜カニ蘆葭ノ梢ヲ洗フ處、巨松一株縱横ニ盤屈シテ、蟠龍踞  
 虎ノ狀ヲナシ、幹圍三十尺、東西枝幹ノ延長約百六十尺、南北約百五十尺ニ及フ、以テ  
 其巨大ヲ知ルヘシ、唐崎ノ夜雨ハ、近江八景ノ一トシテ人口ニ膾炙ス、而モ此地單ニ  
 松ヲ以テ名アルノミナラス、史上又赫赫ノ名アリ、誠ニ湖南ノ名蹟ト云フヘシ、松下  
 唐崎神社アリ、按スルニ、日吉記ニ曰ク、社務ノ上祖、琴御館宇志丸宿禰、常陸國鹿島ヨ  
 リ上洛シ、江州志賀郡三津ノ濱ヲ以テ居住ノ地トナシ、之ヲ唐崎ト號ス、一日神アリ  
 告テ曰ク、此地ニ鎮座スヘシ、宜シク勝地ヲ求メヨト、宇志丸曰ク、唐崎ノ湖上五色ノ  
 波起ル、神歌ヲ咏シテ宇志丸ニ傳フ、曰ク、大伴の三津の浦わをうちさらしよりくる  
 波の行へしらすもト終リテ舟ニ乘リ、松梢ニ上ル、宇志丸之ヲ見テ西北ノ山下ニ勝  
 地アリト云ヘハ、神忽チ去リテ比叡辻ノ浦ニ至ルト、此社ヲ女別當ノ社ト云フ、琴御  
 館ノ妻ニシテ、舒明天皇ノ世之ヲ祭ルト云フ、又日本紀略ニ桓武天皇延暦二十三年  
 二月、此地ニ御幸アリ、四月又行幸ノ事アルヲ載セタリ、又類聚國史ニ嵯峨天皇、弘仁

六年四月ヲ以テ韓崎ニ行幸ノ事ヲ記ス、此地又七瀬被ノ一ニシテ、難波、田裝島、河後以上攝津大島、橋小島以上山城、佐久那谷、近江ト共ニ其名高ク、今ニ毎歲六月二十六日ヨリ晦日マテ祭事ヲ行ヒ男女ノ參詣踵ヲ接ス、之ヲ御手洗ト稱ス

續世繼

きのふまで御たらし川にせしみそき

上西門院

志賀の浦波たちそかへたる

拾遺

御被するけふ唐崎にをろす網は

平祐峯

かみのうけ引くじるしなりけり

唐崎ハ、以上ノ事實ニヨリテ單ニ其名ヲ擅ニスルノミナラス、一ツ松ハ唐崎ノ生命ナリ、松ハ翠御館舒明天皇ノ朝始メテ之ヲ庭前ニ植エ、軒端ノ松ト云フ、日本奇跡考ニ辛崎一松ハ一本ナリト謂フノ謂ニアラス、此松ハ一莖ニ葉一ツアル故ナリト、青蓮院尊朝親王ノ、唐崎松ノ記ニ、此ノ松ハイツゾヤノ大風ニ倒レテカタハカリモ殘ラス侍レハ、御幸ノ神威モ事絶ヘヌルヤウニ世ニモ言ヒ合ヘリ、爰ニ新莊駿河守直頼トテ、文武ノ士アリ、五常モ自カラ備ヘタル人ナリ、サレハ大津ノ城郭ヲ預ケ給フ、其側ニ松菴雜齋トテ二人アリ、此主ノ後見ニテ相副ハレシカ、彼松ノ事、時時悔テ、弟

ノ雜齋イデ之ヲ栽ントテ、家中ノ者ニ言付テ、風情アル松ヲト尋ネラレシニ、辛フシテ掘リ求メ栽エラレ、周リニハ垣ヲ結ヒ、如何様ニモゲニシケレハ、往來ノ人モ目留ヌハ少シ、時ニ天正十九年卯歲ノ秋ノ末ナリト、江源武鑑ニ曰ク、唐崎ノ一松、亂ノ世兵ノ爲ニ枝葉ヲ伐リ採ラレテ枯レシカハ、佐々木屋形名木ノ枯レシコトヲ嘆キ、滋賀ノ百姓等ニ命シ、山門無動寺山ノ松ヲ移シテ此地ニ栽エ、松下ニ別當明神ノ宮ヲ建立ス云云ト又一説ニ松ハ天智天皇ノ御世、初メテ栽ユル所ナリシカ、天正九年大風ノ爲ニ倒レシヲ以テ新莊直頼松ヲ植エ繼カシムト、諸説紛紛トシテ歸一セスト雖モ、現今ノ老松ハ、今ヨリ約三百年前新莊直頼ノ栽エタルモノトスルヲ當レリトスヘキカ如シ、今ヤ老幹四方ニ盤互シ、翠蓋地ヲ覆ヒ、數百ノ支柱ヲ以テ枝ヲ支フト雖モ、近時著シク枯衰ノ兆アリ、眞ニ惜ムヘキナリ

新古今

さゝ波や志賀の濱風ふりにけり

藤原俊成

たか世にひける子の日なるらむ

新後選

さゝ波や神代の松のそのまゝに

前大納言爲氏

昔なからの浦風そふく

新千載

百年をやたひおくりし神代より

三四

祝部 成繁

風雅

辛崎やかすかに見ゆる真砂地に

從二位爲子

まかふ色なき一もこの松

夜の雨に音をゆつりて夕風を

近衛 政家

よそに名たふる辛崎の松

懷風藻

大納言直大二中臣朝臣

隴上孤松翠

凌雲心本明

餘根堅厚地

貞質指高天

弱枝異高艸

茂葉同柱榮

孫楚高貞節

隱居脫笠輕

羅山子道春

辛崎雨暗浪洶々

起聽簾聲不聽覺

半夜孤蓬唯攪枕

明朝問恙一株松

草山 元政

一樹亭々湖水垠

烟薰雨染翠猶存

夜來蕭怨詩人恨

鐵作吟腸亦斷魂

東坂本古城 下坂本村今津堂ト稱スル地ヲ云フ、或ハ云フ壺笠山ノ地ナリト、織田  
 信長近畿平定ノ志ヲ以テ切りニ之ヲ畧ス、會叡山ノ僧徒、淺井長政、朝倉義景等ト戮  
 カシ、信長ヲ攻滅セントス、信長之ヲ聞キ大ニ怒リ、進テ淺井、朝倉ヲ攻メ、且ツ兵ヲ以  
 テ延曆寺ヲ燔キ、山僧ハ少長トナク之ヲ塵殺ス、滿山爲ニ蕩然タリ、時ニ元龜二年ナ  
 リ、信長猶以テ足レリトセス、城ヲ山下ニ築キ、明智光秀ヲ城主トシ、滋賀郡ノ地十萬  
 石ヲ賜フ、明智氏ハ、美濃ノ人、土岐氏ノ族ナリ、光秀通稱ヲ十兵衛ト稱シ、父ヲ光綱ト  
 云フ、光秀幼ニシテ孤ナリ、諸州ヲ巡リテ朝倉、細川ノ諸氏ニ仕ヘ、永祿九年ヲ以テ信  
 長ニ仕ヘ、擢用セラレテ士隊長トナル、連リニ戰功アリ、元龜二年、坂本城ニ封セラレ  
 天正元年、高島郡ノ地ヲ併セ賜ハリ、二年從五位日向守ニ敘ス、尋テ信長ノ命ニ依リ  
 惟任氏ヲ稱ス、且ツ自ラ丹波一國ヲ取ラントス、信長之ヲ許ス、七年波多野秀治ヲ攻  
 ムレトモ降ラス、和ヲ議シ母ヲ送テ質トス、乃チ秀治及其弟秀尙ヲ捕ヘ、安土ニ送ル

信長之ヲ磔ス、秀治ノ部下怒テ光秀ノ母ヲ殺ス、是ニ於テ光秀信長ヲ恨ム、且ツ事ヲ以テ信長ニ慍カラス、會、徳川家康安土ニ至ル、信長光秀ニ命シテ之ヲ饜セシム、其事未タ畢ラス、又秀吉ノ援軍ヲ命ス、光秀憤然器具ヲ湖中ニ投シ、坂本ニ入り、又龜山城ニ歸ル、密ニ宿臣ト謀リ兵ヲ以テ信長ヲ京師本能寺ニ襲ヒテ之ヲ弑シ、又二條城ヲ攻メテ信忠ヲ殺シ、安土城ヲ取り、然シテ後京師ニ入り、市井ノ戸租ヲ免ス、既ニシテ羽柴秀吉ト山崎ニ戦ヒ、大敗、遂ニ土寇ノ槍手ニ罹リテ小栗栖ニ死ス、時ニ從弟光春安土ヲ守リシカ、變ヲ聞キ逃レテ坂本ニ歸ル、敵兵來リ攻ム、遂ニ自殺シテ城陷ル、後秀吉此城ヲ大津ニ移ス、初メ明智光俊山崎ノ合戦ニ敗レ、坂本城ニ落チントシテ大津ニ至ル、會、敵將堀秀政ノ爲ニ圍マレテ行クヲ得ス、止ムヲ得ス、馬ヲ湖中ニ乗入レ威風堂堂、湖上ヲ互リ唐崎ノ松ノ汀ニ著ス、其術ノ巧妙ナル敵ナカラ之ヲ嘆シテ追跡セサリシト云フ、世以テ美談トス

坂本古戰場並森可成墓 墓ハ來迎寺ノ境内ニアリ、五輪ノ塔苔寂ヒテ可成院心月淨翁居士靜ニ此ニ眠ル、墓碑ノ裏面左ノ刻字アリ

元龜元年九月二十日

森三左衛門尉源可成

雅丈坂本合戰之時於

瀬戸在家討死焉于時

當寺住持眞雄上人令

悲歎之以其死體葬于

此地者也

可成姓ハ源名ハ三左衛門父ヲ重可ト云ヒ、美濃ノ人ナリ、初メ齋藤氏ニ仕ヘ、後チ織田信長ニ仕フ、元龜元年九月、淺井長政、朝倉景鏡、兵二萬八千ヲ勸シテ志賀ニ向ヒ小塚山ニ陣ス、時ニ六角義秀モ亦大軍ヲ以テ湖南ニアリ、旌旗江風ニ翻ヘリ、可成其ノ間ニ介シテ士卒湖岸ニ據塞ス、當時可成志賀ノ宇佐山ニ在リ、手兵五百ヲ分チテ山林ニ伏セ、敵ノ不意ニ備ヘ自カラ二百餘騎ニ將トシテ比叡辻ニ向フ、既ニシテ織田信治、京師ヨリ山中越ヲ經テ可成ニ應援シ、南北敵焰ノ盛ナルヲ見、手兵半ヲ分チテ志賀村穴太村ノ邊ニ伏セ、以テ南軍ニ備ヘ、半ヲ率キテ可成ト共ニ北軍ニ當ル、然ルニ北軍急ニ迫リ來ル、信治可成青地泰資ト共ニ苦戰最モ努ム、會、淺井氏ノ將淺井石

見、大野木土佐、長濱ヨリ湖上ヲ渡リテ坂本ニ著シ、直ニ可成ノ軍ヲ横撃スルアリ、朝倉景健亦山下ヨリ來リ突ク、可成前後左右ニ敵ヲ受ケ、今ハ是迄ナリト決心シ北莊土佐守ノ陣ニ突入シ、遂ニ石田某ノ爲ニ殺サル、信治泰資皆此役ニ死ス、時ニ元龜元年九月二十日ナリ、湖面ヲ互ル軟風、徐ロニ松嶺ニ和スル所、當時鎧冑ノ響ヲ偲フ誰カ悚然ノ感ナカラシヤ、森子爵(元三日月藩主)ハ可成ノ裔ナリ

来迎寺 坂本村大字比叡辻ニアリ、桓武天皇延暦九年傳教大師ノ草創スル所、藏教院ト號ス、一條天皇ノ御宇、長保三年横川楞嚴院ノ惠心僧都、此地ニ於テ彌陀來迎ニ感シ、自カラ其儀相ヲ畫キ、精舎ヲ建テ、彌陀ノ木像ヲ安置ス、是ヨリ寺號ヲ紫雲山來迎寺ト改メ、念佛弘通ノ道場トナス、應仁大亂ノ後、洛東岡崎ニアリシ元應國清寺ヲ當寺ニ合シ、本尊藥師ノ像竝ニ法具一切ヲ當寺ニ移ス、元應寺ハ元後宇多天皇北白川ノ離宮ニシテ、傳信和尙ニ賜フテ寺トナシ、高貴尊業ノ受戒アリシ名利ナリシカ兵亂ノ爲鳥有ニ歸セシヲ以テ、之ヲ併合セシメラレシモノトス、天正五年九月、明智光秀、坂本ヲ領スルノ時、佛供料七十八石九斗二合ヲ寄進シ、天正十一年三月、丹羽長秀ハ、寺領七十八石九斗ヲ進ム、慶長十年後陽成天皇當寺ニ行幸アリ、秀盛和尙ノ戒

師ニヨリ受戒アラセラレシコトアリ、其他金枝玉葉ヲ始メトシ、攝關將相ノ尊信甚渥カリシハ、當時所藏ノ寶物、古文書ニ依リテ之ヲ徵スルヲ得ヘシ、本尊ハ彌陀釋迦藥師ノ三像ヲ安シ、開山堂ニハ惠心ノ像アリ、左右ニ徳川家康僧天海ノ像アリ、客廳八景ノ間、龍虎ノ間ハ狩野探幽ノ畫ク所、七賢ノ間ハ尙信、四季ノ間ハ政信ノ畫ナリ、諸堂斐ヲ竝ヘ、何レモ希代ノ名畫奇品ヲ藏ム、表門ハ坂本城門ニシテ、陣鐘ト共ニ光秀ノ寄附スル所、庭園亦頗ル數奇ヲ凝セリ

東照宮 比叡山麓ニ在リ、二重ノ石階ヲ攀チテ石ノ鳥居アリ、丹彩青楹目ヲ奪フモノ、之ヲ東照宮トナス、寛永年間、僧天海ノ建立スル所ニシテ、徳川家康ノ靈ヲ祀ル、傍ラニ天海僧正ノ廟アリ、天海姓ハ船木氏、陸奥ノ人ナリ、年初メテ十一祝髮、十四歲叡山ニ登リ、南光坊ニ住ス、或ハ云フ足利義澄ノ子ニシテ母ハ華名氏ナリト、關東檀林ノ八大寺ヲ經歷シ、徳望一世ニ高シ、慶長十七年、初メテ徳川家康ニ謁シ、大ニ家康ノ崇信ヲ受ケ、屢、顧問ニ答ヘ、獻策スル所甚多シ、寛永年中、天海徳川氏ニ請ヒ、江戸忍岡ニ一寺ヲ建設シ、寛永寺ト云フ、之ヲ比叡山ニ比シ、東叡山ト稱ス、家康秀忠家光三代ノ崇敬ヲ一身ニ集メ、幕府ノ覇業始テ固シ、寛永二十年十月二日寂ス、年百三十、慶安



元年四月慈眼大師ノ諡號ヲ賜フ

滋賀院 元和元年慈眼大師後陽成帝ノ高閣一字ヲ賜ハリテ創建スル所境内方二町餘親王門跡ノ室ナリ地西ニ山ヲ負ヒ東僅ニ平野ヲ隔テ、湖面ヲ望ム湖東ノ峯巒眼下ニ集マリ白帆風ヲ孕テ其間ヲ走ルヲ見ルヘク淙淙ノ溪水自カラ神ヲ沈ム加フルニ境内櫻楓ニ富ミ四時ノ眺望飽クトキナク誠ニ幽邃高雅ノ聖地ナリ

近江國滋賀郡坂本滋賀院者大猷院所致建立也執奏以爲親王門跡之室末代不可令退轉也因茲同郡比叡辻村之内東照大權現宮領二百石慈眼大師堂領五十石同郡雄琴村七百五十八石八斗二升餘比叡辻村之内百九十二石七斗九升餘穴太村之内四十八石三斗八升餘合千石門跡領石此内二百都合千二百五十石事任明曆元年九月十七日先判之旨寄進之訖永不可有相違可爲檢斷使不入三地但背國法輩者非制限者從先規守所被定置條數並年中行事配當目錄之旨諸役勤行無怠慢可被抽國家安泰武運長久之精祈之狀如件

貞享二年六月十一日

綱 吉 印

✓日吉神社 坂本村ニ鎮座ス比叡山麓大宮川ノ邊溪流涓涓トシテ清ク白沫岩ヲ啣

ミテ玉ヲナス處老杉古檜山脚ヲ襲ヒ山氣靜邃神殿碧ニ葉隠レテ晝猶暗ク神威愈高キヲ覺ユ本宮ハ大山咋神ヲ祭ル清和天皇貞觀元年正月從五位上ヲ授ケ陽成天皇元慶四年五月從四位上ヲ授ク後朱雀天皇長曆三年官幣ヲ奉シ二十二社ニ加列ス壽永二年正一位ヲ授クト是ヨリ先延久三年十月後三條天皇此ニ行幸アリ僧官ヲ置カレ爾來白河堀河鳥羽崇徳後白河二條高倉後鳥羽後嵯峨後深草後宇多後醍醐ノ諸帝何レモ行幸ノ事アリ又足利義輝ハ此ニ加冠ノ式ヲ行ヒ六角定頼加冠者タリシコト載セテ史上ニアリ殊ニ後醍醐天皇延元元年正月東坂本ノ行宮ニアリ官軍ノ集マラサルヲ憂ヒ給ヒテ宸筆ノ願文ヲ大日吉社ニ奉リ同年新田義貞皇太子ヲ奉シテ越前ニ赴ク時累代ノ寶刀鬼切ヲ神前ニ納メテ戰勝ヲ祈ル等朝野ノ崇敬厚シ若シ夫レ院政時代神輿振ノ嗽訴ノ如キニ至リテハ史上赫赫ノ事蹟以テ叡山僧徒ノ橫暴ヲ知ルヘシ建久三年加茂臨時祭ニ準シテ臨時ノ祭典ヲ行ハシム順徳天皇ノ建保元年ヨリ臨時祭ニ殿上ノ使アリ此頃ヨリ恒例ノ祭祀トナル後屢勅命ニヨリテ社殿ノ造營ヲ行ハル祭典ハ今ニ至リ四月ヲ以テ大祭ヲ行フ其盛ナルコト祇園會ノ如シ昔ハ陸路唐崎マテ神輿ヲ渡御セシカ延文年中大雨連旬湖水大

ニ漲リテ、唐崎ノ邊沈没セシヨリ、乘船神與渡御スルノ儀起リ、永ク恒例トナル、神與七基ニシテ其行事頗ル亂暴ヲ極メ、坂本法師甲冑ヲ帶シテ之ヲ警護シ、日吉ノ神與ハ血ヲ見サレハ渡ラストノ諺アルニ至ル、以テ僧兵ノ横暴ヲ見ルヘシ、今ヤ神佛其祭リヲ異ニシ、山法師亦當年ノ意氣ナク、奉齋其時ヲ失ハス、神威愈、嚴カニ、祠前ノ櫻樹笑ヲ呈スルノ朝、楓葉血ヲ染メテ錦ヲ飾ルノ夕、風韻ノ士踵ヲ接シ、賽客肩ヲ摩ス又昭代ノ餘澤ト云フヘキナリ

風雅

世々をへてあふく日吉の神かきに

為相

こゝろの幣をかけぬ日そなき

新拾遺

あひにあひて守る日吉の數々に

祝部行親

七つの道の國さかふらじ

續後拾遺

行めぐり照す日吉の影なれば

民部卿為敬

かきりもあらじしきしまの道

西教寺 大窪山智善院ト號ス、推古天皇二十六年高麗僧惠茲惠澄ノ爲ニ創開スル所、上宮太子ヲ開基トス、後土御門天皇文明十八年僧真盛之ヲ重修セリ、天台宗真盛

派ノ本山ニシテ、五百餘宇ノ末寺ヲ有スル一大淨刹ナリ、創創以來、公武ノ歸依甚渥ク、慶長五年九月十九日、徳川家康境内禁制ノ札ヲ下付ス、元和三年九月十一日、坂本村ノ内九十石ヲ寺領ニ付ス、方丈安置スル六尺餘ノ藥師佛ハ、粟田ノ法勝寺ニ在リシモノヲ移セルナリ、寶物ニハ、惠心僧都ノ筆ニ成ル觀經曼荼羅外數十種アリ、孰レモ國寶ニ指定セラル、境内土地高燥ニシテ、眺望絶佳、楓樹數幹、錦ヲ織ル處、風致最佳ナリ、寺域ニ明智光秀及豊臣秀頼ノ臣米田監物ノ墳墓アリ

僧真盛ハ、伊勢國一志郡ノ人、紀貫之十七世ノ孫ナリ、國司北畠具教ニ仕フ、年初メテ七歳郡ノ光明寺盛源ニ就テ内外諸典ヲ學ヒ、十四歳髮ヲ削リテ、名ヲ真盛ト改メ、十六歳尾張ニ遊學シ、又伊勢大廟ニ參籠シテ修學ノ成功ヲ祈願シ、更ニ叡山ニ登リテ西塔ノ慶秀ニ師事ス、時ニ年十九歳ナリ、真盛素ヨリ英邁ノ資、加フルニ練磨研鑽甚タ勉メ、二十餘年間嘗テ一回トシテ下山セシコトナシ、台密二教ヲ研學シ、造詣極メテ深シ、應仁元年、阿闍利位ニ進ミ、更ニ權大僧都ニ至ル、而モ僧階累進ノ如キ、毫モ真盛ノ喜フ所ニアラス、唯求道ノ心日ヲ追フテ盛ナルノミ、當時僧風ノ墮落ト世態ノ腐敗ハ頗ル上人ヲシテ奮起スル處アラシメタリト雖モ、深ク自カラ韜晦シテ、黒谷

ニ隠レ、修練愈勵ム、十八年、山麓坂本生源寺ニ於テ法筵ヲ張ルヤ、道俗四方ヨリ雲集ス、時ニ年四十四、之ヨリ西教ノ廢寺ヲ興シ、佛殿方丈鐘樓寮舍四十餘宇、暮月ニシテ舊觀ヲ改ム、爾來法錫ヲ四方ニ飛ハシテ圓戒稱名ノ二門ヲ弘通ス、緇素其德ニ歸ス、後土御門天皇召シテ圓戒ヲ受ケ給フニ至ル、明應四年二月、加賀ニ巡錫中、俄然病ヲ發シ、寡欲清淨專勸念佛ノ八字ヲ遺訓トシ、端坐合掌溘焉トシテ逝ク、年五十有三、明治十六年慈攝大師ノ諡號ヲ賜フ

比叡山 城江二州ニ跨カリ、海拔二千八百尺、頂上ヲ四明岳ト云フ、古來日枝、稗枝、比枝等ノ字ヲ用キ、延曆以降、佛說ヲ取リテ天台山四明洞、鷲山ト呼ビ、長嶽北嶺台嶺都富士ト唱フルモノアリ、詠歌ニハ我立杣ト云フ峯上ハ樹木少ナク茅篠叢生ス、山水清暉ヲ含ミ、千里目ヲ極ム、西南ヲ望メハ京洛ノ市街直下ニ在リ、數萬ノ人家風煙ノ間ニ隱見シ、加茂大堰ノ二流、愛宕高雄ノ連峰ト互ニ相形映シ、雲端脈脈トシテ淀川帶ヲ布クカカ如ク、幾甸ノ諸國遠ク渺茫ノ間ニ連リ、近ク東南ノ脚底ヲ顧ミレハ湖南ノ勝景悉ク目睫ノ間ニ迫リ、琵琶ノ樂波濛濛トシテ一葦帶水ノ如シ、三上岡山ノ翠樹、比良伊吹ノ黛色、竹生多景ノ鳥影亦以テ指點ス可ク、四面洞開遮蔽ヲ見ス、誠ニ城

江二州ノ絶勝ニシテ、登者雄大ノ氣勃然トシテ起リ、氣神自ラ外ニ飛フ、往昔平將門藤原純友ハ共ニ此山ニ登リ、俯シテ皇城ヲ瞰テ曰ク、壯ナル哉、大丈夫當ニ此ニ居ル可カラサランヤ、吾他日志ヲ得ハ公ハ藤原氏能ク我カ關白タレント、是ヨリ將門天位ヲ覬覦スルノ念ヲ生シ、遂ニ天慶ノ亂ヲ釀スト云フ

拾玉

我山は花の都の長に

慈

鎮

鬼ゐる門をふさぐとそさく

延曆寺 比叡山上ニアリ、天台宗ノ總本山ニシテ、比叡山ト號ス、又比叡山寺ト云フ世ニ山門又單ニ山ト稱ス、寺ハ桓武天皇延曆四年七月、僧最澄比叡山ニ登リテ、草舎ヲ縛シ、法華金光明等ノ諸大乘ヲ讀ミ、大願ヲ發シ、七年山頂ニ一字ヲ創立シテ、比江山寺ト號シタルニ起因スト、雖モ最澄荆棘ヲ拓キタルニアラス、此山亦雲煙ニ隱レタル僻陬ナラスシテ、夙ニ宮舎ノ存在セシモノアリシコト、左ノ二首ノ詩詠ニヨリテ明カナリ

懷風藻

和藤江守詠禪叡山先

考之舊禪處柳樹之作

近江惟帝里 神叡寔神山 山靜俗塵寂

谷間眞理等 於穆我先考 獨悟闡芳緣

寶殿臨空構 梵鐘入風傳 煙雲萬古色

松柏九冬專

日月荏苒去 慈範獨依依 寂寞精禪處

俄爲積艸堦 古樹三秋落 寒草九月衰

唯餘兩楊樹 孝鳥朝夕悲

當時ノ比江山寺ハ即チ全山ノ樞軸根本中堂ニシテ後一乘止觀院ト改ム二十年正月勅シテ年分度者ヲ給ヒ毘盧遮那經摩訶止觀兩業ヲ試ム嵯峨天皇弘仁二年七月法華三昧堂ヲ建ツ九年左大臣古麻呂ヲ遣ハシテ寺域ヲ檢シ四至ヲ定ム十四年二月比叡山根本中堂ヲ延曆寺ト改メ天長元年六月始テ僧義眞ヲ以テ天台座主ニ補ス二年近江ノ正稅二萬束ヲ賜フ十四年始メテ定心院十禪師ヲ置キ毎日大般若經ヲ轉讀シ闕アラハ才行ヲ撰テ補セシム貞觀十八年八僧ヲ寶幢院ニ置ク元慶五年大浦莊二十八町ヲ寄セ文殊樓ノ七軀大小文殊竝ニ五佛ノ燈油料トナス七年

寶幢院別當ヲ置キ院中ノ雜事ヲ掌ラシム仁和二年正稅二萬束ヲ出舉シ子錢ヲ以テ西塔院ノ燈油料ニ充ツ延喜元年宇多法皇當寺ニ行幸アリ土地ヲ賜フテ燈油料ニ充テシメラル二年再ヒ行幸ノ儀アリ舍利會ヲ設ク延長八年白檀五大尊ノ像ヲ造ル承平六年延命院ヲ建立シ天曆三年正月根本中堂火災ニ罹ル康保三年又火アリ永延二年一條天皇當寺ニ幸シテ灌頂戒ヲ受ケ給フ永祚元年九月僧餘慶ヲ以テ座主トス山徒服セス勅使ヲ拒ム十月勅シテ前座主尋禪ニ封百戸ヲ賜ヒ使ヲ遣ハシ僧徒ノ罪ヲ赦ス康平六年實相院ヲ建ツ治曆元年金光明經一千部ヲ慶ス延久三年總持院火アリ四年御願寺一字ヲ建立ス皇室ノ寵遇尊崇ハ以上ノ記事ニ止マラス天元二年八月左辨官ヨリ延曆寺堂塔修理ノ爲メ東坂本竝ニ三津濱苗鹿村住人臨時雜役ヲ免除スルノ宣旨ヲ下シ六年九月更ニ天台山東坂本三津苗鹿住人臨時雜役ヲ免除スルノ國符ヲ下サル寛和二年二月延曆寺ノ請ヲ以テ近江大津以北衣川郷以南ノ漁獵ヲ禁スルノ令アリ如斯歷代ノ尊敬愈渥ク所領從テ多キヲ加ヘ財政豐ナリシヲ以テ多クノ僧兵ヲ養ヒ山法師ト稱シ少シク意ニ滿タサルコトアレハ忽チ嗽訴ヲ企テ或時ハ日吉ノ神輿ヲ振テ暴威ヲ逞フシ屢次以テ事ヲ遂ケタリ

其横暴院政時代ヲ以テ極トスヘシ、天長十年天台座主義眞寂スルヤ、圓珍ヲ以テ替補セントス、大衆聽カスシテ争擾ス、朝廷止ムコトヲ得ス、圓珍ヲ罷ム、圓珍自ラ三井寺ヲ中興シテ天台ノ別院トナス、後世三井寺獨立シテ戒壇ヲ設クルヤ、延暦寺聽カスシテ相攻伐ス、山門寺門ノ争之ヨリ起リ、歴世亂止ム時ナシ、元弘元年後醍醐天皇ニ從ヒテ關東ノ軍ヲ防ク、延元元年正月後醍醐天皇難ヲ避ケテ當寺ニ幸シ、二月還御シ給フ、五月楠木正成湊河ニ戰死シ、足利尊氏京師ニ入ルヲ以テ、再ヒ行幸シ給フ、正平元年山徒神興ヲ中堂ニ移シ、天龍寺ノ供養ヲ妨ク、應安元年八月神興ヲ奉シテ京都ニ入リ、僧祖禪ノ配流ヲ訴フ之ヲ聽ス、二年南禪寺ノ樓門ヲ破却シ、後屢強訴スル所アリ、諸堂漸ク荒廢ス、永祿六年八月繪旨ヲ諸國ニ下シテ勸進修造セシム、元龜二年織田信長ノ兵火ニ遭ヒ、僧徒ハ少長ノ別ナク總テ殺戮セラル、茲ニ於テ滿山幾千ノ堂塔、日吉山王二十一社、皆灰燼ニ歸シ、三千ノ大衆多ク命ヲ殞ス、其他延暦寺末ノ諸國ニ散在スルモノ一切之ヲ燔ク、是ニ於テ天台宗ノ古刹寺院悉ク蕩盡シ、山門ノ勢力殆ト地ニ委ス、天正十三年豐臣秀吉寺領千五百七十三石ヲ寄セテ再興ヲ計リ、十七年山門始テ成ル、徳川家康秀吉ノ志ヲ繼キ、再興ヲ企テ、下坂本ノ地三千四

百石餘ヲ寄附ス、慶長十三年七月、秀忠寺領五千石永代寄附ノ朱印ヲ賜フ、寛永十九年家光ノ功ニ依リ諸堂悉ク成リ、稍舊觀ヲ復ス、今存スル所ノ中堂講堂以下皆是ナリ

寺域昔時ハ比叡山大界三十六町、周山四方各六里ニ餘リ、盛時ニ於テハ三塔(東塔止觀院、西塔寶幢院、横川首楞嚴院)九院十六院等ヲ初メ三千餘坊アリシト云フ

東塔 四十六坊餘アリ、根本中堂戒壇堂大講堂文殊樓等此中ニアリ、一山ノ中樞タリ

根本中堂 當山草創ノ建立ニシテ所謂一乘止觀院ナリ、最澄等身ノ藥師像ヲ安ス、延暦十三年供養ス、後幾多ノ變遷ヲ經、現今ノ堂宇ハ寛永十一年ノ造立ニシテ桁行十九間二寸、梁行十二間三尺七寸、軒ノ高サ五間一尺五寸ニシテ特別保護建造物タリ、中堂寶前ノ常燈ハ最澄手ツカラ燈ヲ鑽リ點スル所ナリ、三燈アリ、天祿三年僧慈惠三火ヲ統ヘテ一トナス、承平五年三月、中堂火災アリ、然レト常燈滅セス、天正十三年再興ノ後ハ、出羽ノ立石寺ヨリ傳ヘ來リテ今ニ滅セス、立石寺ノ常燈ハ、本ト此燈火ヲ分チタルモノナリト云フ、寛永年中、徳川氏東叡山寛永寺ヲ忍

岡ニ創スルヤ、又此常燈ヲ移セリ、中堂前ノ竹臺ニアリ北ニアルヲ鶴篠南ニアルヲ葉篠ト云フ、最澄支那ノ天台ノ竹ヲ持チ歸リ之ヲ栽ウル所ナリ

大講堂 中堂ヨリ稍、距リテ一段高キ所ニアリ、桁行十七間五寸、梁行十間四尺、軒ノ高サ六間三尺五寸、天長元年、淳和天皇勅シテ建立スル所ナリ、本尊ハ大日如來左ニ彌勒菩薩右ニ十一面觀世音、又六天像ヲ安置シ、且ツ文殊ノ像竝ニ桓武天皇ノ像ヲ納ム、康保三年元久二年、文永元年、永仁六年、元亨二年、等火災アリ、元龜二年、信長ノ爲ニ燒カレ、現今ノ堂宇ハ、寛永十一年、徳川家光ノ建ツル所ニシテ、特別保護建造物ニ屬ス、當堂ハ大衆集會ノアル所ニシテ、一山事アルトキハ、庭ノ塔樓ニ聚ル、建立以來、二季ノ廣學、堅義ヲ執行シ、勅使臨監セシカ、近來ハ五年ニ一度ノ勅會ヲ執行シ、天台宗學生唯一ノ經歷法トナセリ、俗ニ之ヲ大會ト云フ

戒壇院 大講堂ヨリ約二十間ヲ隔テ、稍高キ所ニアリ、淳和天皇天長四年五月、近江國ニ符ヲ下シテ創立スル所ナリ、貞觀十六年十一月、勅シテ中門ヲ造ラシム、本尊金色釋迦坐像、文殊彌勒ヲ安置ス、是ヨリ先、弘仁十三年、最澄顯戒論ヲ進獻ス、翌年四月、義真傳戒師圓仁、教授師トナリ、圓頓戒ヲ授ク、是レ本邦圓頓戒ヲ授クル

ノ始ナリ、僧徒大乘ノ妙戒ヲ受ケントスルモノ、皆此壇ニ昇ル、昔時ハ五間ノ堂宇七間ノ講堂、東西十四丈、南北十二丈ノ廻廊、三間ノ中門アリシカ、現存ノモノハ天正年間ノ建築ニシテ、檜皮葺五間ノ堂宇ナリ、東塔ノ中ニハ、右諸堂ノ外、慈覺大師ノ廟ナル前ノ唐院、智證大師ノ居所タリシ山王院、傳教大師ノ廟所タル淨土院、大乘院、法華堂等アリ

西塔 根本中堂ノ西、十餘町ニアリ、釋迦堂相輪樣法華堂椿堂常行堂等ノ堂宇アリ、之ヲ總テ寶幢院ト云フ

釋迦堂 法華延命寶幢院ト云ヒ、又轉法輪堂ト名ツク西塔ノ本堂ナリ、天長二年、圓澄弟子延秀ト共ニ建立スル所ニシテ、承和元年三月、供養ノ事アリ、勸學會ヲ此堂ニ執行ス、勅使ハ辨官之ヲ勤ム、堂ハ元園城寺ノ金堂ナリシヲ、文祿年中、此地ニ移スト、今特別保護建造物ニ編入セララル

相輪樣 釋迦堂ノ後二町餘ニアリ、淨菩提心無垢淨光摩尼幢相輪樣ト云フ、寶幢一基、高サ四丈五尺、頂上ハ金銅ノ相輪樣ニテ九層アリ、上輪ノ下ニ法華經大日經二十三部五十八卷ノ聖教ヲ納ム、弘仁十一年九月、最澄ノ造ル所銘亦其記スル所

ナリト云フ(相輪トハ仰キ瞻ルノ意襟ハ柱ナリト)

横川 西塔ノ東北三十町許ニアリ、首楞嚴院ヲ始メ諸堂費ヲ列ヌ

楞嚴院 ハ横川ノ中堂ニシテ、天長六年慈惠大師ノ草創ニ屬シ、本尊觀世音毘沙

門天不動明王ノ像ヲ安ンス、堂ハ慶長九年建ツル所今特別保護建造物ニ編入セラル

四季講堂 飯室 安樂院 飯室、谷明王堂等皆名アリ

傳教大師 名ハ最澄、俗姓ハ三津氏、滋賀郡三津濱ノ人ナリ、父ヲ三津百枝ト云ヒ、其

先ハ後漢孝獻帝ノ裔登萬貴王ニ出ツト云フ、傳ヲ始メ百枝子ナシ、日枝山ノ東麓ニ

アル一社ニ禱リ、奇夢ニ感シテ其妻妊ス、神護景雲元年八月十八日、最澄ヲ三津ケ濱

ニ生ム、後此地ニ寺ヲ建テ生源寺ト稱ス、最澄天性聰敏、七歳ニシテ學ニ志シ、才學人

ニ秀ツ、陰陽醫方工藝ニ通達シ、寶龜九年、年甫メテ十二、南都大安寺ノ僧行表ヲ師ト

シ、難髮シテ僧ト爲リ、唯識ヲ學ヒ廣ク佛典ヲ探ル、天應元年、年初メテ十五、國分寺ノ

住持トナル、以テ其才學ヲ見ルヘシ、延暦三年、年二十ニシテ具足戒ヲ受ケ、更ニ昔日

鑑真ノ持チ來レル三大部等ヲ繙閱シ、天台教義ノ精妙ナルニ服シ、此宗ヲ弘通セン

ト欲シ、研鑽ヲ重ヌ、翌四年七月日枝山ニ登リ、山中ヲ歴覽シ、雲ヲ履ミ風ヲ帯ヒ、峻嶺ヲ攀チテ、凌雨咽霧、千仞ノ幽谷ヲ尋ネテ、松蔭ニ苔ヲ掃ヒ、岩ニ傍テ柴菴ヲ結ヒ、坐禪ノ床ヲ立テ、諸大乘經ヲ讀誦シ、一心修行ノ功ヲ積ミ、又天台ノ宗義ヲ明カニセント欲シ、玄義文句止觀四教儀維摩經ノ疏ヲ勝寫歴覽シ、益一乘圓頓ノ教ヲ究ム、又感スル所アリ、藥師釋迦彌陀ノ三像ヲ刻シ、尋テ根本中堂ヲ建テ、藥師ノ像ヲ安ンシ、一乘止觀院ト名ケ、一山ノ寺號ヲ比江山寺ト稱ス、而シテ手ツカラ燈ヲ鑽テ、末代不滅ノ常燈ヲ點シ、又西塔ニ相輪樣ヲ造立シテ、自カラ銘ヲ記シ、己ハ常ニ中道院ニ住セリ、延暦十三年供養會ヲ修ス、桓武天皇行幸アリ、後勅額ヲ賜ヒ、延暦寺ト云フ、十六年最澄年三十一、内供奉ニ補シ、近江國ノ正稅ヲ分チ、寺費ニ賜ハル、二十一年九月入唐求法ノ請ヲ允サル、二十二年遣唐使藤野葛野麻呂ニ從テ、難波ノ津ヲ發ス、海上颶風アリ、船破ル、二十三年三月、遣唐使ノ再遣ニ陪シテ唐ノ明州ニ入ル、即チ遣唐使ト別レ、明州ノ府牒ヲ得テ、天台山ニ上リ、國清寺ニ入りテ、智者大師七世ノ法孫、道蓬和尚ニ值ヒ、一宗ノ玄旨及ヒ菩薩戒ヲ受ケ、又佛隴寺ノ行滿ニ法要經書ヲ稟ク、又去テ越府ノ龍興ニ赴キ、順曉阿闍梨ニ眞言ノ教義ヲ學ヒ、更ニ唐興縣ニ往テ、儵然禪師ニ

北宗一派ノ禪法ヲ嗣ク猶在唐求法ノ念歎シ難キモノアリト雖モ桓武天皇在唐一歳ヲ限ルノ詔アリ止ムコトヲ得ス二十四年六月遣唐使ト共ニ概ヲ明州ニ解キ八月三日歸京禁中ニ入り其所齎經論二百三十餘部及佛器ヲ奉進ス天皇御感淺カラス天皇ノ崩後平城嵯峨兩帝ノ歸依益渥ク屢宮中ニ修法講教ノ勅ヲ拜シ聲名益高シ弘仁十三年六月四日叡岳中道院ニ逝ク壽五十有六最澄一生ノ德行内外ニ光揚シ修證ノ教法ヲ以テ道義ヲ千載ニ布キシノミナラス經國ノ大業ニ盡瘁セシコト少ナカラス利物開成ニ就テハ信濃美濃ノ境ニ廣濟廣極院ヲ建テ驛遞ノ便ヲ開キ或ハ茶種ヲ持來シテ物産ヲ興起セシメ又平安奠都ノ如キ與リテ力アリシト云フ貞觀八年勅シテ傳教大師ノ諡號ヲ賜ハル我國ノ大師號實ニ茲ニ始マル著書數十部皆金玉ノ法義ヲ闡明スト云フ

慈惠大師 名ハ良源俗姓ハ木津氏近江國淺井郡ノ人ナリ延喜十二年九月ヲ以テ呱呱ノ聲ヲ舉ク幼ニシテ聰敏求法ノ志切ナリ梵釋寺ノ覺慧ニ從ヒ學ヲ修ム延長五年五月叡山ニ登リテ理仙大德ニ歸ス六年理仙寂セシカハ相應和尚ニ依リテ登壇受戒シ後相應覺慧喜慶雲晴ノ間ニ周旋シテ學業大ニ順ハレ殊ニ承平七年ノ維

摩會ニ於テ年未タ二十六ニシテ南都ノ俊才義昭ヲ折キ應和三年ノ法華會ニ於テ法相ノ耆宿法藏ヲシテ口ヲ籍スルノ止ムナキニ至ラシメタリ爲ニ名聲一世ニ揚カル康保元年座主延昌ノ寂スルヤ勅シテ其後ヲ承ケシメントス辭シテ就カス同年座主鎮朝亦示寂セルヲ以テ重ネテ命ヲ拜セシモ謙退シテ之ヲ受ケス此年内供奉ノ列ニ入り二年權律師トナリ三年法性寺座主ニ補シ尋テ天台座主ニ任ス後律師ニ進ミ遂ニ僧正ニ至ル天元四年八月圓融天皇不豫ノ事アリ良源勅ヲ奉シテ修驗シ驗アリ大僧正ニ進メ叢車宮ニ入ルヲ許サル誠ニ異數トナス以テ朝野ノ崇敬大ナルヲ知ルヘシ良源横川ニ定心寂光ノ二院ヲ開キテ之ニ居リ又飯室谷ニ妙香院ヲ創シ未タ功ヲ竣ラスシテ示寂ス年七十四時ニ永觀三年正月三日ナリ寛和三年二月慈惠大師ト勅諡ス良源狀貌猛ク嘗テ自カラ像ヲ畫ケリ世人之ヲ門口ニ貼シ以テ惡魔ヲ除クト云フ

山門合戰 元弘元年八月後醍醐天皇幕府ノ專横ヲ憤リ之カ討伐ノ事ヲ企テ給フ然ルニ事六波羅ハ更ナリ關東ニモ聞エ數萬ノ兵ヲ以テ押寄セシカハ天皇已ムコトヲ得ス笠置山ニ臨幸シテ難ヲ免レ給ヒ一方山徒ノ心ヲ維カンカ爲尹大納言師



賢ニ命シ、僞テ帝ト稱シ、袞龍ノ御衣ヲ著ケ、瑤輿ニ乘リ、公卿ノ供奉嚴カニ山上西塔ニ至リ、釋迦堂ヲ以テ皇居トナシ、主上山門ニ幸アリト宣言ス、大衆大ニ喜ヒ三千ノ僧兵及近江越前ノ兵之ヲ守護シ參ラセ、進テ六波羅ヲ攻メントス、時ニ佐々木時信唐崎ニ來リ攻メ上ホラントス、山徒出テ之ヲ拒ク、時信敗走ス、既ニシテ皇居ヲ東塔ニ遷サントスルヤ山風一陣瑤輿ヲ拂ヒ、龍顏明カニ山徒ノ認ムル所トナル、大衆遂ニ主上ニ非ラサルコトヲ知リ離反ス、是ニ於テ師賢諸公卿ト脱シテ笠置ニ走ル、延元元年正月、足利尊氏反旗ヲ關東ニ舉ケ都ニ攻メ上ル、官軍之ヲ途ニ防ク利アラズ、主上止ムコトヲ得ス難ク山門ニ避ケ給フ、既ニシテ尊氏都ニ入ル、楠木新田ノ諸將山門ヲ根據トシテ連リニ之ヲ攻ム、尊氏遂ニ止マルコトヲ得ス、大ニ敗レテ九州ニ走ル、二月主上京都ニ還幸アリ、未タ幾クモナク、尊氏大軍ヲ率キテ東上ストノ報アリ、京師震駭ス、朝廷之カ計ヲ議ス、正成猶一タヒ山門ニ行幸シテ敵ヲ京師ニ誘ヒ而シテ後之カ糧道ヲ絶ツノ策ヲ獻ス、事遂ニ行ハレス、進ミテ之ヲ兵庫ニ防クニ決ス、正成湊川ニ戰死シ、官軍大ニ敗レテ還ル、主上又叡山ニ行幸シ給フ、官軍屢、尊氏ト京師ニ戰ヒ勝敗未タ決セス、尊氏伴リテ降ヲ請ヒ、主上京都ニ還幸アラントヲ請

フ、帝信シテ之ヲ聽シ、車駕將ニ發セントス、義貞之ヲ聞キ、馳テ中堂ノ行在ニ至ル、乘輿方ニ駕ス、義貞跪テ泣テ曰ク、臣道路ノ説ヲ聞キ未タ其信否ヲ知ラサリキ、今此事遂ニ信ナリ、義貞何ノ罪アリテ之ヲ捨テ給ヒ反賊尊氏ヲ庇ヒ給フ乎、元弘ノ始、高時王命ニ抗シテヨリ、義貞微軀ヲ征討ノ軍ニ奉シ、幸ニ聖明ノ稜威ニ依リ、元兇ヲ旬日ノ間ニ殛シ、以テ宸憂ヲ安ンシ奉ルコトヲ得タリ、尊氏反旗ヲ翻シテヨリ、擧族又王ニ勤メ、數萬死ヲ冒シテ一生ヲ得、宗黨義ニ死スルモノ八十餘人、嗚呼、天乎、命乎、賊勢日ニ熾ニ王師利ヲ失フ、豈ニ之ヲ戰ノ罪ノミニ歸ス可ケンヤ、義貞ヲシテ賊名ヲ負ハシメサラントセハ、幸ニ一族現在五十餘人ニ死ヲ御前ニ賜ヒ、然シテ後駕ヲ發シ給ヘト、辭氣峻烈、四座爲ニ振フ、主上憮然タリ、其時義貞ノ一族三千人、禮ヲ恭フシテ階前ニ跪ク、帝義貞兄弟ヲ前メ、之ヲ慰諭シテ曰ク、尊氏反シテ以來、汝一族ノ精忠朕ノ深ク嘉ミスル處ナリ、又朕ハ卿等ノ宗族ニヨリテ、四海ヲ靜メンコトヲ望ム、然ルニ天運未タ會セス、兵疲レ勢盛ル、是ヲ以テ權リニ和義ヲ講シ、以テ時ヲ待タントスル耳、朕聞ク北越ノ地、義ニ從フノ徒多シト、卿宜シク彼ニ赴テ、之ヲ經略シ以テ皇運ノ恢復ヲ計レ、今特ニ太子ヲ以テ卿ニ付ス、幸ニ太子ヲ視ル朕カ如クセヨト言畢テ

涙ヲ垂レ給フ、將士仰キ見ルモノナシ、義貞皇太子ヲ奉シテ越前ニ赴ク、即夜、日吉祠ニ詣テ寶刀ヲ納メテ武運ヲ祈ル、既ニシテ主上京師ニ還幸アリ、尊氏之ヲ幽シ奉リシカハ、又吉野ニ潛幸アリ、義貞越前ニ向ヒ、遂ニ藤島ニ戰歿シ、皇太子亦尊氏ノ爲ニ毒弑セラレ給フ、中堂前ノ一訣君臣遂ニ相見ユルノ期ナク、帝運吉野ノ山阪ニ落チ、將星北越ノ波ニ漂フ是ヨリ先山門ノ大衆專ラ王事ニ勤ム、帝勅シテ山門ニ近江守護ヲ命セラル

正平元年山門ノ衆徒、神輿ヲ中堂ニ移シ、天龍寺ノ供養ヲ妨ケタルアリ、應永元年山徒神輿ヲ奉シテ京都ニ亂入シ、僧祖禪ノ配流ヲ訴フ、公武其請ヲ允ス、僧兵ノ横暴次第ニ募リ、幕府兵ヲ發シテ之ヲ討チ、却テ山徒ノ敗ル所トナリシコトアリ、強請嗽訴年トシテ之ナキハ無ク、朝廷亦制スルコト能ハス、幕府之ヲ規スルニ由ナシ、物極マレハ必變ス、元龜二年織田信長ノ兵火、金山爲ニ赤ク、堂塔灰ニ化シ、僧兵骨ニ變ス、山中寂然、教勢地ニ落ツルノ止ムナキニ至レリ

○紀貫之墳 滋賀郡坂本村比叡山ノ東南部、裝立山ニアリ、風光佳麗ノ地、年古リタル石造ノ佛體竝ニ、明治元年、渡忠秋ノ建設セシ碑石各一基ヲ存ス

紀貫之ハ文幹ノ子、延喜中御書所預トナリ、越前權少掾、内膳典膳、少内記ヲ歴テ、大内記ニ轉シ、從五位下ニ敘ス、尋テ加賀美濃等ノ介トナリ、延長中大監、物右京亮ニ拜シ、又土佐守ニ任シテ下國シ、承平中任滿チテ歸京ス、紀行土佐日記ハ貫之家集ト共ニ世ニ著ハル、天慶中玄蕃頭トナリ、從五位下ニ進ミ、木工權頭ニ遷リ、從四位ニ陞、敘ス九年卒ス、年六十三、貫之能書ノ名アリ、又尤モ和歌ニ長シ、妙神ニ入ル、曾テ勅ヲ奉シテ、紀友則凡河内躬恒壬生忠岑等ト共ニ、古今和歌集ヲ撰シ、之カ序ヲ作ル、而シテ貫之ノ詠選ニ中ルモノ一百首、蓋シ特旨ニ依リ、此集ニ與ルナリ、後又萬葉集鈔、新撰和歌集等ヲ選ス、後世歌仙ヲ選スルモノ貫之ヲ右行第一トシ、次テ柿本人麿ニ配ス、明治三十八年勅シテ從二位ヲ贈ラル、滋賀村大字南滋賀ニ福王子神社トテ貫之ヲ祀ルノ祠アリ

志賀高穴穗宮址 滋賀郡坂本村穴太ノ地ニアリ、景行成務二代ノ皇居ニシテ、景行天皇五十八年二月遷リ居マス所ナリ、三年ノ後景行帝崩シ、成務帝大統ヲ繼キ、續テ此地ニ都ス、仲哀帝一年ニシテ遷都ノ事アリ、前後六年餘ノ帝居ノ地、今ヤ其址ヲ知ルニ由ナシ噫

第四章 雄琴以北滋賀郡一圓

滋賀郡ノ地北スルニ從ヒテ漸ク廣ク、江城ノ境ヲ擁スル山岳次第ニ其高度ヲ高メ殊ニ比良山ハ地ヲ中央ニ占メテ其間ニ葛川ノ一大溪谷ヲ作ル、琵琶湖ハ堅田ニ至リテ一旦其幅員ヲ縮メ、對岸野洲ノ地ト呼ヘハ答ヘントスルノ狀ニアリ漸ク北センカ、湖面次第ニ其幅員ヲ増シ、渺茫トシテ大江ノ趣ヲ呈ス、地ノ東ニ向ツテ低キ元ヨリ其所ナリ山水ノ秀麗亦湖南ニ讓ラス

那波加神社 雄琴村大字苗鹿ニ鎮座シ、今縣社ニ列ス、苗鹿ハ參考保元物語ニ直河トシ源平盛衰記ニ菜岡ノ字ヲ充ツ、延喜式神名帳滋賀郡八座ノ一社那波加神社トアル是ナリ天太玉命ヲ祭ル

金葉

松風の雄琴のさきにかよふこそ

牧

光

をさまれる世の聲そきこゆる

法光寺 滋賀郡雄琴村大字苗鹿ニアリ、貞觀年中壬生家ノ祖今雄宿禰ノ建立スル所ナリ古ハ四至内ニ多クノ田地山野ヲ有セシカハ、慈惠僧正嘗テ定心院ノ爲メ、畑

地ヲ請ハレシ事アリ、今雄ノ四世忠臣堂宇ヲ修シ、更ニ一堂ヲ建ツ、忠臣ノ孫孝信、又一堂ヲ建テ多寶院ト號ス、元亨二年六月、太政官符ニ定俊僧都ノ餘流、妙法院門跡ノ妨ヲ停止セラレ、當氏長者永代管領ノ宣下アリ、初メ嘉祿年中定俊僧都當寺ノ領ヲ取ラント欲ス、官符ヲ下シテ之ヲ停止セラル、應仁元年、長興宿禰ト云フ者寺領ヲ爭フ、照宿禰代代ノ證ヲ引用シ、傾知故ノ如シトノ裁決ヲ受ク、古文書ヲ藏スルコト多シ

堅田 滋賀郡ノ中央部、地湖面ニ突出シテ野洲郡ト相對スル所之ヲ堅田トナス、風光明媚、雅人ノ繡腸ヲ樂マシム、古詠亦少ナカラス

續後拾遺

心ひくかひこそなけれあふ事は

祝部成賢

かたゝの浦のあまのうけ繩

新千載

春のくるかたゝの浦の朝なきに

圓光院入道

みるめもじらす立霞かな

新拾遺

あふことはかたゝの浦の沖津波

道曉法師

立名はかりや契なるらん

新續古今 さゝ波やよるへもしらすなりにけり

前大僧正道玄

あふはかたゝのあまの捨舟

浮御堂ハ堅田ノ一名區ニシテ海門山満月寺ト號シ禪林ノ一刹ナリ一條天皇ノ御世僧惠心ノ草創ニ係ル湖岸ヨリ十餘間僅ニ橋ヲ以テ連絡シ方形ノ小堂湖中ニ建ツ故ニ浮御堂ノ名アリ惠心自ラ刻スル所彌陀佛ノ像千體ヲ安置ス中古ノ兵亂其幾部分ヲ失フ一僧之ヲ憂へ自カラ闕佛ヲ刻シテ之ヲ補フト云フ此地近江八景ノ一ニ在リ秋天漸ク寒ク葦荻漸ク枯レントスルノ候數行ノ過雁來リテ翼ヲ此地ニ收ムルノ狀綠水汪洋トシテ晚風輕ク三上ノ山嶺遠ク前ヲ擁スルノ態白帆力ナク湖面ニ立ツノ風眞ニ一幅ノ好活畫タリ古人吟アリ

堅田落雁

相國寺林長老

鴻雁幾行更不孤 晚風帶月落東湖

囊沙背水堅田浦 猶見孔明八陣圖

同

近衛時烈

峰あまた越てこしちに先ちかき

かたゝになひき落るかりかね

盛衰記ニ曰ク時忠流罪ノ條菜岡の社を過玉へは比良のすその堅田の浦と申ければ涙くみて

歸こん事も堅田にひくあみの

めにあまりたる我涙かな

参考平治物語ニ曰ク左馬頭義朝堅田浦に出て義隆の首を見八幡殿の御子の名残は義隆おはしつるに後れたてまつりて彌ちからなく覺ゆれとて念佛し湖へ馬の大腹ひたすまで打入此首を收められける

因ニ曰フ義隆ハ陸奥六郎ト稱シ八幡太郎義家ノ子ナリ敵其首ヲ切り堅田浦ニ沈ムト一ニ森冠者ト云フ人ナリ

参考太平記ニ曰ク文和二年六月山名伊豆守謀叛に依て主上都を去り給ふ新田掃部助貞祐山名に與じ堅田浦にて君を襲ひ奉る時に佐々木源三秀綱戰じ勾當内侍墓 滋賀郡堅田町ノ北端畦圃ノ間松樹一幹颯颯ノ音ヲ弄スル處石碣一基小祠一字之ヲ勾當内侍貞烈ノ址ナリトス内侍其名ヲ詳ニセス勾當内侍ノ職ヲ

奉セシヲ以テ其名ヲ以テ行ハル、新田義貞ノ妻、藤原經尹ノ女ナリト云ヒ、又頭ノ太夫行房ノ女ナリト云フ、義貞曾テ禁中ニ宿衛ス、偶、内侍ヲ見テ、心眷戀潛ニ之ヲ思フ、一日禁庭月明ニシテ情緒愈切ナリ、歌テ曰ク、わか袖のなみたにやとる影とたにしられて雲井の月やすむらん、ト天皇之ヲ察シ、宴ニ延イテ、酒杯ト共ニ之ヲ賜フ、優曇華ノ春待得タル心地シテ、珊瑚樹ニ陽台ノ夢長ク醒メ、連理ノ枝ノ邊、曜山ノ花濃ナリ、然モ戰亂事多ク、長ク比翼ノ喜ヲ籠メシメス、左中將北國ニ向フ時、路次ノ難ヲ願ミ、内侍ヲハ今堅田ニ留メケル、問モナク義貞越路ノ露ト消ユト聞クヤ、内侍哀憫措カス、身ヲ琵琶湖ニ投ス、土人祠ヲ建テ之ヲ祀ルト云フ、碧水靜カニ波ヲ漂ハセ、松籟颯颯トシテ之ニ和シ、碣石苔古リタリト雖モ貞烈永ク千古ニ傳フ

眞野入江 堅田ノ北眞野村眞野川ナトアリ、入江ハ今埋レテ田圃トナル、古歌多シ

金葉 うづらなくまのゝ入江の濱風に 源 俊 頼

尾花波よる秋の夕ぐれ

續後撰 吹おろすひらの嵐や寒からん 後鳥羽院下野

まゝの浦人衣うつなり

續古今 夜半に吹く濱風寒みまのゝ浦 眞昭法師

入江の千こり今を鳴なる

新後撰 眞野の浦よ舟こきいつる音更て 法眼源承

入江の波に月そさやけき

續千載 冬枯れの尾花おしなみふる雪に 藤原宗行

入江も氷る眞野の浦風

新續古今 近江路やまのゝ濱邊に駒こめて 頼 政

ひらの高根の花を見るかな

小野 滋賀郡和邇村ノ一大字ニシテ小野妹子ノ舊跡ナリト傳フ、姓氏録ニ曰ク、小野朝臣大春日朝臣ハ其祖ヲ同フス彦姥津命五世ノ孫米餅搗大使主ノ命ノ後ナリ、大徳小野臣妹子近江國滋賀郡小野村ニ家ス、因テ以テ氏ト爲スト、此村ニ小野神社アリ、天足彦押人命米餅搗大使主命ノ二神ヲ祭ル、延喜式内ノ社ナリ、三代實錄ニ、貞觀四年十二月二十二日、近江國正五位上小野神ニ從四位下ヲ授クトアリ、續日本後紀ニ小野氏神社ハ近江國滋賀郡ニ在リト記セリ、卽同社ノ由緒頗ル古キヲ知ルニ

足ル、猶同字ニ小野篁ト小野道風トヲ祀レル社各一座アリ、社殿ハ共ニ特別保護建造物タリ、此等ノ事實ニヨリテ見レハ未タ的確ナル史料ノ徵スヘキナシト雖モ此地ト小野氏トノ關係決シテ薄シトイフヘカラス、後學ノ研究ニ待ツ

龍華關址 滋賀郡伊香立村大字上龍華ノ内畑山ニ其址アリ、文德實錄ニ曰ク、天安元年四月始テ近江國相阪大石龍華等三處ノ關刻ヲ置キ、國司健兒ヲ分配シテ之ヲ鎮守ス、唯相阪ハ古昔ノ舊關ナリ、時聖運ニ屬シ門鍵ヲ閉チス出入禁スルコトナキコト年代久シ、今國守正五位下紀朝臣今守二處ノ關ヲ加ヘンコトヲ上請ス、更ニ始テ之ヲ置クト、廢關ノ時ヲ詳ニセスト雖、王威陵替ト共ニ此關亦廢セラレシモノカ  
氷室遺跡 仁德天皇六十二年五月、額田大中彥皇子闕鷄野ニ獵シ、山ニ登リ谷ニ臨ム、菴アリ、人ヲシテ之ヲ見セシムルニ窟ナリ、侍人ヲ召シ之ヲ問フニ、氷室ナリト答フ、皇子曰ク、其氷ハ如何ニシテ納ムルヤト、答テ曰ク、地ヲ掘ルコト一丈餘、茅草ヲ敷キテ氷ヲ置キ、其上ニ草ヲ葺キ置クトキハ大旱ト雖モ解ケス、故ニ之ヲ取リテ熱月ニ用ユルナリト、皇子此氷ヲ以テ帝ニ奉シ給ヒシニ、寂感斜ナラス之ヨリ、毎年季冬ニ氷ヲ納メシムル爲メ、國國ニ氷室ヲ置カレシコト、公事根源ニ見エタリ、延喜式ニ

依レハ、氷地風神祭ル所、近江國志賀郡龍華一所トアリ、江家次第ニ龍華ハ往古氷ヲ藏ムル地ナリトアリ、其起原果シテ仁德ノ朝ニアリシヤ否ヤヲ詳ニセスト雖、氷室ヲ置カレシハ疑フヘクモアラス、蓋、此地山中寒氣強ク貯氷ニ便ナリシ爲ナランカ  
小松崎 滋賀郡小松村ノ小流比良川ノ下流ニ當リ湖中ニ突出スル所ナリ、古記録ニ依レハ、古松二株アリ、湖上ノ船ノ目標トスト、今ハ湖岸一帶青松翠ヲ競フ、未タ老幹蟠龍ノ態ナシト雖モ、白砂銀精翠綠ト相映スル處、碧波漂渺、徐ロニ松根ヲ洗ハントス、誠ニ湖國風光ノ珍ニシテ近江舞子ノ名之ヲ表ハシテ餘蘊ナシ、加フルニ、春夏ノ候、此地ノ漁夫大網ヲ湖中ニ曳イテ、鱒ヲ漁ス、一タヒ之ヲ引ケハ、潑刺タル鮮魚幾百尾、銀鱗白砂ノ汀ニ躍ル、真ニ快心ノ遊ナリトス、近時此地ニ遊ヒ此遊ヲ試ムルモノ頓ニ多キヲ加フル亦偶然ニアラストイフヘキナリ

長秋詠藻

子の日して小松か崎をけふ見れば

俊

成

邊に千代の影そうかめる

✓ 比良山 一ニ比聯山ト書シ、又比良ノ高峯ト云フ、海拔三千五百尺、周圍十有五里ニ達ス、山頂ハ寒冷ニシテ樹木ナク茅篠叢生ス、初冬ヨリ中春マテ高峰雪ヲ絶タズ、銀

光湖上ニ映ス、比良ノ暮雪ハ入景ノ一トシテ、其名頗ル高ク雄大ノ景象ヲ具フ

吹入雲兮飛入波 比良嶺雪暮江寒

輕舟短棹興何盡 莫作剡溪一樣看

雪はるゝ比良の高ねの夕くれは

花のさかりにすくるところかな

類聚國史ニ曰ク、弘仁九年十二月辛亥、近江國滋賀郡比良山ノ材木ヲ伐ルヲ禁ス以テ官用ニ備フ云云ト、春秋一千年、當時鬱蒼タリシ大森林、禁令何時カ弛ミテ、満山空シク、茅篠ノ叢生スルニ委スルノミ、僅ニ小松石ノ採掘ニヨリテ其名ヲ存ス誰カ弘仁ノ昔ヲ忍ハサルモノアラシヤ

千載 さゝ波や比良の高ねの山おろし 範 兼

紅葉を海の物となしつる

月清 櫻さく比良の山かせふくまゝに 後 京 極

花になり行くしかのうら波

新古今 花さそふ比良の山風吹きにけり 宮 内 卿

續古今 雲はらふ比良山風に月さえて 經 信

氷かさぬるまのゝ浦なみ

新拾遺 更け行けば山風さへてさゝ波の 宗 尊 親 王

比良の湊に千鳥啼くなり

新續古今 氷だにまた山水にむすはねと 京 極 良 經

比良のたかねは雪ふりにけり

堀川 吹き渡す比良のふゝきは寒くとも 國 信

ひつきのみかりせてやまめやは

白鬚神社 小松崎ヲ越テ北ニ進ミ比良ノ山勢湖岸ニ迫リテ水ニ出テントスル所、朱梁ノ鳥居湖面ニ映スルモノ之ヲ白鬚明神トス、垂仁天皇二十五年始メテ創立スル所ニシテ祭神ハ猿田彦命ナリ、天武天皇白鳳年中、社殿ヲ再建ス、三代實錄ニ曰ク、貞觀七年正月十八日、近江國比良神ニ從四位下ヲ授クト、土人云フ此社ノ鳥居ハ前面湖中ニアリ、康安二年大早アリ湖水減スルコト三丈六尺、其時湖中ニ二人ニテ抱

ク計リノ楹ノ柱ヲ間一丈八尺宛ニ立テ竝ヘタル、二町餘ノ橋ヲ見タリト、豐臣秀吉社殿ヲ造營シ慶安元年八月、徳川氏百石ノ社領ヲ付スト云フ、今、郷社ニ列ス、此邊一帶ノ湖岸ヲ明神崎ト云フ、青松白砂相映シ、景趣甚美ナリ

葛川寺 東比良ノ高峯ニ擁セラレ西南江城ノ山脈高ク之ヲ塞キ地勢北ニ向テ傾斜セル、大幽谷之ヲ葛川村トナス、溪岳緑深ク谷水淙淙誠ニ神靈ノ地ナリ此地大字坊村ニ名刹葛川寺アリ、北嶺山息障明王院ト號ス、僧相應ノ開基ニシテ、淳和天皇ノ皇后旅子ノ創立シ給フ所、清和天皇亦建堂ノ御願アリ、相應二十九歳ノ時、此地ニ至リ安曇ノ水源ヲ尋ヌルニ峨峨タル峯巔ニ白雲ノ迷フアリ、幽幽タル谿谷ニ山鳥ノ囀ルアリ、氣自ラ清淨即チ一石ニ坐シテ祈念ス、忽チ靈異ニ感シテ此寺ヲ開キ後台岳ニ歸リ、大小乗ノ法門ヲ開悟シ、碩徳一世ニ高キニ至リシト云フ

相應、俗姓ハ榛氏、江州淺井郡ノ人ナリ、傳ヘ曰フ、其母劍ヲ吞ムト夢ミテ身ムト、年始メテ十五、叡山ニ登リテ慈覺大師ニ事ヘ、十七歳祝髮得度ス、精練勤行十有二年、嘗テ靈異ニ感シテ明王院ヲ創シ、又台岳ニ歸リテ無動寺ニ居リ、大小兩乘ノ妙ヲ闡明ス、盛名禁闕ニ達ス、承和二年帝齒ヲ病ム、詔シテ理趣經ヲ誦セシム、疾癒ユ、帝大ニ悦ヒ

僧官度牒ヲ賜フ、貞觀中、相應上表シテ、最澄圓仁ノ二師ニ大師ノ諡號ヲ賜ハラシコトヲ請フ即チ傳教慈覺ノ二號ヲ賜フ、我國ノ大師號此ニ始マル、延喜十八年十一月二日示寂ス、年八十八、墓ハ叡山無動寺ノ前ニアリ、相應屢無人境、葛川谷ニ往來シテ寺地ヲ開キ土人ヲ率キテ幽谷ヲ開拓セシム、今ノ葛川村之ニ因リテ起ルト云フ

### 第五章 高島郡

湖西滋賀郡ノ北ニ連ナリ、西北山城丹波若狹ノ諸國ニ接シ、東一帶琵琶湖ニ臨ミ、一部僅ニ伊香郡ニ隣ルモノ之ヲ高島郡トナス、郡内山岳重疊シ山林原野ノ多キ、他ニ匹儔ヲ見ズ、現ニ陸軍用地トシテ名アル饗庭野ノ如キ、面積七百七十八町歩ニ達シ之ニ次ク泰産寺野亦二百十三町歩ニ及フ、郡内ノ面積四十一方里ノ廣袤ヲ有シ、實ニ縣下ノ首位ヲ占ムト雖モ、戶數僅ニ一萬ニ足ラス、人口亦五萬一千ニ過キササルノミ而シテ、其ノ密度最モ疎ニシテ、一方里一千二百人トス、是レ亦縣下ノ首位ニアリ之ヲ史ニ徵スルニ古事記六國史等、高島ノ名ヲ散見スルコト少ナカラス、繼體帝此地ニ在マセシコトヲ記ス、文化ノ惠ニ浴スルコト決シテ其ノ晚カラサルヲ知ルヘ



シ元和假武ノ後學者輩出ノ時ニ至ルヤ、中江藤樹此地ニ出テ、陽明良知ノ説ヲ唱ヘ近江聖人ノ稱アリ淺見綱齋此地ニ出テ、京洛ニ慷慨氣節ノ大義ヲ論ス、兩士ハ誠ニ高島ノ誇リトスヘク而シテ亦我學界ノ誇リナリ

○大溝城墟 古城址ハ長寶寺山ニ在リ、佐々木氏ノ臣、高島玄蕃允之ニ居ル、永正十五年八月、淺井亮政ノ攻陷スル所トナリ、玄蕃允之ニ死ス、新城ハ、磯野丹波守ノ城ク所織田信長江北ヲ平定スル時、高島ヲ磯野氏ニ授ク、後信長ノ姪、織田信澄之ヲ領ス、天正十四年七月、豊臣秀吉、京極高次ヲ此ニ封シテ、二萬石ヲ與ヘ、尋テ之ヲ大津ニ移ス、元和元年八月、徳川氏分部光信ヲ此ニ封シ、二萬石餘ヲ與ヘ以テ維新ニ至ル

近藤重藏墓 大溝町大字勝野瑞雪院ニ在リ、重藏守重ト稱シ正齋ノ號アリ、徳川氏旗下ノ士、明和八年江戸ニ生ル、寛政六年、露人蝦夷ニ寇ス、中川勘定奉行ノ支配ニ屬シ、擇捉ニ渡リ露人ノ建ツル所ノ標柱ヲ撤去シ代フルニ我國標ヲ以テス、是ヨリ心ヲ邊海防備ノ事ニ盡シ、邊要分界圖ヲ作ル、文化四年、譴ヲ受クルコトアリ、小普請トナル、既ニシテ書物奉行トナルヤ、楓山文庫中ノ圖書、通覽セサルコトナク、又家藏ノ書ニ富ム、林述齋市河寛齋、龜田鵬齋、太田南畝等、皆往來ス、文政二年、執政沼津侯ト合

ハス、大阪月矢奉行トナル、守重憂鬱、之ヨリ志操ヲ破ル、文政六年又小普請トナル、地ヲ江戸下澁谷ニトシ、男富藏ヲシテ經營セシム、富藏隣家ノ農夫ト事ヲ構ヘ、之ヲ殺ス、幕府罪ヲ糾シテ重藏ヲ大溝侯分部光寧ニ預ケ、男富藏ヲ八丈島ニ流ス、時ニ文政九年十二月ナリ、光寧封ニ就クニ及ヒ、重藏ヲ采地ニ押送シ、竊ニ學ヲ子弟ニ授ケシメ又謀リテ諸政ヲ改革ス、十二年六月十六日病ミテ此地ニ死ス、年五十九、瑞雪院ニ葬ル、萬延元年幕府其功ヲ賞シ罪ヲ赦ス、著書甚多シ

水尾神社 高島村大字拜戸ニ鎮座シ、社殿二座一ハ猿田彦命、一ハ天鈿女命ヲ祭ル、延喜式ニ二座並名神大ト註スルモノ之ナリ、社後ノ山ヲ三尾山、湖邊ヲ三尾ヶ崎ト云フ、此邊一帶ノ産土神ナルヲ知ルヘシ、三代實錄ニ曰ク、貞觀十五年閏六月二十七日、近江國正五位下三尾神ニ、從四位下ヲ授クト、今、郷社ニ列ス

拾遺

高島や三尾の中山杣たて

讀人知らず

つくりかさねよ千代のなみくら

高島宮址 傳ヘ云フ、武烈天皇ノ世ニ、應神天皇四世ノ孫彦主人王三尾ノ別業ヲ造ラシ、越前ノ坂中井ノ振媛ヲ召シテ妃トス、妃幾干モナクシテ、懷妊シ、彦人王彦村王

彦太王ノ三子ヲ生ム、父彦主人王薨スルノ後、二子ヲ携ヘテ、越前ニ歸リ、彦人王ハ此地ニ止マリ、杉姫ト云フモノヲ近侍トス、十二年ニシテ、母振姫薨ス、彦人王其ノ父母ノ靈ヲ祭リ給フ、彦太王ハ、後ニ皇嗣ニ立テ給フ、之ヲ繼體天皇トナス、其靈社ハ、今ノ安曇村大字常盤木ニ鎮座スル三重生神社是ナリト、社ハ延喜式内ノ一社ナリ、繼體天皇ノ在マセシ高島宮、或ハ此地ナルヘキカ

藤樹書院

青柳村大字上小川ニ、藤樹書院ト號シ、當年ノ講堂アリ、藤樹伊豫ノ大洲ヨリ此ニ歸臥シ、良知ノ學ヲ講シテ餘念ナシ、然ルニ邸ノ西北隅ニ藤樹一株アリ、故ニ取テ堂ニ名クト云フ、堂其後火災ニ罹ル、里人之ヲ惜ミテ再興セシモノ、即チ今ノ堂ナリ、堂内ニ其ノ像ヲ安ンシ、遺物亦少ナカラス、今一隅ニ藤樹文庫ト稱シ、圖書館ヲ設ケテ其ノ業ヲ傳フ

同地玉林寺ニ藤樹及ヒ三男常省ノ墓アリ、墓省ハ彌三郎季重ト號シ、初メ備前侯ニ仕ヘ、後對馬侯ニ仕ヘタリシカ、寶永六年、退隱シテ此地ニ死セシ人ナリ、門人常省先生ト諡ス

中江藤樹

字惟命、與右衛門ト稱ス、號ハ藤樹、又ハ願軒、嘿軒ノ號アリ、其祖伊豫ノ大

洲侯ニ仕ヘ、父ハ農トナリテ小川村ニ歸住ス、藤樹祖ト共ニ大洲ニ在リ、年甫メテ十一、大學ヲ讀ミ、嘆悟シテ曰ク、幸ニ古聖ノ遺經存スル有リ、聖人豈ニ學ンテ至ルヘカラサランヤト、是ヨリ經書ヲ研究ス、年十七、京師ノ僧、大洲ニ來リ、論語ヲ講ス、大洲ノ士未タ學ヲ知ラス、藤樹獨リ往テ聽ク、因テ四書大全ヲ得テ、熱讀玩味ス、倅友之ヲ誹笑ス、夜潛ニ卷ヲ開ク、既ニシテ其母獨リ郷里ニ居ルヲ思ヒ、歸省シテ俱ニ大洲ニ往カント請フ、父先シテ歿スル故ナリ、然ルニ其母他郷ニ移ルヲ欲セス、乃チ獨リ大洲ニ歸リ、屢、情ヲ陳シテ骸骨ヲ乞フ、大洲侯素ヨリ藤樹ノ德行ヲ重ニスレトモ、敢テ許サス、乃チ誓フニ、二君ニ仕ヘサルヲ以テス、猶許サス、遂ニ止ムコトヲ得スシテ逃レ歸リ、以テ母ニ仕ヘ、傍ラ學ニ勵ム

篤學力行、名天下ニ聞ユ、是ヨリ公侯召セトモ應セス、常ニ明ノ王陽明ノ學ヲ信シ、躬行ヲ先トシ、浮文ヲ後ニス、其門生ヲ訓誨スル、諄諄トシテ實アリ、人皆其徳ニ化ス、嘗テ郊外ニ夜行ス、賊アリ出テ、路ヲ遮ル、藤樹乃チ錢二百文ヲ與フ、賊怒テ曰ク、汝ノ衣服帶刀ヲ與ヘヨ、否ラサレハ身首處ヲ異ニセント、刀ヲ披テ之ヲ劫カス、藤樹神色自若、乃チ刀ヲ撫シ、起テ曰ク、戰フ者先ツ姓名ヲ告ゲン、我ハ近江ノ中江與右衛門ナ

七六  
リト城忽チ刀ヲ投シ、拜謝シテ曰ク、三尺ノ童且ツ近江聖人ノ名ヲ知ル、吾等不正ノ業ヲナスト雖モ何ソ聖人ヲ苦メンヤ、請フ罪ヲ赦セト、藤樹諄諄知行合一ノ説ヲ説キ之ヲ諭ス、賊感化シテ良民トナル、近邑其德ニ化シ、世ニ近江聖人ト云フ、慶安元年八月二十五日卒ス、年四十一、明治四十一年正四位ヲ追贈セラル、藤樹一株根幹愈茂リ遺徳益高シ

淺見綱齋 名ハ安正通稱ハ重大良綱齋又望楠軒ト號ス、高島郡ノ人、其何處ニ生レタルヤヲ知ラス、或ハ云フ新儀村ナリト、少ニシテ京師ニ遊ヒ、山崎闇齋ノ門ニ入り刻苦精勵、人ニ絶ス、爲ニ咯血スルニ至ル、人ト爲リ嚴毅ニシテ威望アリ、聞達ヲ求メス、貧窶ニ安ンシテ、淡然一世ニ意ナシ、慷慨自カラ喜ヒ、諸侯ニ仕フルヲ屑シトセス、足未タ京洛ノ外ニ出テス、常ニ曰ク、此地ヲ去ル、一步ナラハ死モ其處ニアラス、門人三宅輯明出テ、水戸ニ仕フルヤ、綱齋以テ其士道ヲ行フ所以ニアラストシ、書ヲ贈リテ義絶ス、其靖獻遺言ヲ著ハス、亦寓意アリト云フ、壯年頗ル武事ヲ好ミ、常ニ馬ニ騎リ劍ヲ擊ツ、一長刀方鐔大三寸ナルヲ帶シ、赤心報國ノ四字ヲ鏤ル、其意蓋シ勤王ノ義ヲ唱ヘ、暗ニ天下ノ氣風ヲ鼓舞スルニアリ、然レトモ深ク自カラ韜晦シテ、遂ニ

梓辰ノ罪ヲ得ス、近世處士ニシテ勤王ノ大義ヲ唱フル、實ニ綱齋ニ始マル、晩年錦小路ニ於テ書ヲ講シ、生徒大ニ集マル、王侯貴人、其名聲ヲ聞キテ見ンコトヲ欲スル者多ク、後西院帝亦之ヲ召サセラレシモ、拜辭シテ出テス、正徳元年十月卒ス、年六十、初メ父安正ノ學ヲ好ムコト甚シキヲ以テ、別ニ一家ヲ成サシメンコトヲ欲シ、叔子ヲ以テ家ヲ繼カシム、其性不斷ニシテ家益衰へ、繼母ヲ養フコト能ハス、大小總テ安正ニ倚賴ス、安正毎夜往テ經紀看護シ且ニ至テ還リ、直ニ學生ニ教授ス、炎暑嚴寒一日ノ如シ、路人其面ヲ識リ皆其孝ヲ稱スト云フ

大崎 湖北高島伊香兩郡ノ境岬角ヲナシテ湖中ニ突出シ、竹生島ト形影相對スルモノ、之ヲ大崎トナス、怪岩奇石ノ上、老樹蒼鬱トシテ眞ニ奇景ヲナス處、石立山大崎寺アリ、千手觀音、泰澄ノ作ナリト傳フ、竝ニ彌陀ノ像、厩戸皇子ノ作ナリト傳フ、安ス大前神社亦傍ニアリ、延喜式神名帳載スル所ノ大前神社之ナリト須佐之男命ヲ祭ル

## 第六章 膳所石山

湖南大津ノ市街ヲ出テ、道ヲ南東ニ取ランカ、西ニ横ハル山麓ハ漸ク其勢ヲ退フシテ、湖岸ニ迫ラントシ、湖江漸ク南シテ漸ク其狭キヲ加ヘ、平野細ク其間ヲ綴リテ膳所ノ市街ヲ包ミ、粟津ノ老松點點海道ノ昔ヲ偲フ、膳所町ヲ離レテ、更ニ南センカ勢田ノ長虹、左ニ横ハリテ、景趣愈工ヲ加フ、右ヲ望マンカ、國分寺ノ礎石、田圃ノ間ニ横ハリテ、諸行無常ノ鐘長ヘニ聞クコトヲ得ス、憶フ昔堂閣塔影水ニ映スル處、朱梁青楹ノ美アリシコトヲ、誰カ感慨ノ深キニ沈マサラン、石山ノ丘陵岩間ノ山嶺、幸ニ杉檜鬱蒼塔尖其間ニ隱見ス、田圃之ヨリ溪田トナリ又山谷トナリテ城江ノ界ヲナス、一縷ノ碧潭帶ヲ引キテ僅ニ其間ヲ貫クモノ、之ヲ勢田川トナス、此地茶ヲ産スルコト最モ多シ

○膳所 大津ノ東南、湖岸ニ沿フテ蜿蜒一里ニ垂ントスル市街ナリ、昔陪膳濱或ハ膳所崎ト云ヒ人家ナク漁夫魚ヲ捕リテ天子ニ獻シ、又濱邊ニ田ヲ開キ、稻ヲ植エ天子ノ御供ニ供フ、即天智天皇大津宮ニ在マシ、時、御厨ノ地ニシテ御物ヲ獻スル所ナリ、膳ヲおもものト訓ムハ古言ナリ、太平記ニ是世ト書シ太閤記ニ善逝ト書ケリ古板ノ大木アリ、慶長四年、石田三成佐和山城ニ歸ル時、徳川家康松平秀康ヲシテ護送ノ

任ニ當ラシメ膳所ニ至ル、三成ノ家士、松本マテ來リ迎ヘシカハ、膳所ノ大板ノ本ニ於テ三成敷草ヲ敷キ秀康ニ禮ヲ述ヘ東西ニ別レタリト云フ、當時ノ板今ハ枯レテ唯板町ノ地名ヲ存スルノミ、慶長五年徳川氏ノ命ニヨリ、戸田一西大津城ヲ此地ニ移築スルヤ、次第ニ繁盛ノ域ニ達シタリ

陪膳濱ハ古詠ニ多シ

拾遺

滯る時もあらしな近江なる

兼

盛

夫木

おもものゝ濱のあまのひつきは  
あま人もおもものゝ濱のはまつとを

月にあけぬと今やいそかん

兼盛家集

萬代をもちそ榮えん近江なる

おもものゝ濱のあまのひつきは

○膳所城墟 膳所城ハ元阪本ニアリ、織田信長ノ時明智光秀之ニ居ル、後豊臣秀吉之ヲ大津ニ移シ、京極高次ヲ封ス、慶長五年高次家康ノ爲ニ石田三成ノ軍ヲ此ニ防キ

テ敗レ、城ヲ致シテ高野ニ逃ル、六年家康戸田一西ニ命シ、大津城ノ遺材ヲ以テ移築セシメ、藤堂高虎之ヲ經營ス、是レ其ノ本丸ニシテ、外郭ハ遙ニ後ニ至リテ築造セシモノ、如シ、家忠日記ニ曰ク、慶長六年辛丑六月、諸國ノ守ニ命シテ、江州膳所崎ニ城ヲ築カシメ給フ、奉行八人之ヲ監ス、天下普ク治メ給フノ後、城ヲ築カシメ給フ始ナリ、不日ニシテ城成ル、戸田左門一西、大津ヨリ膳所ノ城ニ移ル、一西膳所ニアル事三年ニシテ死スト、子氏鏡承ク、元和三年攝津尼崎ニ轉シ、本多俊次之ニ移封ス、六年俊次參河西尾ニ移リ、皆沼定芳之ニ代ル、寛永十一年定芳ノ子定昭、丹波ノ龜山ニ移リ、石川忠總之ニ代ル、慶安四年石川康勝伊勢ノ龜山ニ轉シ、本多俊次再ヒ當城ニ封セラレ、子孫世襲シテ、明治ニ至ル、明治二年封土ヲ奉還シ、三年城郭ヲ毀撤シ、四年廢藩ノ事アリ、僅ニ城礎ノ一部ヲ存スルノミ

林 春 齋

栗津昔聞勇夫疲

膳所今看武備奇

城有利兵堅甲在

况將湖水作湯池

山崎 關 齋

膳所湖水上

列樹畫圖中

驛騎鳴鞭去

景風散客忡

膳所招魂社 明治三年正月二十一日、膳所藩主本多康稷ノ建立スル所、贈正五位保田信解、贈正五位森喜右衛門、贈正五位高橋作也、贈正五位澤島信三郎、贈正五位村田精一、贈正五位粟屋良之助、贈正五位高橋雄太郎、贈正五位田河藤馬之丞、贈正五位阿閉權之丞、贈正五位横島錠之助、贈正五位増田仁右衛門、贈正五位深栖俊助、贈正五位關元吉、贈正五位渡邊宗助、十四士ノ靈ヲ祭ル、氏等何レモ本多家ニ仕ヘテ慷慨氣節ヲ貴ヒ、深ク王威ノ陵替ト幕府ノ專横トヲ憤リ、勤王正義ノ論ヲ主張シ、大ニ藩論ノ趨向ヲ定ム、嘉永元治ノ頃、聖護院宮ノ臣川瀬太宰ト謀ル所アリ、密ニ意ヲ毛利侯ニ致シテ事ヲ成サントス、會、慶應元年閏五月、將軍家茂長州征討ノ軍ヲ起シ、自カラ之ニ赴クノ途次、將ニ膳城ニ合セントス、諸士多クハ命ヲ享ケテ大ニ城中修築ノ任ニ當ル、浮言アリ、正義黨此機ヲ以テ將軍ヲ圍ルノ密謀アリト、蓋シ俗論黨ノ佞臣上阪某ノ讒ニ基ツク、幕議俄ニ變シ、將軍遂ニ大津驛ニ合ス、即チ十一士ヲ捕ヘテ獄ニ下シ、其年十一月二十一日、悉ク斬ニ處シ、其遺族ヲ放ツ、明治元年大政丕新ノ後、康稷其

罪狀ヲ覆按シ、全ク尊王愛國ノ至情ニ出テタルヲ悟リ、祠ヲ建テ、之ヲ祭り、其遺族ヲ召還ス、明治二十四年位階追贈ノ事アリ、膳城列士ノ名永ク世ニ傳フ

栗津野 栗津、栗津杜、栗津里等ノ稱呼アリ、大津松本ノ邊ヨリ勢田橋ノ邊マテヲ云フ然レト、現今ハ膳所町ノ南一帶ノ地ヲ指スモノ、如シ、古書、栗津ニ作ル、栗津ノ名ハ、日吉社祭禮ノ日、粟飯ノ神供ヲ船ニ乗セテ唐崎ニ至リ之ヲ供進スルノ古例アリシニ起原セルモノ、如シ、古詠多ク世ニ傳フ

後拾遺

あはつのゝすゝろの薄つのかめは  
冬立つなつむ駒そいさめる

權僧正靜圓

新千載

いさけふは衣手ぬれて降雪の  
あはつの小野に若菜摘てん

爲家

新續古今

あはつのゝ葛のすゑはの歸るまで  
有やはつへき露の命は

左京大夫顯輔

新拾遺

あふ阪の鳥のねとをく成にけり  
朝露分るあはつのゝ原

順阿法師

拾玉

栗津のゝ尾花は風に散りやらて  
にほてる露は螢なりけり

慈圓

新勅撰

東路の野路の草葉の露しけみ  
ゆくもとまるも袖そしほるゝ

攝津

夫木

關のあらじ夜寒に吹やさゝ波の  
あはつの里に衣うつなり

基氏

同

夜のうちの夕つけ鳥に關越て  
あけて栗津の里に來にけり

爲家

日本書紀ニ曰ク、壬申亂之條、七月二十二日、村國男依等栗太ノ軍ヲ討チ、之ヲ追フテ、瀨田ニ到ル、時ニ大友皇子及ヒ群臣等共ニ橋西ニ營ス、其ノ將知尊精兵ヲ率キテ、先鋒ヲ以テ之ヲ拒ク、乃チ橋ヲ中斷ス、進ムコトヲ得ス、是ニ於テ勇敢ノ士アリ、大分君稚臣ト曰フ、刀ヲ揮フテ急ニ橋桁ヲ攀チテ之ヲ渡ル、衆之ニ從フ、近江ノ軍大ニ亂レテ散走ス、知尊刀ヲ拔テ退ク者ヲ斬ル、止ムルコト能ハス、大友皇子左右大臣等僅カニ身ヲ以テ免ル云云

東鑑ニ曰ク「元暦元年正月、近江國粟津ノ邊ニ於テ、相模國住人石田次郎ヲシテ義仲兼平ヲ誅戮セシム」云云ト

今井兼平墓 粟津ノ原松籟颯颯琵琶ノ湖水色青青秋深クシテ蟲聲草根ニ啾啾タル處田塍ノ間、一碑碣アリ、書シテ曰ク

兼平之忠諫剛勇突出古今愚婦童妹道唱口說膳所城主本多下總守俊次也索古地立石誌有志者豈不感歎哉見義輕死亦勸善之謂乎經曰乃至童子聚沙爲佛塔是爲菩提善緣況造立圓滿法身佛乎寬文元年辛丑十月二十一日大圓院開山賜紫沙門萬源書云云

今井四郎兼平姓ハ中原信州ノ産兼遠ノ子ナリ、義仲信濃ニ流落ノ時、兼遠撫育シテ忠肝相照ス、義仲兵ヲ起シ、上洛ノ時兼平亦之ニ從ヒテ勇武ヲ振フ、既ニシテ義仲遠勅ノ事アリ、範頼勢多ヨリ、義經宇治ヨリ來リ、擊チ、義仲ノ軍宇治ニ敗ル、兼平屢ニ命ヲ受ケテ勢多口ヲ防ク、壽永元年正月二十一日氷ヲ踏ミテ馬ヲ躍ラシ、國分寺ノ毘沙門堂ニ陣ヲ張リテ血戰大ニ勉メシカ、義仲ノ存亡杳トシテ知ルニ由ナシ、即チ勢多ノ守ヲ棄テ、京ニ歸ラントシ、途義仲ニ粟津ニ逢フ、主從或ハ喜ヒ或ハ泣キ、餘勇

ヲ數シ散兵ヲ聚メ戰ヒテ又敗ル、兼平乃チ義仲ニ勸メテ自殺セシメ、己亦太刀ヲ口ニ含ミ馬ヨリ墮テ自殺ス、勇烈永ク世ニ傳フ

過兼平墓詩

軍門命賤獨抽忠

時運空衰失戰功

日暮孤墳春寂寞

年年荒草偃英雄

垂加詩

朝主夕饜不可忍

不行不犯未爲盡

見危授命有兼平

遺恨矢於黨逆恣

國分寺舊址

滋賀郡石山村大字國分ニアリ、土人之ヲ「コクボト」云フ、「コクブ」ノ轉訛ナ

ルヘシ、今田圃ノ間ニ大礎石ノ存スルアリ、其間八間計リ、或ハ塔ノ礎ナリト云ヒ、又門ノ礎ト云フ、其他田圃ノ字名ヲ塔田、堂前、經田、石佛、堂ノ街道堂屋敷等ノ名ヲ存ス

樵談治要ニ曰ク「天平十三年、每國國分寺ヲ建立ス」云云ト

日本後紀ニ曰ク「弘仁十一年十一月庚申、近江ノ國言ス、國分僧寺延曆四年火災燒盡セリ、伏シテ望ム、定額國昌寺ヲ以テ國分金光明寺トナシ、更ニ釋迦丈六ノ像七

重ノ塔一基ヲ造ラント之ヲ許ス云云

日本紀畧ニヨレハ近江國分寺ノ供料ヲ割テ永ク延曆寺ノ僧二十四口ノ供養ニ宛テシメラレタルコトアリ延喜式ニハ近江國ノ正稅公廩各四十萬束國分寺料六萬束ト記シ類聚國史ニハ延曆十八年七月崑崙人小船ニ乘リテ參河國ニ漂著シ綿種ヲ傳フ乃チ川原寺ニ住セシメ後近江ノ國分寺ニ遷ストアリ猶盛衰記座主流罪ノ條下ニハ粟津ノ國分寺ノ毘沙門ニ立入給ヘリ云云又今井四郎兼平五百餘騎ニテ國分寺ノ毘沙門堂ニ陣ヲ取リタリケルカ出合ヒ戰ヒケリ方等三郎先生義弘モコ、ニ擊タレヌ等ノ記事アルヲ見レハ壽永ノ頃猶國分寺ノ輪奐燦然ノ美アリシモノカ元祿十五年土人清右衛門地ヲ穿チテ藥師ノ像長一寸八分ナルヲ得タリ是レ往古國分寺ノ遺物タルヘシト云フ

勢多ノ古戰場 弘文天皇元年皇弟大海人ノ將村國男依等粟太ノ地ヲ徇ヘテ瀬田ニ到ル天皇ノ軍勢田ノ橋西ニ陣ス將智尊橋ニヨリテ防戰大ニ努メシモ遂ニ大ニ敗ラレ給ヒ天皇ヲ始メ左右大臣等僅カニ身ヲ以テ免レ山前ニ逃レ給ヒシコトアリ惠美押勝孝謙上皇ノ鍾愛ヲ辱フシ淳仁天皇ノ朝ニ至リ遂ニ亂ヲナスヤ官兵權

ヲ燒テ防キシコトアリ安徳天皇壽永二年七月十六日新中納言知盛木曾義仲ト戰ヒテ平家敗北ス既ニシテ蒲冠者範賴兄賴朝ノ命ヲ受ケテ入洛義仲ヲ討タントス義仲其將今井兼平ヲシテ之ヲ防カシメ兼平遂ニ敗レ義仲亦命ヲ殞ス後鳥羽上皇承久年中北條氏ヲ亡ホサントシテ兵ヲ募リ北條時房兵ヲ率キテ上洛ス官軍ノ將山田次郎重忠軍ヲ此ニ張テ防戰ス未タ一日ヲ經スシテ官軍其守ヲ失フ建武ノ變足利尊氏關東ヨリ來リテ帝闕ヲ犯サントス名和長年源忠顯結城親光等ト共ニ兵二千ヲ以テ之ヲ守ル賊軍競ヒ進ミ官軍又守リヲ失フ是レ皆天下ノ治亂興廢ニ關スル大戰ナリ而シテ勢田ヲ守ルノ軍常ニ振ハス或ハ地ノ利ノ不可ナルニ依ル乎

岩間寺 石山村大字内畑所屬岩間山ノ山嶺ニアリ西境直ニ山城ニ接ス岩間山正法寺ト號シ古義眞言宗醍醐派ノ一刹ニシテ西國第十一番ノ札所ナリ養老年中僧泰澄ノ開基スル所千手觀世音金銅ノ像竝ニ脇士婆蘇仙吉祥天ヲ安置ス共ニ泰澄ノ自作ナリ傳フ往昔ハ大伽藍ニシテ大門諸堂輪奐ノ美ヲ極メ僧坊亦七八宇ヲ有スト漸ク頽廢シテ現今ハ觀音堂五社權現社及僧房一字ヲ存スルノミ又藥師堂仁王門ノ跡ハ之ヲ認ムヘキモ其他ノ堂址ハ之ヲ詳ニセス續古事談ニ曰ク岩間寺ヲ



正法寺ト云フ山城國上醍醐(宇治郡)ノ奥ノ笠取山ノ東ノ峰ナリ、越ノ小大徳ト云フ行人十二年行ヲナシタル處ナリ、紀州ノ熊野大和ノ金峯山ト共ニ日本第一ノ靈驗所ナリ、此大徳ヲ秦澄法師ト云ヒ、又金鎮法師トモ云フ、越後國古志郡ノ人ナリ、白山ニ行ヲナシ、次ニ此ニ至リ、觀音ヲ尊奉シ、此ノ地ノ桂樹ヲ伐リテ等身千手ノ靈像ヲ造リ之ヲ安ニス、此人後入唐シテ彼地ニ客死セリト云フ、又元亨釋書ニ曰ク、釋叙效早ク園城寺ニ入りテ教法ヲ學フ、後岩間寺觀世音ノ靈威ヲ聞キ、彼所ニ往テ晝ハ他語ヲ絶チ法華三千部ヲ讀ム、夜ハ像ヲ禮スルコト三千拜、常ニ法華密供ヲ修ス、歳三タヒ去リテ堂ノ西南大葛樹ニ上ホリ身ヲ投ス、神人袖ヲ以テ之ヲ受ケ、叙效又身ヲ投ス、隨テ投スルハ隨テ之ヲ受ケ、叙效時ノ至ラサルヲ思ヒ、三井ニ歸ル、朝廷之ヲ聞キ僧官ヲ授クト云云、鴨長明外山地及元政艸山集ニ曰ク、岩間竝ニ石山ニ詣テ、岩間ノ石山ト相接スルヲ知ル、岩間ニ至ルノ路險難ニシテ幾タヒカ息テ漸ク上ル、之ヲ願ミルニ湖水ノ景浩浩トシテ南下スルコト數百步、堂アリ千手觀音像ナリ云云、堂前ヲ西ニ向ヒ細蹊ヲ下レハ山城國宇治郡醍醐ノ地ニ達スヘシ其間一里半

**石山寺** 勢多川ノ流漸ク其幅員ヲ狹メテ正ニ溪流ノ域ニ入ラントスル處、西岸一

帶ノ丘陵、綠樹蒼鬱トシテ堂影其間ニ隱顯シ、青青玲瓏ノ水ニ映ス、加フルニ巨石怪巖諸堂ノ間ニ横タハリ、其狀ノ奇ナル復タ名ク可カラズ、然ルニ石ヲ以テ顯ハレヌシテ却テ月ヲ以テ著ハル、天高ク氣清ク、嫦娥徐ニ岑ヲ離ル、ノ夕坐シテ亭榭ニ風ヲ弄ハンカ、山麓ノ光景眞ニ一幅ノ畫圖倪黃ノ筆ニアラスンハ、孰カ能ク之ヲ寫サシ乎、此地由來近江八景ノ一ニ居リ、京洛ヲ去ル四里、山水明媚ノ一境ナルヲ以テ、山城宇治ノ地ト共ニ都人士靜養ノ行樂地トシテ、坊ヲ此地ニ曳クモノ多カリシハ、自然ノ數ナリ、古詠多ク之ヲ證ス、今ヤ鐵路近ク勢多ニ走リ、火輪煙ヲ吐テ山下ニ往來ス、故ヲ以テ遊客踵ヲ接シ、賽者肩ヲ摩スルノ盛況ニアリ、誠ニ近畿ノ一樂境タリ

實 隆 公

新古今

みやこにも人やまつらんいしやまの  
月もひかりをかすそえて照る

藤 原 長 能

後拾遺

見るめこそあふみのうみはかたからめ  
ふきたにかよへ志賀の浦風

伊 勢 大 輔

同

いし山やそほてる月のさやけさは

關白政家

九〇

もろこしまてもくまなかるらん

對月

萬 菴

香樓宴坐月明中

一片氷心滿杏空

深夜秋風吹又起

雲邊桂子落珠宮

石山秋月

林 長老

秋風蕭颯一天涯

霜滿四山不帶霞

古木回岩寒月影

吟殘葉葉霧中花

石山

石川丈山

僧房門外繫輕舟

高踏翠嵐黃葉秋

一片山雲將雨去

千尋湖水鑿涯流

飛樓疊磴眞仙館

奇石怪岩皆奇幽

紫氏揮毫記源氏

琅函亦入艷書不

寺ハ則チ石山ノ上ニアリ石光山石山寺ト號シ西國第十四番ノ札所タリ河海抄ニ

ハ石山寺ハ聖武天皇ノ御宇金鷲仙人建立スト記シ元亨釋書ニハ聖武天皇南都東大寺ヲ創シ十六丈ノ遮那銅像ヲ鑄ントテ多クノ金ヲ聚メテ箔トシ給フ此時本朝未タ黃金アラヌ或時天皇僧良辨ニ語テ曰ク傳ヘ聞ク大和國金峰山ハ其地皆黃金ナリト汝金剛藏王ニ騰テ金ヲ得テ銅像ノ箔トナセト良辨即チ金峰山ニ入テ持念ス夢ニ藏王告テ曰ク此山ノ黃金政テ自ラ恣ニスヘカラス今汝ニ別方ヲ授ケン近江勢多ノ縣ニ一山アリ如意輪觀世音靈應ノ地ナリ汝彼處ニ至テ持念セハ必ス黃金ヲ得ント良辨勢多ニ赴ク時ニ老翁アリ一石ノ上ニ坐シテ釣魚ノ遊ヲ試ム良辨問テ曰ク何人ソヤト翁答テ曰ク我ハ此山ノ主比良明神ナリ此地ハ觀音ノ靈區ナリ云ト語テ其影ヲ失フ良辨其石ニ就テ廬ヲ縛シ如意輪ノ像ヲ安シ持誦ス未タ幾クモナクシテ奥州始テ黃金ヲ貢ス其ノ後丈六大悲ノ像ヲ刻シテ先ノ像ヲ中ニ藏ム亦金剛藏王及執金剛神ノ像ヲ造テ左右ニ安ス其像各高サ八尺初メ基址ヲ平クルニ當テ地中ヨリ五尺ノ寶鐸ヲ掘出シ益其靈地ナルヲ知ル云トアリ  
榮花物語ニ曰ク一條院の御母公詮子は攝政藤原兼家公の御女圓融院の後なり  
いかなる御願かありけん石山の觀音を信せられたまひて年年に參らせたまひ

けり、長保三年の秋、観音の御告やありけん、いかなる御事にか此度や限りならん  
 とのたまひつゝ、九月の比心細く京を出させたまひて、粟田に關山のほと志賀の  
 山越心細きうゑよろつあはれに思し召されて

あまた度行あふ阪の關水に今は限りの影をかなじき

なごのたまひて、石山につかせたまひつゝ御堂に參らせたまひ云云トアリ

又右大將源頼朝其臣掃部頭親義ヲシテ叛徒ヲ平ラケシム、親義石山ニ詣テ、強敵  
 敗亡ノ事ヲ祈ル、果シテ敵ニ勝ツ、卽一寺ヲ創立シテ、勝南院ト號シ、毘沙門天ヲ安置  
 スト云フ、建久六年石山境内ノ殺生ヲ禁セラル、此寺ノ隆時ニ於テハ寺領六萬石ヲ  
 領セリ、寛治元年十月官符ヲ以テ四至ノ境界ヲ定ムラレ、寺邊庄以南ノ地子ヲ免セ  
 ラル、爾來寺領ノ變遷少ナカラス、慶長十八年七月徳川氏寺邊村ノ高五百七十九石  
 餘ヲ付ス

本堂 天平勝寶、中良辨肇テ其基ヲ開キ、承暦二年回祿ノ災アリ、建久中源頼朝之  
 ヲ再興シ、後チ荒廢ニ歸セントシケレハ、豊臣秀頼公ノ母堂淀君之ヲ修補シ、禮殿  
 ヲ付ス、今ノ堂卽チ是ナリ、堂ハ古ノ講堂ニシテ、中堂ハ別ニアリシモ、後廢滅ニ歸

ス、今之ヲ中堂谷ト云フ、安置スル所ノ佛像ハ丈六如意輪觀音像ヲ本尊トシ、大日  
 如來彌勒菩薩像、弘法大師ノ作ト傳フル所ノ不動明王及掃部頭親義ノ安置セシ  
 毘沙門天及維摩等ノ像ヲ安ス、其大部分ハ何レモ國寶ニ編入セラル、本堂ノ傍ヲ  
 東面シテ一曲ノ窓ヲ開ク、之ヲ源氏間ト云ヒ、紫式部此處ニ籠テ源氏物語五十四  
 帖ヲ書キタリト傳フ、室中狩野古右近ノ圖セル、式部ノ像ニ、近衛信基公ノ讚文ア  
 ル一幅ヲ掲ク、寺寶ニ式部ノ用ヒシト傳フル、硯石、竝ニ其筆ナリト傳フル、大般若  
 經アリ、硯ハ堅六寸二分、横八寸四分、厚サ一寸三分、長方形ヲナシ、硯池菱花形ニ掘  
 リ一ハ牛一ハ鯉ヲ刻ス、面各一、圓形ヲナス、世ニ之ヲ石山形ト云フ

○河海抄ニ曰ク、西宮大臣安和二年、太宰權帥ニ左遷セラル、紫式部幼キヨリ馴レ奉  
 リ思ヒ歎ク頃、大齋院ヨリ上東門院ニ奇シキ草紙ヤアルト尋サセラル、ニ、新シ  
 ク作り出セト式部ニ仰ラレケレハ、石山ニ通夜シテ、此事ヲ祈リケルニ、折シモ八  
 月十五夜ノ月、湖水ニ映リ、心モ澄ミワタルマ、ニ、物語ノ風情空ニ浮ヒケル、佛前  
 ニアル大般若ノ料紙ヲ本尊ニ受ケ、先ツ須磨明石ノ兩卷ヲ書キ初ケル、是ニ由テ  
 須磨ノ卷ニ、今霄ハ八月十五夜ナリト出シ、後ニ罪障懺悔ノ爲般若一部六百卷ヲ

自カラ書テ奉納セリ、今ニ彼ノ寺ニアリト  
 式部ノ墓本堂ノ東南寶塔ノ下ニアリ、蓋シ其遺物ヲ藏ムルノ處カ  
 御影堂 中央ニ弘法大師左右ニ良辨僧正ト内供淳祐ノ像ヲ安ス  
 内供淳祐墓 祖師堂ノ後ニアリ、淳祐少年ノ時、容貌醜陋ニシテ性極メテ魯鈍ナ  
 リシカハ、終夜石山ノ觀世音ニ祈念ス、一夜僧アリ來タリテ左右ノ手ヲ執リ、上下  
 スルコト二三回ナリト夢ム、覺ムレハ則チ面貌端正ニシテ才學明敏ナリ後果シ  
 テ碩徳トナレリト傳フ

前前太平記ニ白ク延喜十八年三月二十一日には、石山の觀賢僧正勅衣を持た  
 せて高野山に行き、例の如く御廟の扉内より自然にひらきしかは觀賢則立入  
 て御衣を著せかへ奉る、其御弟子の僧淳祐に大師の御姿を拜むや否やと尋ね  
 たりしかは、淳祐涙をなかし赤面して雲霧の隔つ如くにして得拜み侍らすと  
 答へしかは、師の坊不便の事かな汝が行力いまた達せずかほと明白なる御姿  
 を拜し得ぬこそ淺猿しけれ、せめては結縁のためなればとて淳祐か手をとり  
 大師の膝を少しなてさせたりけるに淳祐感涙を押ぬくひ、是か大師の御ひさ

にて候ひけるかとて、二三度なてまいらせて引たる手のはひ甚たかうばし  
 く、さなから梅檀沉香のやんこさなき薫一生其手にとまり、經文に香を含  
 み其經句の聖教とて今にあり云ト

寶塔 二層ニシテ大日如來ノ像ヲ安ンス、鎌倉時代ニ建築セラレシ多寶塔形ニ  
 シテ、今特別保護建造物ニ指定セラル、傳フ龜谷禪尼大日ノ像ヲ造リ頼朝公ノ頭  
 髮ヲ其首ニ納ムト

仁王門 左ニ密迹金剛右ニ那羅延ノ像ヲ安ンス、傳フ運慶ノ作ナリト、額アリ石  
 山寺ノ三字ヲ書ス、佐理ノ筆トイヒ、又行能ト傳フ、鎌倉時代ノ古建築トシテ保護  
 建造物タリ

山中ハ崔嵬タル奇巖怪石、縱横ニ蟠龍踞虎ノ狀ヲ呈シ、一高亦一低、磴階各處ニ上下  
 ノ客ヲ送リ、諸堂僧舎其間ニ點綴ス、殊ニ觀月臺ハ 今上陛下御登臨琵琶湖ノ大景  
 ヲ覽ナハセシ所、後ハ連峰峨峨トシテ岩間笠取醍醐ノ諸山ニ連接シ、前ハ森茫タル  
 勢多ノ流レヲ隔テ、<sup>タナカミコシ</sup>田上金勝ノ諸山ヲ望ム、秋月ノ玲瓏ヲ見テハ吟腸忽チ躍リ蟲  
 聲ノ唧唧ヲ聞テハ苦惱頓ニ洗ハル、若シ夫レ孤燈親シムヘキノ夕春光嫩葉ニ暗キ

ノ朝、僧房ヲ訪ネテ寺寶ヲ覽ンカ、兆殿司筆佛涅槃圖、隆光筆石山寺緣起ノ繪卷物、延  
曆交替式等ノ國寶其他古文書ノ堆キ感慨自カラ禁セサルモノアラシ

僧良辨 姓ハ百濟氏(或曰淺部氏)滋賀郡ノ人ナリ、傳云良辨二歳ノ時母ニ携ヘラ  
レテ桑林ニ憩フ、忽チ大鷲ノ來ルアリ兒ヲ捉ヘテ去ル、母悲泣シ鷲ヲ追フテ歸ラ  
ス、後鷲之ヲ大和春日ノ祠前ニ置ク、僧義淵春日ニ詣ツルノ歸途之ヲ拾ヒテ養育  
ス、五歳學ニ就カシメ義淵訓ユルニ法相ノ學ヲ以テス、後慈訓ニ就テ華嚴ヲ學フ  
學徳日ニ進ミ、日夜練心修行ノ功ヲ積ム、聖武天皇其名ヲ聞キ、勅シテ繩索院ヲ賜  
フヤ即チ寺號ヲ改メテ金鐘寺ト云、時ニ天平五年ナリ、後天皇東大寺ヲ創立シ給  
フヤ、良辨與テ功アリ初メテ東大寺ノ別當ニ補シ、寺務ヲ司リ、官僧正ニ至ル、其頃  
母ノ所在ヲ知り、寺側ニ室ヲ構ヘ孝養ヲ盡セリト云フ、寶龜四年閏十一月寂ス、年  
八十有五

○石山城址 石山寺ノ南方山上ニアリ、天正元年足利義昭之ヲ築キ、織田信長ノ軍  
ヲ防カンカ爲、軍兵ヲ置キテ之ヲ守ル、信長ノ兵一舉之ヲ敗リ城廢スト云フ

### 第七章 栗太郡

東ハ山岳ヲ繞フテ甲賀郡ニ接シ、南ハ山ヲ隔テ、甲西信樂谷及山城ノ國綴喜宇治  
ノ地ニ隣リ、西ハ琵琶湖及勢多川ヲ挾ムテ、滋賀郡ヲ望ミ、北ハ野洲郡ニ接シテ平野  
相連ナルモノ之ヲ湖南栗太郡トナス、金勝山東南ニ登、エ其脈蜿蜒一ハ南ニ走リテ  
田上ノ連山トナリ、以テ山城ノ境ヲナシ、一ハ直ニ西ニ走リテ瀬田ニ及フ、後者ハ其  
高度頗ル低シト雖モ自カラ郡ヲ中斷シ、南ハ栗南田上大石ノ窪地ヲ作リテ地勢急  
峻ヲ極メ、北ハ一望坦坦平野相連ナリテ次第ニ西南ニ向テ傾斜ス、面積十有三方里  
一町十四箇ノ村落ヲ包ミ、戸數九千、人口四萬八千、氣候中和ヲ得、土地肥ユルヲ以テ  
民多ク農事ニ勵ミ、田上米ノ聲價殊ニ高シ

舊事記傳ヘテ曰ク、景行天皇四年春二月、天皇美濃ニ幸シ、路淡海ヲ經、一栗樹アリ尖  
梢空ヲ穿ツ、由ヲ國老ニ問フ、曰ク神代ノ栗木ナリ、此木榮フ時、枝山岳ニ竝フ、故ニ並  
枝山ト云フ、又高峰ニ竝ヒ聯ル故ニ並聯山ト云フ、毎年葉落チテ土トナリ、土中悉ク  
栗葉ナリト、今昔物語ニ曰ク、近江國栗太郡ニ大ナル柞ノ樹アリ、此圍五百尋アリ、高

ク枝茂レリ、其蔭朝ニハ丹波ノ國ヲ覆ヒ、夕ニハ伊勢ノ國ヲ覆フ、地震ニモ動カス大風ニモ撓マス、此故ニ其國ノ志賀、栗太、甲賀ノ土民此木ニ依テ日當ラス、田島ヲ作り難シ、郡ノ者憂ヒテ之ヲ帝ニ奏ス、帝掃寸ノ宿禰ヲ遣シテ此木ヲ伐リ倒サセ給フ、夫ヨリ田島豐饒ナリト、又一説ニ上古栗ノ大樹アリ、土人之ヲ截ラントスルモ斧斤ノ力ニ及ハス、仙人一夜奇夢ニ感シ、放火シテ之ヲ燒クコトヲ知リ、遂ニ之ヲ試ム、其灰積テ山ヲ爲ス、今ノ灰塚山ト云フハ其跡ナリト、右等ノ傳説ハ果シテ其信僞ヲ知ルニ苦シマサルヲ得スト、雖モ、栗太ヲ以テ栗樹ノ由來ニ歸スルハ一ナリ、蓋シ上古此邊ノ山野一帶栗樹多ク繁茂シタルハ事實ナルカ如ク、今猶土中ヨリ樹葉ヲ掘出スコトアリト云、而シテ江南栗太ノ地早ク文化ノ惠ニ浴シ、國府此地ニ置カレ、近江一ノ宮タル建部ノ宮鎮座シ、國分寺ト勢多川ヲ隔テ、形影相對シ、當時ノ繁盛ノ狀想見スルニ難カラス、下テ足利義尙ノ鈎里ニ出陣シテ陣中猶書ヲ講シタルハ千古ノ美談タリ、而シテ觀音寺船ノ湖水總司亦栗太郡ノ誇トスル處、古澗葉樹帶ノ栗樹多ク山丘爲ニ暗キヲ憂ヒタルノ地、今ハ禿山累累トシテ相連リ、人猿却テ桑海ノ變ニ泣ク亦奇ナラスヤ

瀬田 琵琶湖ノ水漸ク江河ノ趣ヲ呈シ正ニ勢多川トナリテ南下セントスル處、長虹空ヲ切リテ兩土ヲ連續シ、擬寶珠水ニ映シテ夕照ノ影ヲ宿ス、之ヲ勢多ノ長橋トナス、背ニ建部ノ森林ヲ控ヘ、漁家網ヲ干スモノ是レ瀬田村ノ地ナリ、瀬田ノ字由來一定セス、勢田ノ字併セ行ハル、昔ハ驛站ノ地トシテ繁盛ナリシ處ト云フ、江家次第延喜式等皆勢多ノ驛ト記セリ、往古ノ國府此地ニアリ亦齋宮ノ頓宮モ此地ニ在リシモノ、如ク延喜式齋宮式ニ凡ソ頓宮ハ近江ノ國國府トアリ、湖月抄ニ花鳥餘情ヲ引テ瀬田ノ頓宮ハ彼齋宮ノ御額ノ櫛ヲ徹シテ宮ニ納メ入レラル、所ナリト記セリ、サレト其跡詳ナラス、延喜式ニ曰ク齋院六處堺川供奉御禊近江勢田川凡齋内親王路ニ在リ山城近江伊勢等堺勢多鈴鹿下槌多氣川等ニ至ル毎ニ神部ト部各二人ヲ遣ハシ前ニ在リテ之ヲ鎮メ祓フ云云ト、拾遺集第九ニハ源重之カ母ノ近江ノ國府ニ侍リケルニ、ムマコノ所ヨリ登リテ急クコト、テ先此度ハ忙テ登リヌルコト、イヒテ侍リケレハト見ヘタリ、思フニ重之ハ清和天皇ノ後胤貞元親王ノ孫三河守兼信カ子ニシテ、冷泉院ノ坊ノ帶刀ナリ、サレハ安和ノ比重之ノ母此邊ニ棲ミシナルヘシ右等ノ徵證ニヨリテ國府カ平安朝ノ末期マテ存セシヲ知ルニ足ル

**瀬田橋** 古來宇治山崎ト共ニ三大橋ノ名アリ、大橋九十六間小橋二十七間幅員四間、中間ニ一小島アリ中島ト名ツク、景行天皇ノ世、湖水ニ筏ヲ組ミ瀬田ニ小船橋ヲ架スト云ヒ天平寶字八年惠美押勝ノ反スル時、近江ニ至リ先ツ勢多ノ橋ヲ燒クトアリ上古ノ架橋法ハ、湖水ニ筏ヲ組ミ繩ニテ搦ミ付ケシモノナリ、故ニカラ橋ノ名アリト云フサレト、其位置ハ現所ヨリ稍下流ナルカ如シ三代實錄ニハ貞觀十一年十二月四日、勢多橋燒ケ十三年四月四日、復火災アリシコトヲ載セ、東鑑ニハ文治三年十月勢多橋破損シタルヲ以テ佐々木定綱ヲ奉行トシテ之ヲ修造セシムルノ記アリ、織田軍記ニハ天正三年六月十五日、信長瀬田ノ橋ヲ架スルコトヲ載セ、奉行山岡美濃守木村次郎右衛門同月十二日柱ヲ立ツ廣サ二十四間長サ百八十間云云トアリ、寛永十四年二月、勢多ノ橋桁二本自カラ燒失ス、萬治三年八月徳川氏命シテ此橋ヲ作ル、翌年四月落成ス、延寶五年六月勢田橋ヲ修造ス、膳所城主本多侯代官多羅尾四郎左衛門工ヲ監ス、爾來修造工事ノ監督ハ膳所侯常ニ之ニ當ルノ例トナレリ

新古今 槇の板も苦むすはかり成にけり  
 幾代へぬらんせたの長はし  
 匡 房

新後選

にはのうみや霞てくるゝ春の日に

爲

家

渡るも遠じせたのなか橋

風雅

御調物絶えすそのふるあつまちの

兼

盛

せたの長橋音もとろに

新拾遺

さゝ波やうち出て見れば白妙の

惟

賢上人

雪をかけたるせたの長橋

夫木

朝ほらけ空に三上の山みえて

長

雅

霞たち渡るせたの長はし

勢田夕照

沙鳥風帆帶夕陽

夕陽人影與橋長

勢田曝網東山月

一色江天兩景光

**秀郷社** 龍王ノ社ト相竝ヒテ、勢多ノ湖東ニアリ、寛永年中、蒲生中務大輔忠知此地ヲ過ル事アリ、土民ヲ呼テ曰橋邊ニ秀郷ノ社有ルヘシ、之ヲ我祖ナレハ明日參詣スヘシト、土人尋ヌルニ社ナシ衆民漸ク勢多ヨリ六七町南東ニ小祠アルヲ見此地ニ

移ス後人皆秀郷ノ社ト稱ス當時忠知社殿ヲ造營セシモ蒲生家斷絶ノ爲途ニ荒廢  
 ス將軍家綱之ヲ修造セシメテヨリ以來架橋ノ事アル毎ニ社殿亦修造ノ事アルヲ  
 常トス秀郷蜈蚣ヲ橋上ニ射テ龍神ヲ助タルノ奇談ハ永ク國民勇武ノ物語トナル  
 勢多古城跡 建武中山岡影房ノ築ク所其裔美作守景隆ニ至ルマテ世世此ニ居ル  
 景隆織田信長ニ仕へ屢軍功アリ一萬石ヲ領シテ勢多城ヲ守護ス天正十年六月明  
 智光秀信長ヲ本能寺ニ弑シ安土ヲ取ラント欲ス先ツ景隆ヲ招キ己ニ從ハシメン  
 ト欲シテ之ヲ勸説ス景隆固ク義ヲ採リテ聽カス橋ヲ燒キ湖岸ノ舟ヲ奪ヒテ之ヲ  
 絶ツ光秀大ニ困ム時ニ徳川家康界浦ニ遊ヒ光秀ノ亂ヲ聞キ急ニ東ニ歸ル途梗シ  
 テ通セス間道勢田ニ至ル景隆弟景祐ト共ニ前導シ田上山ヨリ信樂郷ニ達ス土寇  
 アリ路ヲ遮ル景隆討テ之ヲ破ル貞享二年舊址ニ一菴ヲ立テ之ヲ僧天寧ニ付シ臨  
 江菴ト號ス元祿四年五月天寧和尚山岡城墟ノ碑ヲ建ツ遠江守山岡景軌景隆ノ畫  
 像ヲ作り自カラ贊辭ヲ題シテ菴ニ納ム現ニ境内ニ景隆ノ墳墓ヲ存ス蟬聲高ク樺  
 樹ニ泣キ水車篋林ノ間ニ懸リテ憂憂ノ音常ニ絶ヘス英雄ノ魂魄今何レノ處ニカ  
 在ル

**藤原經信別業ノ地** 栗太郡大石村大字曾束ニアリ其往昔師大訥言此地ニ別業ヲ  
 構へ其子俊賴俊重相繼テ此ニ居ル故ニ師家ト云フ後曾束ト改ム此地今田上村ニ  
 屬セスト雖モ田上大石ノ地ヲ稱シテ總テ田上ト稱セシモノカ曾束ノ地山城ノ國  
 界ニ近ク山岳重疊シテ溪鳥靜ニ鳴キ勢多ノ急流鞆ノ音ヲナシテ白沫ヲ飛ハス  
 ノ處大宮人ノ來リ憩ヒシ地遺詠載セテ諸集ニ出ツ

詞花

都にすみわひて近江の田上といふ所にまかりて

俊 賴

芦火たぐ山の栖は世の中を

あくかれいつる首途なりけり

田上にてよみ侍りける

經 信

新古今

たひねする蘆の丸家のさむければ

爪木こりつむ舟いそくなり

○**猿丸太夫舊址** 同シク曾束ノ地ニ屬ス村ヲ離ルコト十町岩尾ト名ツクル處此  
 邊一帶ヲ奥山田トイフ猿丸カ紅葉踏ミ分ケノ歌ハ此地ニテ詠ミタルモノナルヘ  
 シ鴨長明ノ方丈記ニ田上川ヲ渡テ猿丸太夫ノ墓ヲ尋ヌト記シ無名抄ニハ曾束ト



云フ所アリ、其處ニ猿丸太夫ノ墓アリト載ス、猿丸太夫カ果シテ何レノ時ノ人ナリシヤヲ知ルニ由ナク、此地果シテ其址ヲ止メシヤ否ヤヲ保セスト雖モ、傳説ノ出處ハ頗ル古キカ如ク、深草ノ元政上人寛文四年ヲ以テ亦此地ヲ尋ネテ故事ヲ偲ヒシ事、草山集ニ出テタリ

○大石氏邸址 大石村大字中村ニアリ、其址東西二十間南北三十間又山中ニ在ルアリ、之ヲ古屋敷ト云フ、大石氏ハ元佐々木家ニ屬シ、此莊ヲ領ス、又進藤山城守ノ臣ナリト云フ、大石玄良ハ、内藏介義雄ノ曾祖ニシテ、義雄ノ父權内ニ至ル迄、此地ニ居住シ、權内備前ノ國老池田出羽ノ女ヲ娶リ、義雄ヲ生ム、義雄淺野家ニ仕ヘ、義烈ノ名永ク世ニ傳フ

佐久奈度神社 大石村大字東ニ鎮座ス、此邊一帶ヲ櫻谷ト云フ、佐久奈谷ノ轉訛ナルヘキ乎、唐崎ト共ニ大七瀬祓ノ一ナリ、事公事根源ニ載ス

夫木

にはてるや櫻谷より落來る

慈

鎮

波も花さくころの足代木

松ならて櫻谷にはよもゆかし

こりともこりぬ道の遠さに

祭神ハ瀬織津姫命速秋津姫命氣吹戸主命ナリ、天智天皇八年右大臣金ノ連勅ヲ奉シ、祓殿ヲ創立シテ、佐久奈太理宮ト云フ、近江朝ニハ、此社ヲ崇尚セラレ、屢、修禊ノ事アリ、文武天皇亦使ヲ以テ奉幣ノ事アリシヲ傳フ、延喜式社ノ一ナリ、三代實錄ニハ貞觀元年正月二十七日、近江國佐久奈度ノ神ニ從五位上ヲ授クト記シ、文德實錄亦仁壽元年六月詔シテ、此神ヲ明神ニ列スト載ス、承平中藤原秀郷此社ニ祈願スルコトアリ、村上天皇ノ朝、七瀬ノ祓ノ一トナリ、後白河天皇、社領ヲ付セラレ、將軍賴經亦祭資料ヲ進ムト云フ、今村社ニ列ス

鹿跳米漸

佐久奈度社ノ後方勢多川兩岸ノ石塊ニ狹ハメラレテ奇觀ヲ呈スル所

之ヲ鹿跳ト云フ、兩山ノ間一溪ヲ通ス、幅員僅ニ二十餘間、河底岩石ノアル所ハ七間ヲ越エス、岩石突兀、奇嶮ルカ如ク、流水青藍石ニ激シテ、絲ニ似タリ、故ニ鹿再ヲ鼓シテ一躍センカ優ニ之ヲ飛フヘシ、鹿跳ノ名此ニ起ル、又此下ニ米漸岩ト稱スルモノアリ、河水岩ニ激シ、白沫四散、煙霧爲ニ生ス、激湍ノ聲米ヲ漸スニ似タリ、故ニ名ク、大早水減センカ河底ノ岩石或ハ白ノ如ク或ハ黒ノ跳ルカ如シ亦絶世ノ奇觀ナリ

建部神社 栗太郡瀬田村大字神領ニアリ、東海ノ驛路ヲ東ニ入り北ニ折ル、處地少シク高く、老杉鬱鬱タル宮山ノ邊ニ鎮座スルモノ即チ近江國一ノ宮ト稱セラレシ建部ノ神社ナリ、社殿二座日本武尊ヲ奉祭シ天明玉命大己貴命ノ二神ヲ配祀ス景行天皇ノ四十六年、建部稻依別王命、神崎郡建部ノ里ニ神殿ヲ創立シ、日本武尊ヲ祭ルト云フ、是レ日本武尊近淡海ノ安國造祖意富多牟和氣カ女布多遲比賣ヲ娶リテ生ミ奉ル御子ニシテ、犬上君建部君ノ祖神ナリ、今現ニ神崎郡ニ建部ノ村アリ、且ツ同村大字伊野邊ニ稻依別王ヲ祀ルノ祠アリ、移遷ノ年代明カナラサルモ、或云天武天皇白鳳四年四月ナリト、孝謙天皇天平勝寶七年三月、建部公伊賀麻呂勅ヲ奉シテ社殿ヲ造營シ、始メテ近江ノ一ノ宮トナス、三代實錄ニ曰ク、貞觀二年三月、官社ニ列ス、五年六月從五位下ヲ授ケ、九年七月從四位下ヲ授ケ、十年七月從四位上ヲ授ケ云云、延喜式ニ曰ク、近江國栗太郡建部神社一ノ宮記ニ、建部神社大己貴命三輪一體云云、應和二年六月正三位勳四等ヲ授ケラレ、長和三年八月從二位延久四年六月正一位勳一等ヲ授ケ神田一町五段ヲ付セラレ

保元物語(佐殿東走ノ條)勢多には橋もなくて舟にて向の地へ渡り給へは、旁心苦

しこて打送り奉り、社の見えけるを如何なる神ぞと問へば、武部の神と言ふ、佐殿さらば今夜は此御前に通夜して、行路の祈をせんとて、社殿にぞ留りける

後頼朝天下ノ總追捕使トナリ上洛スルトキ、此社ニ參拜シ、勢田郷三百戸ヲ神領トス、承久ノ亂、東軍橋東ニ陣シ、火ヲ放テ社殿ヲ火ク、貞應二年大將軍藤原頼經、本社ヲ修造シ、名刀及神馬ヲ獻ス、正應四年三月勅使參向アリ、延慶二年四月祭禮ヲ復興ス、勢田判官中原章則奉行ス、應永六年八月、勢多判官章頼社殿ヲ再造ス、十四年將軍足利義滿社領三百戸ヲ付ス、應仁ノ亂、本社亦兵燹ニ罹ル、文明十二年勢多肥後守家昌社殿ヲ造立シ、明應七年九月勅命ニヨリテ神事ヲ再興ス、明治十八年四月、官幣中社ニ列シ、三十二年七月、官幣大社ニ陞格ス、祭祀其時ヲ失ハス、神威愈々崇シ、仰クヘキ哉

垂加草

荆構楠椽風色老 頼朝曾此致精禱  
 盛安曼語聞言他 便見中心藏復報

野路 老上村大字野路ノ地、昔時ノ驛舎ニシテ繁盛ノ地ナリ、治承四年平亮盛平忠度追討使トシテ東下ノ時、此地ニ宿セシコトアリ、建久元年十一月、右大將頼朝上洛

ノ時亦此ニ宿ス然リト雖モ世變リ時移リテ今ハ唯道傍ノ一池僅ニ野路ノ玉川ノ名ヲ止メ昔萩花ノ名所トシテ古詠ノ殘ルアルノミ

千載

あすもこむ野路の玉川萩こえて

俊 頼

玉葉

打しくれ古郷思ふ袖ぬれて

安嘉門院四條

續古今

霞ふる野路のこのはらふじわひて

式子内親王

新拾遺

さを鹿のじからむ萩に秋見へて

仲 光

月も色ある野路の玉川

矢橋 勢田ノ北一里程一葦水ヲ帶ヒテ大津ノ松本ニ對シ前ニ比良四明ノ高峰ヲ望ミ北ハ志賀ノ浦唐崎南ハ近ク粟津原ノ老松ヲ眺メ呼ヘハ互ニ相應フ其間僅ニ五十町往キ來フ白帆輕ク風ヲ孕ンテ夕陽一帶西山ヲ紅ナラシム眞ニ近江八勝ノ一ナリ矢橋ノ名ハ頗ル古ク參考保元物語ニハ矢早瀬トシ今昔物語ニハ矢馳ト記

ス又矢八瀬矢走ト書キ萬葉集ニハ八橋トアリ草津ヨリ道ヲ此ニ取ルコト二十五町身ヲ一葉ノ舟ニ託センカ一瞬夢ヲ貪リテ大津ニ達スルヲ得ヘシ故ニ古來旅客ノ往來頗ル頻繁タリシモ近時山田ノ浦ヨリ航路開通シ此地亦昔日ノ觀ナシ

萬葉

淡海之哉八橋乃小竹乎不造矢而

信有得哉戀敷物乎

夫木

さゝ波や矢橋の舟の出ぬまに

公 朝

のりをくれしと急くかち人

堀川百首

にはてるや屋はせのわたりする船を

いくそたひみつせたの長橋

眞帆引て矢はせに歸る舟は今

近衛時熙

打出の濱をあとの追風

矢橋歸帆

相國寺林長老

釣竿手熟白頭翁

辛苦客船西又東

幾度風帆歸去後

兄公榮達一盃中

鳥丸光廣卿ノ東路ノ記ニ曰ク、十九日の曉、殘月に船に乗て大津より矢八瀬へわたる、蒼波漫漫として、興あり、北に志賀辛崎長等の山、南に粟津の里勢田の長はじはるく、と見えたり、あまたとび見なれたれど、心をつくることねんころなれば、景も又勝絶なり、船より上ぼりて見れば、むかひには三上山まぢかし、後には比叡の高根おほひたり、こはらく一吟す

行さきに向ふ三上の山よりも

かへりみらるゝ比叡の大たけ

玉露叢に家光公寛永十一年戌年、上洛ノ記ニ曰ク、さゝ波よする鴉の海いとも靜なりければ、矢橋より御船に召さるるとて

浪風も静けきけふはみつうみの

矢橋の船の舟渡りして

實況歴歴トシテ目ニ睹ルカ如シ

觀音寺 常盤村大字蘆浦ニアリ、大慈山ト號シ、寺傳云フ、厩戸皇子ノ開基ナリト、史ニ依レハ、安閑天皇ノ二年、此地ニ蘆浦ノ屯倉ヲ置クト記シ、大安寺三綱記ニハ、觀音

寺ハ粟太郡蘆浦ニ在リ、聖德太子ノ本願ニヨリ、秦川勝之ヲ開基ス、天平三年、定メテ三論宗トナスト、由來此地方一帯ヲ法會莊ト呼フ、其關係亦淺シト云フヘカラス、聞ク昔近郷一圓ヲ寺領トシ、堂塔伽藍斐ヲ竝ヘ、頗ル壯大ナルモノアリシカ、中世衰頽シ、應永ノ頃、僧觀雅之ヲ中興ス、享徳二年、京都ノ普勸寺ヲ合シ、九月、管領細川晴元寺領ヲ改ム、天文十四年命アリ、湖水ノ總司及ヒ代官ヲ兼務シ、永原館ノ奉行及普請奉行ヲ命セラル、文錄ノ役、住僧那古耶ノ行營ニ赴キ、豊臣秀吉ニ謁シ、慶長五年、關ヶ原ノ役、復徳川氏ノ爲忠勤アリ、後再ヒ湖水總司ヲ命セラレ、大津ノ小野宗左衛門ト共ニ那代ヲ命セラル、時ニ近江大和ノ地四萬石ヲ領ス、貞享二年、職務ヲ罷メラレ、更ニ蘆浦ノ地五百六十六石餘ヲ領ス、或時ハ山王祭禮ノ際、山の法印觀音寺トイフ幟ヲ建テ、湖水ニ漕キ出テ、威光頗ル振ヘリト云フ

草津町 東海東山兩道ノ分岐點ニシテ、昔ノ驛站ナリ、徳川幕府ノ制、江戸ヨリ上ル駄馬荷物ノ貫目ヲ品川ニテ改メ、江戸ニ下ルモノハ總テ之ヲ草津ニテ改ムル法ナリ、然レトモ、往古ハ種津ト稱シ、常善寺傳ニハ、布薩ノ轉訛トス、驛路ニ非ス、野路ヲ驛トセリ、永正六年十月、足利氏江州佐々木氏ヲ攻ムルトキ、大内義興三萬五千騎ヲ率

キ高橋三河守相良遠江守ヲ先隊トシ、當地ニ陣ス、青地茂高野洲郡守山ニ陣シ、其夜京兵ノ意ヲ伺ヒ、火ヲ放チテ草津ヲ燒ク、高橋勢田ニ逃レ、相良ハ矢橋ニ退キ、大内氏敗北ス、幕府ノ頃此地東海道ノ一驛トシテ、諸侯ノ劍尖刀影相接シ、頗ル繁盛ヲ極メ、姥ヶ餅ノ名世ニ喧傳ス、王政維新ノ後一時大ニ衰タリト雖モ、鐵路東西ニ通シ、又南シテ伊勢ニ走ルヲ得ヘク、郡衙此地ニ在ルニ及ヒ、稍舊時ノ俤ヲ存ス、竹鞭ハ此地ノ産トシテ其名高ク、遠ク海外ニ輸出スルニ至レリ

爲尹千首 草津より濱にいてける方なれや

はや目にかふる志賀のうら舟

堯孝道記 近津路や秋のくさは名のみして

花さく野へはいつくともなき

垂加詩曰

雨寒野路篠原邊 客袂淚霑西望天

忽記古人歌詠得 感吟行到草津邸

常善寺 草津町ニ在リ傳ヘ云フ、光仁天皇寶龜八年天下大旱アリ、帝住僧ニ勅シ

テ雨ヲ祈ラシム、大般若ヲ轉讀スルコト三七日驗アリ、帝大ニ悦ビ、常善寺ノ號ヲ賜フ、開山ハ良辨僧正ナリ、承久三年五月、北條氏京師ヲ犯ス、時東兵寺ニ入りテ佛像寶物ヲ奪ヒ去ル、建治二年四月、僧叙尊此寺ニ住シ、七月彌陀ノ像ヲ安置シテ之ヲ再興ス、長享元年足利義尙六角氏ヲ攻メ、鈎ノ里ニ陣ス、偶病アリ、寺僧尊美ヲ召シ、延命法ヲ修セシム、延徳元年、義尙鈎ノ里ニ薨スルヤ、遺命シテ陣屋ヲ寄附ス、乃チ移シテ客殿トス、織田信長、豊臣秀吉何レモ寺領ヲ納メ、禁制ノ札ヲ下付ス、徳川家康關ヶ原ニ捷チ、上京ノ途、當寺ニ陣シ、黄金一斤ヲ賜フ、住僧一秀、晩年洛東智恩院ニ詣シテ、念佛宗ヲ兼ヌ、將軍家光以來、代代寺領ヲ給ス、當時ノ書院、名高ク、庭ハ細川三齋ノ好ミナリト云フ

立木神社 祭神天武薨槌命、此地ノ産土神トス、傳ヘ云フ、神護景雲元年、常陸ノ國鹿島明神ヲ此ニ分靈シ、寶龜八年、社殿ヲ造立スト

治田連 栗太郡老上村大字南笠ニ鎮座スル治田神社ハ、治田連ノ祖彦坐神ヲ祀ル社ナリト云フ、姓氏錄ニ曰ク、治田連ハ、彦坐命四世ノ孫彦國命北夷ヲ征シテ功アリ、近江淺井郡ノ地ヲ賜フテ墾田地トナス、子孫此ニ居ル、因テ今ノ姓ヲ賜フ、或ハ其族

ノ分處スル處カト、又東大寺天平二十一年寫經所解ニ、治田石麻呂ノ名アリ、近江地志ニ曰ク、治田明神ハ、南笠村鳩森ニアリ、鳩ハ治田ノ轉、蓋シ治田氏ノ祖廟ナリト、隣地ニ治田莊ノ地アリ、齋明天皇ノ七年、百濟獻スル所ノ唐ノ俘百六口ヲ、近江ノ國ノ壑田ニ居ラシム等ノコトアリ、治田連ト此地トノ關係亦深キヲ見ルニ足ル

1 鈎里 栗太郡治田村大字下鈎ノ地ヲ指ス、後土御門天皇ノ文明五年、足利義尙ノ軍職ヲ襲クヤ、義政弊政ノ後ヲ承ケ、大ニ撥亂反正ノ志アリ、近江ノ佐々木高頼、地ヲ京畿ニ受クルニ關ハラヌ、上洛スルコトナク、又公方ノ下知ニ從ハヌ、剩ヘ逆意ヲ示スニ依リ、義尙自カラ軍ヲ率キテ之ヲ討タントス、長享元年九月、京師ヲ出テ、十月二十八日鈎里ニ陣ス、十二月二日、中納言藤原實隆勅ヲ奉シテ陣ニ臨ミ、御製ノ歌ヲ賜フ「君すめは人の心のまかりをもさこそはすくに治めなすらめ、義尙返歌ヲ上ル、人心まかりのさとそ名のみせるなをなる君か代につかへつゝ、二年九月、義尙内大臣ニ任シ、義熙ト改名ス、其陣中ニ在ルヤ、自ラ孝經竝ニ左氏春秋ヲ講シ、將士ヲシテ之ヲ聞カシメ、久屯ノ計ヲナス、曰ク吾此賊ヲ亡ホサスンハ、復タ京師ニ歸ラスト、延徳元年三月病アリ、二十六日遂ニ陣中ニ薨ス、年二十有五、常徳院殿悅山大居士ト諡ス、今

其館屋ハ草津町常善寺ノ本堂トナリ現存ス、當時陣址ノ古圖大寶神社ニ在リ  
長束大藏屋敷址 栗太郡常盤村大字長束ノ地、俗ニ圓乘坊址ト稱スル所、即チ長束大藏大輔正家ノ出生地ナリ、正家初メ利兵衛ト稱シ、丹羽長秀ニ仕フ、計算ヲ善クシ、理財ノ術ニ長ス、長秀鉅萬ノ富ヲ有スルニ至リシモ、一ニ正家ノ功ニ依ル、後豊臣秀吉ニ仕ヘ一萬石ヲ領シ、郡國ノ貢賦會計及軍糧漕運ノ事、一ニ其手ニ出ツ、功ヲ以テ從五位下ニ敘シ、大藏少輔ニ任ス、天正十八年小田原ノ役アルヤ、徳川氏豫メ兵食ヲ備ヘ、以テ缺乏ヲ補フ、曰ク大軍長驅シテ久シキヲ經レハ、米價昇騰シ兵士飢ニ苦シマント、正家兵食ヲ轉漕スルニ及ヒテ相模國中米粒ノ多キニ苦シム、家康歎シテ曰ク、正家ノ才ハ、漢ノ蕭何ニ似タリ、豊臣氏能ク人ヲ用ウト云フヘシト、文祿元年、征韓ノ役、又軍糧ヲ司リテ航海ス、我百萬ノ軍、海外ニ餓死セサル亦其功ナリ、殊ニ當時船舶ノ製未タ精ナラス、一ニ風力ヲ待チ、二ニ人力ニ倚ル、不便實ニ想像ノ外ニ出ツ、然ルニ能ク事ヲ處シテ些ノ遺憾ナシ、誠ニ偉ナリト云フヘシ、後チ近江ノ水口城ニ封セラレ、五萬石ヲ食ミ、五奉行ノ一員ニ列ス、秀吉薨シテ、徳川家康ニ親シミ、又石田三成ト善シ、慶長五年七月、家康東下スルニ會ス、正家水口ニ供張シテ之ヲ饗セントス

或人正家家康ヲ計ルノ意アリト告ク、家康夜婦人ノ與ニ乘リ城下ヲ過ク、正家恐懼直ニ土山ニ至テ罪ヲ謝ス、家康温言之ニ接ス、八月正家大阪ノ兵ト俱ニ伊勢ニ入り安濃津城ヲ攻メ、轉シテ美濃ニ入り、三成ニ黨シテ南宮山ニ陣ス、既ニシテ家康ト戰ヒ大ニ敗レテ水口ニ歸ル、士卒散走ス、池田長吉來リ攻ムルニ及ヒ、城ヲ致シテ蒲生郡櫻谷ニ匿レ、遂ニ自殺ス、今蒲生郡東櫻谷村大字中ノ郷、安乘寺ニ大心院速成居士ノ靈位ト僅ニ一基ノ墓表トアルノミ、小蒲何ノ末路亦哀ムヘキ哉

**金勝寺** 栗太郡ノ東南甲賀郡ニ接スル所、突兀トシテ天ヲ摩スル之ヲ金勝山トナス、登坂五十町山頂一院アリ之ヲ金勝寺ト云フ、寺ハ天平五年、僧良辨ノ開ク所、聖武天皇ノ勅願所トシテ奈良都ノ鬼門ヲ鎮ムト、興福寺ノ傳燈大法師願安此寺ニ住シ弘仁二年伽藍ヲ建テ大菩提寺ト稱ス、別ニ八宗院ヲ建テ、一切經論一千百部、法華經ヲ書寫ス、嵯峨天皇勅シテ地鎮結界菩薩戒儀ヲ修行セシム、天長十年九月、近江國栗太郡金勝山大菩提寺ヲ定額寺ニ預ルト、續日本後紀ニ記セリ、仁明天皇燈分料ヲ施入セラル、是ヨリ先金蕭ト名ケシヲ改メテ金勝ト爲シ、勅額ヲ賜フ、寛平九年六月太政官符ニ曰ク、金勝寺年分二人ヲ試度スヘシ、一人甲賀郡飯道神阪田郡山津照名神

ノ爲、一人ハ野洲郡三上兵主兩名神ノ爲、法華經一部八卷、最勝王經一部十卷ヲ試ムヘシ、竝ニ法相宗トアリ、傳ニ云フ、此官符菅原道真ノ筆ナリト、天曆八年四月七日更ニ官符ヲ下シ、四至ニ亂入シ、濫行竝ニ檢田收納臨時雜役ヲ禁制シ、東ハ東阿星水堺谷西ハ岡牟禮山、南ハ紫野南鈴嶽、北ハ龍山陀羅尼原ヲ限リテ、四至トセラル、元曆元年十一月二十四日、源義經下知シテ曰ク、興福寺ノ別院、近江國金勝寺往返ノ武士、狼籍アルヘカラスト、二年村上藏人ナルモノ寺領ヲ横奪セントスルノ害アリシカハ、右大將源賴朝院宣ニ任セ、村上藏人ノ無道竝ニ武士ノ狼籍ヲ停止スト下知セリ、後嵯峨後醍醐光嚴ノ諸帝何レモ繪旨ヲ下シテ、亂暴狼籍ヲ禁シ給フ、加之武門ノ制札下知ヲ以テ保護ヲ加ヘタルコト、一再ニ止マラス、天文十八年正月、堂宇火災ニ罹リ蕩盡ス、二月後奈良天皇勅シテ再建ヲ命セラレ、青蓮院尊鎮親王觀進狀一卷ヲ筆記セラル、慶長十四年住僧玉藏院清賢駿府ニ至リテ家康ニ謁シ、官符及古記ヲ呈ス、家康以テ希代ノ靈地トナシ、近隣ノ百姓四至内ニ亂入狼籍ヲ停止シ、山稅ヲ納ムヘキ旨、板倉伊賀守米津清右衛門ニ命アリ、同十七年五月二十八日、栗太郡金勝荒張村ノ内三十石先規ノ如ク寄附寺納シ、境内山林竹木諸役免除ノ朱章ヲ下付ス、安置スル

所ノ佛像ハ春日ノ作ナリト傳フル丈六釋迦ノ坐像ヲ首トシ、軍舍利毘沙門吉祥天  
 虚空藏等ノ像アリ、又山上ニハ八幡春日熱田山王伊勢ノ五社アリ、寺寶其數多カリ  
 シモ、近來次第ニ散佚シテ僅ニ其一部ヲ存スルノミ  
 山上清泉アリ、古來之ヲ禁中ニ獻シ、毎年正月十五日ノ小豆粥ノ水ニ供スルノ例ア  
 リシモ今ハ廢セリ  
 往古聖武天皇信樂ニ行幸ノ砌、又此地ニ臨幸ノ事載セテ續日本紀ニアリ、歷朝ノ崇  
 信ヲ鍾メシ、名刹漸ク荒廢シテ什寶次第ニ散佚シ亦傳ハラス、法光時ヲ追フテ薄ク  
 唯空山荒寺ノ堂舍アルノミ

### 第八章 野洲郡

湖東蒲生栗太兩郡ノ間ニ狹マリ、南東山ヲ以テ僅カニ甲賀ノ地ニ接シ、西北湖ニ臨  
 ミテ平野坦坦タルモノ之ヲ野洲郡トナス、面積六方里東西三里南北亦三里ヲ出テ  
 サルノ小郡ナリ、而シテ甲賀ノ諸川一大河流ヲナシテ野洲川トナリ綿向岳ノ谿水  
 亦下リテ日野川トナリ、日夕土砂ヲ運ヒテ湖岸ヲ埋メ、漸次平野ヲ作りシモノ是レ

本郡ノ地勢ナリ、人口四萬四千、一方里七千人ノ密度ヲ示ス、之ヲ史ニ徵スルニ古字  
 益須夜須又單ニ安ノ字ヲ用ウ、蓋シ彌瀨之義乎古事記開化天皇ノ條水穗真若王ハ  
 近淡海之安ノ直祖也、同シク景行天皇ノ記ニヨレハ、近淡海之安國造祖ノ字アリ、近  
 江ノ國造カ此地ニ置カレタリシヲ見レハ、其威力ノ及フ處、湖東一帶ノ地ヲ出テス  
 トスルモ、早ク文化ノ惠ニ浴セシコトハ明カナリ、三上山ノ峰巒突兀トシテ立チ、野  
 洲川ノ長流潏潏トシテ音ヲ絶タサルコト幾千年、山容水態依稀トシテ昔日ノ如シ  
 ト雖モ、其間ニ生死セシ生靈其數幾許、淡海ノ毛野ハ出テ、新羅ヲ征シ、淡海三船ハ  
 出テ、奈良朝ノ學頭タリ、下テ祗王ハ此ニ生レテ平安朝末期ノ悲劇ヲ殘ス、若シ夫  
 レ北村季吟ノ出テ、國學ニ貢獻セシ偉績ノ如キニ至テハ誠ニ此地ノ誇リトスル  
 所ナリ

都賀山址 小津村大字三宅ノ地ナリト云フ、上古ハ今ノ守山ヨリ此地マテ一帶ノ  
 岡阜アリ、都賀山ト稱ス、日本紀ニ曰ク、天武天皇七年十一月己亥、沙門法眞喜住眞義  
 等ヲ遣ハシテ、試ミニ近江國益須郡ノ醴泉ヲ飲マシム、八年正月己亥、詔シテ曰ク、醴  
 泉近江ノ國益須郡都賀山ニ涌ク、諸疾病ノモノ益須寺ニ停宿シ瘥ユルモノ衆シ云



云、類聚國史亦此事ヲ載ス、所謂醴泉トハ單ニ水ノ甘美ナルノミナラス、温泉ノ涌出  
セシヲ言ヒシモノカ

足利義昭矢島遺址 玉津村ニ屬ス、以前ハ外滄四圍、其址猶存セシモ、今ヤ其址ヲ知  
ルニ由ナキニ至レリ、義昭ハ將軍義晴ノ子ニシテ、始メ南都一乘院ニ入りテ僧トナ  
リ、覺慶ト云フ、永祿八年三月、父義輝弒セラレ、賊徒來リ囚ヘントス、覺慶病ト稱シテ  
閉居ス、細川藤孝醫師米田宗賢之ニ侍ス、一夜竊ニ一乘院ヲ出テ、春日山ヲ踰エ、江州  
甲賀郡ニ逃ル、土豪和田氏ノ家ニ館ス、乃チ髮ヲ蓄ヘテ義秋ト名リ、更ニ義昭ト改ム  
既ニシテ矢島ノ里ニ移ル、六角承禎ニ依テ事ヲ成サントス、承禎應セス、若狹守護武  
田義統ニ依ラント欲シ、九年八月十五日、夜舟ニ乘リ湖上ヲ渡リ、若狹ニ赴ク、藤孝宗  
賢之ニ從フ、時ニ月色清明、感慨深カラサルヲ得ス、藤孝歌ヲ詠ス、よるへなき身とな  
りぬればこほならぬ海の面にもうきめみるかな、義昭即チ詩ヲ賦ス、落魂江湖晴結  
愁孤舟一夜思悠悠、天公亦慰吾生否、月白蘆花淺水秋ト、若狹ノ武田氏國小ニシテ成  
スアルニ足ラサルヲ以テ、去テ越前ノ朝倉氏ニ依ル、後美濃ニ赴キテ織田信長ニ託  
シ、遂ニ京師ニ入りテ、將軍ノ職ヲ襲ク、之ヲ足利氏十五世トナス

野洲川 源ヲ甲賀ノ諸山ニ發シ、數流相會シテ野洲川トナリ、野洲ニ入りテ、南北二  
流トナリ、湖ニ注ク、幅員廣キ所五町ニ達ス、湖東ノ大川ニシテ、史上亦其名ヲ留ムル  
コト多シ、日本書紀、天武天皇ノ元年秋七月壬寅、男依等安河濱ニ戰フト、傳ヘ云フ此  
時京軍川ノ西ニ陣シ、吉野ノ軍其東ヨリ攻ム、會洪水川ニ滿チテ渡ルコトヲ得ス、川  
流俄ニ分レテ三トナリ、水勢大ニ減ス、二猪アリ先ツ川ヲ渡ル、吉野ノ兵之ニ尾シテ  
川ヲ踰エ、京軍大ニ敗ルト、江家次第伊勢勅使進發條下ニ云フ、野洲川ニ到リテ、祓フ  
云云、元龜元年四月、織田信長近江ヲ略定シ、將ニ京師ニ入ラントス、六角承禎城ヲ失  
ヒテ、甲賀ノ山中ニ在リ、先ツ信長ノ將柴田勝家ノ永原岩、稻葉一徹ヲ守山岩ヲ襲ヒ  
舊業ヲ復セントス、立入城ヲ修メ、三上栖雲軒宮本新次郎ニ築城ノ役ヲ司ラシム、五  
月城成リシカハ、栗太野洲蒲生ノ土兵ヲ驅リ集メ、故舊ノ諸將ト共ニ大ニ北ニ出ツ  
南軍列陣未タ定マラス、柴田勝家佐久間信盛之ヲ野洲川ニ迎ヘ、急ニ擊ツ、佐々木ノ  
將三上伊豫背テ北軍ニ應シ、南軍ノ背ヲ擊ツ、南軍狼狽大ニ敗レ、三上水原ノ諸將從  
兵雜卒一千餘人、之ニ死シ、承禎僅ニ身ヲ以テ逃ル、是ヨリ六角氏ノ武威地ニ委ヌ古  
詠アリ、世ニ傳フ

玉柴

たひ人も皆もろともに朝たちて

四 條

名寄

駒うちわたす野洲の川きり  
さえ渡るやすの旅人いそかなん  
やす川原とて遠からぬかは

隆 房

歌林

早苗とるやすの渡りのかたあらじ  
こそその刈田はさひしかりけり

慈 圓

三上山 野洲郡ノ東南僅ニ甲賀郡ニ接スル所突兀トシテ雲ヲ突クモノ之ヲ三上山トナス歌枕三神ニ作り蜈蚣山近江富士等ノ名アリ海拔一千四百一尺甚タ高カラスト雖モ平野ノ間ニ屹立シ其形略富士山ニ似タルヲ以テ其名高ク秀那ノ傳説ハ蜈蚣山トシテ亦其名ヲ擅ニセシメタリ山腹妙見堂アリ晚春之ニ登リテ湖上ノ風景ヲ賞ムレハ田圃一帶菜花ノ金波ヲ打チ遙ニ琵琶ノ青藍ト相映シ快云フヘカラス

拾遺

千早振三上の山のさかき葉は  
さかへそまさる萬代までも

信 能

千載

ときはなる三上の山の杉むらや  
八百萬代のしるしなるらん

藤原季經

續拾遺

雲晴るゝ三上の山の秋風に  
さゝ波遠くいつる月かけ

淨助親王

玉葉

志賀の浦や時雨て渡る浮雲に  
三上の山をなかはかくるゝ

讀人しらす

古歌

都人富士とやいはん近江なる  
三上の嶽の雪のあけほの

讀人しらす

御上神社 三上村ニ鎮座ス延喜式ニ載スル所ノ社ニシテ天御影神ヲ祭ル傳ヘ云フ孝靈天皇六年六月神三上ノ山上ニ降臨アリ乃チ之ヲ祭ル養老元年祠ヲ今ノ地ニ建ツト古事記ニ曰ク近淡海國之御上ノ祝以伊都玖天御影神之女息長水依比賣ヲ娶ル云云三代實錄ニ曰ク貞觀元年正月二十七日近江國三上ノ神ニ從五位上ヲ授ク類聚國史ニ曰ク貞觀十七年三月二十九日近江國三上神ニ從三位ヲ授クト天慶四年正一位ヲ授ケラル壽永二年木曾義仲近江ニ入ルトキ神馬ヲ納メ建久元年

源頼朝神領三千貫ヲ付ス、建武二年足利尊氏百町ノ神田ヲ付ス、文明八年兵火ニ罹リ、宏大壯麗ヲ極メタル社殿僅ニ本社樓門ノミ免ルコトヲ得タリ、天文七年暴風本社ヲ倒ス、六角氏木村貞榮ヲ奉行トシテ之ヲ再建ス、本殿拜殿樓門ハ皆特別保護建造物ニ編入セラレ、所藏ノ狛犬二軀亦國寶タリ

盛衰記ニ曰ク、麓の森に神社有り、三上明神と名付けたり、此神と申すは第四十四代の御門元正天皇の御宇、養老年中に天降り日本第二の忌火にて此所に住み給ふ能宣といひしこの社に詣てつゝ

千早振三上の山の神葉は

さかえそまさる末の代までも

**三船塚** 野洲村大字小篠原ノ南山下ニアリ、三船姓ハ淡海弘文天皇ノ曾孫池邊王ノ子ナリ、寶龜中大學頭文章博士ト爲リ、聰敏學ヲ好ミ、博ク群書ニ涉ル、名一時ニ高シ、嘗テ勅ヲ奉シ、神武帝以來ノ諡號ヲ定ム、延暦四年七月卒ス、年六十有四

**淡海毛野巨墳** 野洲村大字小篠原ノ南山腹ニアリ、繼體天皇ノ二十一年六月、淡海毛野勅ヲ奉シテ新羅ヲ征ス、明年毛野安羅ニ至リ、諸蕃ヲ和解ス、任那ニアルコトニ

年刑賞當ヲ得ス、人心ヲ失フヲ以テ、朝廷之ヲ召ス、歸途病ニ罹リ死去ス、國ニ葬ル

**祇王寺** 祇王村大字永原ニ一寺アリ、祇王祇女佛御前刀自ノ像ヲ安置シ、又傍ニ其墓墳ト稱フルモノヲ存ス、傳ヘ云フ、往昔近衛天皇ノ世ニ、江都莊司橘時長ト云フ者アリ、院ノ北面ノ土トナリ、保元ノ亂ニ死ス、其妻ニ女ヲ携ヘテ、故郷北村ニ歸ル、三女長シテ姿色アリ、京師ニ入りテ、白拍子トナル、長ヲ祇王トイヒ、次ヲ祇女ト云フ、母ニ事ヘテ、至孝會、母病アリ、日日石清水ノ祠ニ詣テ、平癒ヲ祈ル、平清盛途ニ見テ之ヲ召ス、母ノ疾ヲ以テ之ヲ辭ス、レトモ許サレス、母子三人西入條宮ニ召サレ、寵遇日ニ渥シ、一日清盛問フテ曰ク、汝望ム所ナキヤ、若シアラハ之ヲ適ヘント、答テ曰ク、我等君ノ寵ヲ專ラニシテ、富貴比ナシ、何ソ望ム所アララン、サレト一ノ願望アリ、ソハ他ニアラス、我郷里近江國野洲郡江都莊ハ、用水ニ乏シク、早魃ニ苦シムコト甚シ、幸ニ水利ヲ通シテ、此苦患ヲ救ヒ給ハラハ、吾等一生ノ望ミ足レリト、清盛之ヲ諾シ、承安三年三月、妹尾兼康ヲ遣ハシテ、野洲川ノ水ヲ引キ、水路ヲ通セシム、之ヲ祇王川ト云フ、後佛御前寵ヲ專ラニスルニ及ヒ、世ヲ厭ヒ、母妹ト共ニ尼トナリ、菴ヲ嵯峨野ニ結ヒ、佛陀ニ事フ、後佛御前此ニ來リ、共ニ墨衣ヲ纏ヒ、一生ヲ送ルニ、後白河法皇此由ヲ聞

シ召サレ、六條長講堂ノ過去帳ニ書入レラレ、比丘尼祇王二十一祇女十九閉四十七佛十七ト記サセ給フト云フ、傾國ノ美モ、今ヤ一片ノ獨體、其有無ヲ知ルニ由ナシト雖モ唯遺功永ク傳ハリ、世ヲ益シ民ヲ利ス偉ナルカナ

北村季吟 通稱ハ久助、拾穂軒、七松子、呂菴、湖月齋、再昌院等ノ號アリ、祇王村大字北村ノ人ナリ、幼ヨリ學ヲ好ミ、産業ヲ事トセス、一族以テ癡兒トナス、平居炒豆ヲ嚙テ讀書ニ耽ル、學大ニ進ミ、名聲漸ク高シ、一俟アリ、祿三百石ヲ以テ之ヲ聘セントス、親族皆怪テ曰ク、彼ノ癡兒ヲ聘シテ何ヲ求メントスルヤト、季吟辭シテ應セス、後京師ニ移リ、玉津島祝人ノ家ニ寓シ、益、國學ヲ究メ、同社ノ祠官トナル、元祿二年二月、子湖春ト共ニ幕府ニ召サレテ、江戸ニ移リ、醫師ニ准シテ、祿二百俵ヲ賜ハリ、翌年亦三百俵ニ加増アリ、四年法眼ニ敍シ、七年更ニ三百俵ヲ加ヘラル、十四年法師ニ敍シ、再昌院ト稱ス、之ヨリ幕府ノ歌學方トナル、諸學士其學力ヲ試ント欲シ、奇僻難澁ノ問ヲ發スルモ、辨晰流ル、カ如ク、一モ屈スル處ナシ、衆皆舌ヲ卷ク、寶永二年歿ス、年八十二、子湖春其業ヲ承ク、季吟和歌ヲ飛鳥井雅章、清水谷實業ニ、俳諧ヲ安原貞室、松永貞徳ニ學ヒ、竝ニ其道ニ達ス、著書甚タ多シト雖モ、源氏物語、湖月抄、枕草子、春曙抄ノ如

キハ、引證該博、學者ノ尊重シテ措カサル所ナリ、子孫亦其業ヲ承ケテ名聲ヲ墮サス  
錦織寺 中里村大字木部ノ地、殿堂坊舎巍然トシテ空ヲ摩スルモノ、之ヲ眞宗木邊派ノ本山、天神護法錦織之寺トナス、文徳天皇天安二年、僧圓仁此地ニ來リ、一堂ヲ創設シテ、最澄刻ム所ノ毘沙門天ヲ安置シ、天安堂ト號ス、之ヨリ天台宗ノ靈場タルコト三百餘年、嘉禎元年、僧親鸞常陸國稻田ノ里ニ在リ、時ニ信太郡霞浦ノ湖中、夜夜光アルヲ見、親鸞怪訝ノ情ニ堪ヘス、浦人ニ命シテ網ヲ曳カシム、果シテ一尺八寸ノ彌陀像ヲ得タリ、親鸞之ヲ笈中ニ納メ、自カラ負フテ京師ニ還ル、其年四月、此地ヲ過キ、天安堂ノ前ニ至ル、一株ノ松アリ、笈ヲ樹枝ニ掛ケテ其下ニ宿ス、夜靈夢ニ感シ、其ノ佛像ヲ堂ニ安ンス、之ヨリ念佛ノ道場トナル、曆仁元年七月、一夜天女來リテ、錦ヲ織ル、長サ一丈五尺、幅三尺、之ヲ紫香錦ト云フ、四條天皇之ヲ聞召サレ、權中納言藤原賴資ヲ勅使トシテ、天神護法錦織之寺トイフ、八字ノ宸翰ヲ賜フ、今之ヲ堂ニ掲ク、笈掛松猶境内ニ存ス、老幹長サ十三間、周圍十三尺ニ及フ、後花園天皇ノ時、伏見宮邦高親王ノ御子徳地宮此ニ住職アリ、慶長中、徳川家康寺領二十石ヲ付シ、享保二十年、東山天皇ノ叙慮ニヨリ、御所ノ常御殿一棟ヲ下賜セラル、後准門跡ノ勅許ヲ受ケ、以テ明

治ニ至ル、住職木邊家ハ現ニ華族ニ列シ男爵タリ

大師堂 曆仁元年ノ開基ニシテ元祿七年火災ニ罹リ、同十四年將軍ノ命ニヨリテ再建ス

阿彌陀堂 曆仁元年ノ開基ニシテ、元祿七年回祿ノ災ニ遭ヒ文政八年之ヲ再建ス

毘沙門天堂 天安二年ノ開基ニシテ元祿七年火災ニ罹リ文政年間之ヲ再建ス  
宮御殿 享保二十年東山天皇ヨリ之ヲ拜領シタルモノニシテ其他殿堂僧舎其數枚舉ニ遑アラス

兵主神社 兵主村大字五條ニ鎮座ス、祭神大己貴命延喜式ノ一社ナリ、元正天皇養老二年ノ草創ニシテ樓門ノ額ハ藤原佐理ノ筆ナリト傳ヘラル、正一位勳八等兵主太神宮ノ十一字ヲ二行ニ書ス、三代實錄ニ曰ク、貞觀七年六月十四日、近江國正五位下勳八等兵主神ニ從四位上ヲ授ク、又曰ク、貞觀八年十二月二十六日從四位上勳八等兵主神ニ正四位上ヲ授ク、九年二月二十七日正四位下勳八等兵主神ニ正四位上ヲ授ク、十六年八月四日正四位上兵主神ニ從三位ヲ授クト、往古神領多ク、守山村ノ

北ニ外郭ノ鳥居ヲ建ツ、源賴朝之ヲ崇敬シテ、祠殿ヲ造營シ、神田三千七百九石ヲ寄附ス、文永年中社殿兵火ニ罹リ、足利尊氏之ヲ再建ス、其後神田掠奪ノ厄ニ遭ヒ、大ニ衰頽セシカ、織田氏神領五石ヲ付シ、徳川氏亦九石五斗ノ朱印ヲ付ス、兵主郷中ノ總社トシテ神威愈、高シ

平宗盛墳 篠原村大字大篠原ノ村端一小邱上一株ノ松ヲ栽ユル所之ヲ宗盛ノ墳トナス、源平盛衰記ニ曰ク、元曆二年六月二十一日、近江國篠原ニテ大臣殿父子ヲ斬ルト

保曆間記ニ曰ク、六月九日大臣殿を相具して、義經上洛しけり、本三位中將も此度同じく上らる、同二十日近江國篠原に著、同二十一日の朝より、右衛門督を別所に置き、今を限りと互に思はせけり、此十七年の程片時離れさりつるものをと歎き給ふ、判官さる人にて大原の聖人を請じて、善智識と教化すれば、思ひ取て、宗盛念佛し切られ給ふ、右衛門督清宗も同じく切られ給ふト

墳傍蛙不鳴池ト稱スルモノアリ、宗盛父子ヲ斬リシ時、首ヲ洗ヒシ池ナリ、今ニ至テ夏日蛙此中ニ鳴カスト傳フ、宗盛父子壇浦ニ死セス、遂ニ此辱ヲ受ク、以テ死スヘシ

死セサレハ死ニ優ル耻アリ古人豈ニ世ヲ欺カンヤ

### 第九章 甲賀郡東部

近江ノ地、一市十有二郡ヲ包ミ、中琵琶湖ニ臨ム、然ルニ獨リ湖ニ連ナラス、四圍山岳ノ繞ル所トナリテ、二箇ノ窪地ヲ有シ、面積實ニ三十有五方里、高島ニ次クノ大郡トシテ、二町二十三箇村人口七萬一千ヲ包容スルモノ、之ヲ甲賀郡トナス、東ハ伊勢國南ハ伊賀國ニ隣リ、北ハ蒲生野洲ノ諸郡ニ連リ、西栗太郡ニ接ス、形扇面ニ似テ、北ヲ扇殺トセンカ、南スルニ從ヒテ漸ク廣シ、史ヲ按スルニ、日本書紀天武紀ニ鹿深ニ作リ倭姫世紀ニ甲可ニ作ル、續日本紀聖武天皇ノ紀ニ天平十四年二月庚辰始メテ恭仁京ヲ開キ、東北ノ道ヲ近江ノ甲賀郡ニ通ストアリ、天曆十年六月十三日官符ニ近江國散位從七位上甲可公是茂ヲ以テ部内ノ兇黨ヲ追捕セシムヘシトアリ、又東大寺康永元年ノ文書ニ、甲賀東ノ郡ノ文字アリ、當時既ニ地勢ニ從テ境界ヲ定メ、信樂谷ト區別セシモノ、如シ、天平ノ頃信樂谷ニ屢、行幸アリシコトアリ、以テ京畿文明ノ波動ヲ受ケシニ似タリ、由來甲賀ノ地奈良ノ帝京ニ近接シ特ニ阿智主等率キル

所十七縣ノ歸化ノ民、此地ニ分置セラレテ其族甲賀ノ村主トナリシモノ等アリ、此等歸化ノ民ニ依リテ早ク既ニ文化ノ惠ニ浴シタルコト明カナリ、鈴鹿ノ關ノ存廢ハ、奈良平安兩朝ノ間ニ起リ、甲賀二十一騎五十三士ノ名ハ、戰國時代江南佐々木ノ家臣其威ヲ振ヒタルニ依リテ起ル、見來レハ興趣自ラ無量ナリ

**石部** 東海道五十三驛ノ一ニシテ後宇多院御領目錄近江國石灰新莊ト記シ、東寺正慶元年ノ文書ニモ此文字アリ、按スルニ灰ノ訓波比轉シテ部トナリシモノカ、此地一方山ヲ負ヒ一方横田川ニ臨ム、而モ全山石灰岩ヨリ成リ、石灰ノ製産今猶盛ナリ、此地甲賀郡ヨリ京洛ニ向フモノ一ニ道ヲ此ニ取リ頗ル要害ノ地ヲ占ム、故ニ享祿中六角氏ノ臣石部家長此地ニ城キシコトアリ、殊ニ徳川家康石部宿リノ一劇ハ誠ニ悚然トシテ粟ヲ生スルノ思アルヲ覺ユ、慶長五年六月十八日上杉家ノ命ニ從ハサルヲ懲サントシテ伏見城ヲ發シ正午大津城ニ京極高次ヲ訪ヒテ、昵親ノ盟ヲナシ、又駕ヲ走ラシテ石部ニ向ヒ出發ス、第一夜勞ヲ此地ニ休メントス、日將ニ暮ル水口ノ城主長束正家伺候シ、且ツ日ク明旦我城下ニ於テ朝餐ヲ進メントス、幸ニ枉駕ノ榮ヲ賜ヘト、辭頗ル懇懇ヲ極ム、家康諾ス、正家謝シテ城ニ還ル、正ニ寢ニ就カン

トス、然ルニ恐ルヘキ情報ハ家康ノ耳朶ヲ破レリ、石田三成ノ將島左近、今夜襲ヒ來ルヘシ、又長束正家異心アリト、具スル所ノ兵、多勢ト雖モ僅ニ三千、一夜三成正家ノ合撃ニ遇ハン乎、直ニ身首其處ヲ異ニセサルヲ得ス、即チ夜立チニ決シ、宿將本多忠勝ヲシテ前後ヲ警メシメ、己ハ婦人ノ腰輿ニ褰シテ、密ニ水口城下ヲ過キ、漸ク土山ニ達ス、正家馳セテ土山ニ至リ、家康ニ謁シ、大ニ陳謝ニ勤ム、家康欣然知ラサルモノノ如ク、國光ノ刀ナト與ヘテ之ヲ遣ハシ、翌夜伊勢ニ入りテ關ニ宿ス、當時大阪方ニシテ此企テアリシヤ否ヤヲ知ラスト雖モ、三成ニシテ此舉ヲ敢テセンカ、徳川ノ覇府三百年ノ基業ハ、一舉此ニ粉碎サレタルヤ未タ知ルヘカラス、嗚呼時乎人乎

夫木 横田山石部の原のよもぎふに  
あき風さむみ都こひしも

長 明

閻齋詠

指來石部山 青嶂翠巒間  
砂磧疊堆去 曾無草木看

阿星山常樂寺 石部町ヲ距ル半里阿星山巍峨トシテ雲表ニ聳エ、餘勢左右ニ延ヒ

テ金勝信樂ノ諸山ニ連ナリ溪流淙淙翠巒ノ間ニ流ル、處一刹アリ、塔尖松林ノ間ニ立ツ、之ヲ阿星山常樂寺トス、俗ニ之ヲ西寺ト云フ、元明天皇ノ御宇、和銅年間、僧金簫ノ開基ニシテ往昔山巔ニアリ、堂坊僧舍費ヲ竝ヘ、畫棟彫梁其ノ美ヲ盡セシモ、後漸ク荒廢ニ歸ス、延暦ノ頃、法相宗ヲ天台宗ト改メ、仁平元年、僧行胤之ヲ興隆ス、後光嚴天皇ノ御宇、延文五年三月、回祿ノ災アリ、後小松天皇應永五年、緇素ノ淨財ニヨリテ再建ノ事始メテ成ル、現今ノ堂宇即チ是ナリ、境内ニ本堂古ノ釋迦堂、三重塔等アリ、彫刻釋迦像淨土曼荼羅ノ繪畫等國寶ニ屬ス、其他美術上參考タルヘキ逸品少ナカラス、又此寺ニ鬼ノ假面二箇アリ、毎年正月十五日ノ夜、土人之ヲ被リ、炬火ヲ把テ相馳逐シ、堂ノ前後ヲ廻ル、之ヲ鬼走ト云フ、今ハ此戲モ亦廢スト云フ

本堂 ハ其營造甚古雅ニシテ特別保護建造物ニ指定セラル、安ニスル所ノ本尊千手觀世音ハ春日ノ作、脇立不動明王ハ、智證大師毘沙門天ハ、弘法大師ノ作、左右ノ二十八部衆ハ、運慶ノ作ト傳フ、又釋迦佛坐像一軀國寶ニ列ス

三重塔 大日如來ノ像ヲ安置シ塔ハ特別保護建造物タリ

阿星山長壽寺 阿星山突兀トシテ雲ヲ突クコト一千五百尺前ニ青松ノ衣ヲ纏ヒ

傍ニ紫雲ノ帯ヲ引ク處、長壽寺ノ堂合隱見スルヲ見ル、土俗呼テ東寺ト云フ、天平年中僧良辨ノ開基ニシテ清和天皇ノ勅願ニ依リテ之ヲ再興ス、染殿皇后モ亦阿彌陀ノ像一軀ヲ寄附セラレ、壽永二年二月、源賴朝棺物ノ莊ノ田ヲ寺供ノ料ニ供ス、往昔ハ七堂伽藍坊舎二十四宇アリシモ、今ハ僅ニ本堂一字ヲ存スルノミ、寺寶ニハ、傳教大師ノ金胎兩部曼荼羅惠心僧都ノ觀經曼荼羅、顏微之ノ十王圖涅槃像等アリ、其他所藏甚多シ、又鬼ノ假面アリ、鬼走ヲ行ヒシ事西寺ニ同シ

本堂 本尊ニハ行基ノ彫刻ト傳フル地藏菩薩ノ像、阿彌陀佛等ノ像ヲ安ス、中彌陀像二軀釋迦像一軀十六羅漢畫像十六幀國寶ニ編入セラレ、堂亦特別保護建造物タリ、堂前ニ樺櫻アリ、古詠世ニ傳フ

近江なる檜物の里のかはさくら

菅原光俊

花をはわきてをる人もなし

✓ 岩根山善水寺

甲賀郡岩根村大字岩根ニ在リ、醫王院ト號ス、元明天皇和銅年中ノ創建ニテ和銅寺ト名ツク、延暦中僧最澄藥師ノ像ヲ刻ミテ之ヲ安置シ、此寺ニ居住スルノ時、桓武天皇不豫ノ事アリ、最澄醫王善逝ノ法ヲ修シ、此地ノ清水ヲ獻ス、御惱

忽チ癒ユ、乃チ勅シテ善水寺ノ號ヲ賜ヒ、後比叡山草創ノ時、當寺ヲ以テ比叡最初ノ別院トナス、爾後歷代ノ勅願所トナリ、源賴朝亦之ヲ崇信ス、元龜二年織田信長火ヲ放チテ之ヲ燒ク、僧房多ク燒失ス、本堂ノミ僅ニ之ヲ免ル、其ノ後山下ノ土人之ヲ守リ、僧侶寓居スルモノアリ、天和二年東叡山ノ末寺トナリ、境内二百五十一間二百二十間地方一町八段八畝七步高二十六石餘除稅地トナル、寺寶多ク本尊藥師如來及脇立日光月光像四天王、不動明王金剛力士等ノ像皆國寶ニ編入セラル、本堂ハ貞治三年五月大師堂ハ正徳三年觀音堂ハ享保六年ノ再建ニ屬シ、本堂ハ今特別保護建造物タリ

妙感寺 甲賀郡三雲村大字三雲ニアリ、雲照山ト號シ、本尊觀世音今洛北妙心寺ノ末派ニ屬ス、開基ハ寂照國師即チ藤原藤房卿ナリト、藤房ハ宣房ノ子、元弘ノ亂、後醍醐天皇ニ隨從シテ、忠勤ヲ抽シ、事平ラクノ後僧トナリテ往ク所ヲ知ラスト云フ、故ニ此地亦傳説ノ一ニ數ヘラル、卿隱栖ノ後、此山ニ分ケ入りテ寺ヲ創メ、一首ノ歌ヲ詠ス、世のうさをよそに三雲の奥深くてる月影や山すみの友ト留錫十年、遂ニ康暦二年三月二十八日遷化ス、壽八十五ナリト傳ヘラル、明治元年主上御東幸ノ際石山



右兵衛權佐ヲ遣ハシテ金幣ヲ賜フ亦榮トスヘシ

勅書

權中納言 藤原藤房

汝當元弘之年效力皇室至忠惻愴千秋下使人景慕不止近江國妙感寺汝之古跡近接東巡之道追感殊深因爲慰汝之靈魂遣使石山右兵衛權佐藤原基正賜金幣宣

明治元年戊辰九月二十二日

水口町址水口古城址 水口町ハ元海道驛站五十三ノ一ナリ幕政以前美濃部ト言ヒ古ハ甲賀驛ト稱セシカ如シ江家次第公卿救使進發ノ條下ニ甲賀驛ニ到リ國司供給ストアリ一條兼良京都ノ亂ヲ避ケテ水口ヘ退散ノ時詩アリ

憶得三生石上緣 一巷風雨夜無眠

今朝更下前山路 老樹雲深哭杜鵑

林春齋亦詩アリ

甲賀郡中途不窮 郵程日日向西風

今田地子何沈陸 水口行船朱晦翁

垂加翁ノ詩ニ曰ク

甲賀郡中水口邊 日雲秋晚意茫然

寥寥宿稱千年迹 行客空思神誨傳

天正十三年中村一氏始メテ此地ニ城キ長束正家ノ敗亡ト共ニ此城一旦廢墟トナリ寛永十年徳川氏別ニ地ヲトシテ新城ヲ營ミ加藤氏ノ居城トナリテヨリ此地大ニ昌ヘ以テ今日ニ至ル今ヤ郡中ノ首府トシテ各種ノ機關悉ク具リ葛籠細工ノ産出亦少ナカラス此地唯一ノ産物タリ

水口古城址 岡山ニアリ高三百尺周圍一里二十町山勢孤立シ東北ハ田圃ニ及フ西麓ヨリ本丸迄四町餘之ヲ追手トス東麓ヨリ本丸迄三町五十一間之ヲ搦手トス本丸ノ跡方十三間二ノ丸三十二間半ト二十一間西ノ丸二十四間ニ二十三間三ノ丸三十五間ニ十七間アリ天正十三年中村一氏豊臣氏ノ命ヲ奉シテ之ヲ築キ十八年八月一氏駿府城ニ移リ増田長盛之ニ封セララル文祿四年長盛武藏ノ岩槻ニ轉シ長束正家之ニ封セララル慶長五年關ヶ原ノ役部下ノ質子ヲ城内ニ置キ弟伊賀守ヲシテ之ヲ守ラシメ自ラ兵ヲ率テ美濃ニ入ル大阪ノ軍敗ルニ及

ヒ、正家逃レ歸ル、池田長吉來リ攻メ、城陷ル、正家蒲生郡櫻谷ニ逃レ終ニ自殺ス  
 水口城址 城ハ寛永十年小堀遠江守徳川氏ノ命ニヨリテ築ク所、後山岡主計頭  
 之ニ代ル天和二年加藤明友石見國吉永ヨリ此ニ移封シ始メテ水口城主トナリ  
 元祿八年明友ノ子明英ヲ下野國壬生ニ移シ鳥居忠救ヲ此ニ封ス正徳二年命ア  
 リ、加藤鳥居ノ二氏ヲ元ノ如クシ子孫相襲テ明治ニ至リ後城ヲ廢ス  
 中村栗園 通稱ハ三郎諱ハ和字ハ子藏栗園ハ其號ナリ、常ニ號ヲ以テ行ハル、豊前  
 中津ノ人、片山東籬ノ二子ナリ、幼ニシテ豪邁好シテ角觥ヲ試ム、父之ニ書ヲ習ハシ  
 メントシ師ヲ選ヒテ之ニ就カシム、三年ニシテ大ニ頭角ヲ顯ハス、既ニシテ廣瀬淡  
 窓ニ學フコト二年、去テ帆足愚亭ニ學フ、此時栗園學資給セス、困苦具サニ臻ル、然レ  
 トモ毫モ憂色ナク、日夜書冊ニ親シミ、手卷ヲ解カス、一旦龜井脇陽ノ門ニ贊ヲ執リ  
 シモ、故アリテ復タ愚亭ニ從遊ス、既ニシテ慨然上國ニ遊ハントシテ單身大阪ニ抵  
 リ、贊ヲ篠崎小竹ノ門ニ執ル、會同門ノ士、松永玄齡ナルモノアリ、栗園ト郷里ヲ同シ  
 クシテ、近江水口藩ニ筮仕セルモノ、小竹玄齡ヲ介シテ之ヲ水口藩ノ儒員タラシメ  
 ントス、當時藩儒中村介石老テ子ナシ、即チ栗園ヲ養フテ嗣トナス、栗園之ヨリ水口

藩ノ學ヲ督ス、嚴格以テ子弟ヲ導キ、權門勢家ノ子弟ト雖モ、毫モ假借セス、大ニ藩風  
 ノ振肅ヲ期ス、既ニシテ同藩ノ士、山本某ノ女ヲ娶リ、一女ヲ舉ク、會嘉永六年米艦浦  
 賀ニ來ルコトアリ、然レトモ太平日久シクシテ世皆無事ニ狎レ、意ヲ兵革ニ留ムル  
 モノナシ、栗園慨然トシテ歎シテ曰ク、我豈ニ腐儒ニ倣ヒテ時事ヲ度外視ス可ケン  
 ヤト藩主ニ上言シテ大ニ武事ヲ勵マサンコトヲ請フ、主之ヲ聽ス、栗園大ニ藩士ヲ  
 訓練ス、是時ニ方リテ、幕府政ヲ失シ、動モスレハ朝議ニ違フ、此ニ於テ尊王攘夷ノ說  
 ヲ唱ヘテ、京洛ニ集マルノ志士其數幾百人ナルヲ知ラス、栗園此間ニ處シテ、畫策宜  
 シキヲ得能ク藩論ヲ鎮メテ其舉措ヲ誤マラシメス、水口藩之カ爲ニ一士ヲ失ハサ  
 リシモノ、其功蓋シ計ルヘカラス、慶應四年正月、伏見鳥羽ノ戰起ルヤ、京洛爲ニ騷然  
 羽檄旁午ス、此時藩主京ニ在リ、兵ヲ以テ禁闕ヲ守リ、使ヲ馳セテ之ヲ水口ニ報ス、栗  
 園馳セテ入京シ、言ヲ當路ニ獻シ、頗ル王事ニ勤ム、既ニシテ藩主栗園ヲ擢テ、執政  
 トナス、栗園知遇ニ感シ、是ヨリ股肱ヲ以テ任シ、大ニ弊政ヲ改ム、明治二年六月、藩主  
 知事トナルヤ、奏シテ大參事トナス、是ニ於テ藩制ヲ改メ、人材ヲ登用スル等施設ス  
 ル所少カラス、三年正月職ヲ辭シテ老ス、朝廷多年王事ニ勤ムルヲ嘉シテ、特ニ褒叙

三十石ヲ賜ヒ以テ其身ヲ終ヘシム、蓋シ異數ノ典ナリ、栗園老スト雖モ、徒ニ花月ヲ友トセス、報國ノ念止ミ難ク常ニ時事ヲ以テ志トシ屢、獻策シテ其非ヲ論ス、明治十一年八月、車駕北陸道ヲ巡リテ還幸ノ次、栗園ヲ高宮ニ召シテ謁ヲ賜フ、栗園行在所ニ至リ、天顏ヲ拜シテ感泣措ク所ヲ知ラス、私著孝經翼一本ヲ獻ス、聖上嘉納シ給ヒ紅白ノ絹各一疋ヲ賜フ、亦特典ナリ、栗園家ニ歸リテ一絶ヲ賦シテ其喜ヲ記ス曰ク

恩錫羅綃紅與白 行宮咫尺拜天顏

歸來恍惚猶疑夢 感淚留痕雙袖斑

明治十三年七月車駕又西京ニ幸シテ水口ニ憩ハセ給ヒ、復タ栗園ヲ召ス、栗園知事ニ從ヒテ行在所ニ至リ、天機ヲ奉伺セリ、同十四年十二月二十日病ミテ家ニ歿ス、年七十有六謝世ノ詩ニ曰ク

以我讀修力 擊破生死關

笑入佳城裡 長眠不復還

明治三十六年車駕西幸シテ武ヲ播磨ニ閱セラル、ヤ、十一月十三日特旨ヲ以テ從四位ヲ追贈セラル、一世ノ儒臣其功ヲ成シテ、水口城外駿野ノ兆域ニ眠ル、天恩枯骨

ニ及ヒ四民其徳ヲ仰ク嗚呼偉ナル哉

**土山行在所** 土山ハ鈴鹿山下ノ一驛ニシテ、堆山トモ書ケリ、明治元年戊辰九月、車駕東幸ノ途、月ノ二十二日、駕輿此ニ駐マリ、舊本陣土山某ノ邸ヲ以テ行在所ニ充ツ、此日恰モ聖誕ノ佳辰ニ當リシカハ、御式ノ事アリ、仍テ普ク酒肴ヲ驛民ニ賜ヒ、又沿道ノ孝子節婦等ヲ旌表セラレ、各賞典ヲ賜ハリタリ、誠ニ一世ノ盛事ニシテ、其邸今ニ存シ、御用ノ家具一モ散佚セス、之ヲ保存セリ

**田村神社** 土山驛ノ東ニアリ、祭神三座嵯峨天皇倭姬命及坂上田村麻呂ノ靈ナリ、一ニ鈴鹿ノ社ト稱ス、垂仁天皇四十五年甲賀ノ翁ト云フモノ倭姬命ノ靈ヲ祭リタリト傳フ、嵯峨天皇勅願ノ神社ニシテ、弘仁三年辛卯ノ冬、初テ社ヲ建テ、三年正月十八日、除厄ノ神事アリ、後坂上田村麻呂鈴鹿山ノ賊ヲ征討シテ、大功アルヲ以テ、此社ニ合祀スト云フ、境内廣潤、老樹蒼鬱トシテ、晝猶暗ク、田村川淙淙トシテ、青藍ヨリモ清ク、神威愈、崇シ今郷社ニ列ス

鷲峰文集

田村祠宇土山東 鈴鹿山西小路通

第十章 甲賀郡西部

甲賀郡ノ西部四境山ニ圍マレテ、一寰宇ヲ盡シ、自然ニ一城ヲ構フ、包容スル所ノ村實ニ五ヲ算ス、曰多羅尾曰小原曰朝宮曰長野曰雲井之ヲ信樂谷ノ一區トナス、山岳四境ニ聳ニ溪流一所ニ集マリ、西シテ大戸川トナリ、栗太郡ニ入ル信樂ノ名由來紫香樂志加良岐等ニ作ル、蓋シ繁木ノ義、樹木蕃茂ノ狀ヲ言フナリ、東、南、北、西ノ諸材ハ昔ノ所謂甲賀ノ柚ニシテ西ハ栗太郡田上ノ柚ニ連リ、南、西、近ク山城ノ相樂、懸木ノ義ニ隣ル、此點ヨリ之ヲ察スレハ樹木ノ繁茂ヲ意味シテ遂ニ地名ヲナスニ至リシモノ、蓋シ失當ノ說ニアラサルヲ信ス、加フルニ今ノ多羅尾ノ地ハ古ノ刺萩野ノ地、雲井村大字牧ノ地ハ甲賀ノ牧トシテ天智帝ノ置ク處ト傳フ、若シ夫レ奈良朝紫香樂宮ノ盛時、崇佛ノ大業、此山阪ヲシテ燦然タル文化ノ惠ニ浴セシメシヲ思ヘハ誰カ懷古ノ感ナカラシヤ、正應弘安ノ頃、此地近衛家ノ領ニ歸シ、其支族永ク多羅尾氏トナリテ奕葉其職ヲ襲キ、以テ明治ニ至ル、多羅尾代官ノ名、信樂燒ノ名ト共ニ世

ニ高カリシカ今ハ陶器獨リ其聲價ヲ擅ニスルノミ

保良舊都

土俗相傳フ雲井村大字勅旨ノ地ハ淳仁天皇天平寶字五年都ヲ近江ノ

保良ニ遷サレタルノ地ナリト、天平寶字八年惠美押勝叛シ、帝亦廢セラレ給ヒテ、淡

路ニ遷幸セララル、其間實ニ三年、帝嘗テ保良ノ宮ニ在リ、椿ノ葉ニ御製ノ和歌ヲ書シ

信樂川ニ流シ給フ、曰ク、信樂や外山の奥にすまゐりてわれこの洞にありこころべ

し下、今玉桂寺ニ廢帝ノ御墓アリト傳フレトモ其正否明ナラス

内裏野

甲賀郡雲井村大字黃瀬ノ地、聖武天皇ノ行在所ニシテ甲賀寺ノ在リシ所

今布目瓦及宏ナル柱礎等諸所ニ點在ス、續日本紀ニ曰ク、天平十四年六月癸未詔

シテ曰ク、朕將ニ近江國甲賀郡紫香樂村ニ行幸セントスト、己亥紫香樂宮ニ行幸シ

庚子更ニ行幸ス、十五年七月癸未紫香樂宮ニ行幸シ、十月壬午東海東山北陸三道ニ

十五國ノ調府等ノ物、皆紫香樂ノ宮ニ貢セシム、乙酉始メテ寺地ヲ開ク、是ニ於テ行

基法師弟子等ヲ率キテ衆庶ヲ勸誘ス、十一月天皇恭仁宮ニ還ル、車駕紫香樂ニ留マ

ルコト凡四箇月、十六年二月車駕難波宮ヨリ三島ノ路ヲ取リテ、紫香樂宮ニ行幸ス

三月金光明寺ノ大般若經ヲ運ヒテ、紫香樂宮ニ致ス、十一月甲賀寺始メテ廬舍、那佛

倭ノ骨柱ヲ建ツ、天皇親臨シテ手ツカラ其ノ繩ヲ引クト、紫香樂宮ハ甲賀寺ニシテ別ニ帝居トナリシニアラス、唯一時ノ行宮ニ止マリシカ如シ、當時崇佛ノ風盛ナリシ時ナルヲ以テ宏大壯麗ナリシハ、礎石ニヨリテ知ルコトヲ得ヘシ、此寺何時ノ頃廢セシカ後世聞ク所ナシ

信樂郷及多羅尾氏 正應四年、關白近衛家基始メテ信樂郷ヲ領シ、後屢、此地ニ往來シ、老後此地ニ幽栖シテ、永仁四年此地ニ薨ス、其裔永ク此地ニ傳ハリ、多羅尾氏ト稱ス、徳川氏ノ世郡代トナリ、其職ヲ世世ニス、代ヲ經ル二十五世、年ヲ經ル六百歳奕葉連綿タリ、此地古詠多シ

續後撰 是るたつとほとや經ぬらん信樂の 源 重 之

續古今 いまよりや外山の色もかはらん 中務親王

秋風さむし信樂のささ

新後撰 しからきの山山櫻春ことに 隆 源

いく世宮木にもれて咲くらん

六帖 しからきの峰立ならす春霞 よみ人しらす

はれすも物を思ふ比かな

夫木 冬さむみ槇の葉しろく霜さへて 經 正

朝さひしかるしからきの里

### 第十一章 蒲生郡西部

湖東二十四方里ノ面積ヲ占メ、東西九里ニ餘リ、南北四里ニ垂ントス、之ヲ蒲生郡ノ地トナス、而シテ東部ヲ除クノ外山岳少ナク、平野遠ク相連ナリ、西北湖面ニ向テ傾斜ス、戸數一萬九千ニ近ク、人口九萬餘アリ、古ノ蒲生野ノ地今ヤ人煙雲霞ノ如シ誰カ桑滄ノ嘆ナカラシヤ、天日槍此地ニ來リテ、工藝ヲ授ケン蹟江南六角ノ餘威公方義尙ヲシテ釣里ニ憤死セシメシ觀音寺城七層ノ天主樓ヲ營ミテ、戦亂暗黒ノ世ヲ回サントシタル安土城礎、何レモ皆唯其名ヲ止ムルノミ、雄商西村ノ事蹟ニ至リテハ誠ニ海國男子ノ本領ヲ發揮シテ餘蘊ナシト云フ可シ

水窪岡 岡山村大字、秋ニ屬シ俗ニ岡山ト云フ、湖中ノ一島ナリ、岩石突兀トシテ山

上ニ滿チ、湖中ノ一奇觀ナリ、永正八年八月十四日、將軍義澄此山ニ薨ス、年三十三ナ  
リト舊記ニ見ユ、古歌ニ詠スル所ノ水莖ノ岡之ナリ、傳ヘ云フ、往昔巨勢金岡、此地ニ  
來リ風景ヲ畫カントス、其絶勝到底筆力ノ及フ所ニアラストテ筆ヲ抛チタリ、夫レ  
ヨリ水莖ノ岡ト云フト、水莖ハ筆ノ異名ナリ、此地他ニ硯ケ淵筆ケ崎ナト號スル所  
アルハ此ニ基ツクト云フ、サレト奈良朝ノ歌人、柿本人丸、詠シテ曰ク「雁金ノさむく  
なるより水莖の岡の葛の葉色付きにけり」トアレハ水莖ノ岡ノ名必シモ金岡ニ始  
マラサルヲ知ルヘシ

新古今

みつくきの岡のくすはも色付て

讀人知らす

今朝うらかなり秋の初風

家 隆

玉吟

かき絶てどふ人もなし水莖の

岡のやかたの五月雨のころ

讀人知らす

草菴

五月雨の日數にまさる水莖の

岡のみなどはさそさはくらん

定 家

新後撰

水莖の岡の眞葛を海士のすむ

里のしるへど秋風をふく

いかにして手にたにとらぬ水莖の

爲 家

續後拾遺

つれもなき人に見せはや水莖の

岡の萱生のみたれやすきを

前 大臣

類聚名

水莖の岡のみなどのなみよりや

筆の海てふ名にや立らん

爲 家

奥ノ島 蒲生郡島村ノ地細ク水ヲ通シテ島ヲナス、古來仙行山、仙居山、笠鉢山、片吹

山等ノ名アリ、島中王ノ濱ト云フ處アリ、往昔惟喬親王此地ニ幽棲セラレ、是ヨリ王  
ノ濱ノ名アリト、或ハ云フ、天武天皇此地ニ行幸アリ、故ニ此名アリト、何レカ是ナル  
ヲ知ラス、古來此地ヨリ椰子ヲ朝貢スルノ例アリ、延喜式例貢ニモ近江ノ椰子トア  
ルヲ見レハ、其由來頗ル古キヲ知ルヘシ、椰子ハ其數三ツヲ貢スルヲ常トシ、朝廷ヨ  
リハ錢一貫文ヲ賜フ、井伊氏此地ヲ領セシヨリ、料米一石五斗ヲ與ヘ、椰子田ヲ置キ  
以テ朝貢ニ供フト、此島ニ名刹長命寺アリ、本堂十二間四方特別保護建造物、南面ス

伊崎耶山ト號ス、本尊千手觀世音ノ像ヲ安シシ、天台宗ノ末派ナリ、寺傳ニ云フ、草創ハ崇峻天皇元年聖德太子ノ開ク所、天智天皇志賀ノ宮ニ在ルノ日、此地ニ行幸シ、勅願所ト定メラル、後花山上皇此地ニ參拜ノ事アリ、之ヨリ西國第三十一番ノ札所トナル、元暦元年八月、佐々木家義平家ノ士ト大原谷ニ戰ヒ、之ニ死ス、源賴朝其ノ忠節ヲ感シ、其子定綱ニ命シテ、此寺ヲ再興セシメ、以テ秀義ノ冥福ヲ修ス、其時本堂ヲ初メ、三佛堂阿伽井堂護摩堂寶塔鐘樓僧房等ヲ再建セシメラレ、天台座主ノ弟子、尊海ヲ中興開山トシ、賴朝自ラ秀義ノ像ヲ圖シテ之ヲ與フ、定綱之ヲ寺ニ納メ、秀義ヲ長命寺殿、近州大守天岳崇瑞大居士ト稱シ、多クノ寺領ヲ寄附ス、後佐々木氏賴法華經一部佩刀一口ヲ納メ、寺塔ヲ修ス、元龜四年兵火ニ罹リ、燒失セルヲ以テ、天正十年一山ノ僧侶、普ク諸方ニ勸進シテ造營ス、今ノ堂舎之ナリ、後豐臣秀吉愛知郡塚村ノ地百石ヲ寺領ニ付ス、國寶ハ本尊千手觀世音ノ像、絹本寶冠彌陀如來ノ像、同勢至菩薩像等ニシテ、其他美術上參考トナルヘキ逸品少ナカラス

**八幡町** 比牟禮山ノ下、人家櫛比シ、一市街ヲ形成ス、戶數千五百、人口六千六百之ヲ八幡町トナス、由來近江商人ノ根據地トシテ、近江蚊帳ノ產地ヲ以テ其名世ニ著ハ

ル、往昔ハ宇津呂莊ノ内、馬場村ト云フ、天正十四年豐臣秀次八幡山ニ築城シテ、近江全國ヲ領シ、城下ニ市街ヲ開カント欲シ、安土町ヨリ商賈ヲ移住セシメ、又寺院等モ多ク之ヲ移ス、爲ニ一時隆盛ノ市街ヲ爲セリ、町名猶安土ノ舊名ヲ存スルモノ多シ、八幡ノ町名ハ八幡社ノアルニ因ル、秀次京師ニ歸ルノ後、一旦大ニ衰ヘタリト雖モ、爾來再ヒ昌ヘテ今日ニ至ル

八幡神社ハ正曆二年五月、宇津呂村ノ松林ニ鎮座スル所ト傳フ、其後比牟禮山ニ社殿ヲ建テ上ノ社ト號シ、山下ニ神功皇后玉依姬ヲ祭ル、天正十四年秀次城ヲ築クニ及ヒ、上ノ社ヲ山下ニ移シ、下ノ社ト合祀ス、今ノ社はナリ、後徳川家光社領五十四石三斗餘ヲ寄附ス、國寶安南船ノ額等ハ此社ノ神寶トシテ其名高シ

**西村太郎右衛門** 慶長中八幡町内新町ニ生レ、少年商賈ノ事ニ從ヒ、屢九州地方ニ行商セリ、元和元年物貨ヲ積載シテ九州ニ赴ク、會颶風大ニ起リ、逆浪天ヲ突キ、怒濤地ヲ覆ヘス、爲ニ船檣折レ、舵機亦碎ケ、進退自由ヲ失シ、船將ニ覆沒セントス、太郎右衛門始メ、乘組一同運テ天ニ歸シ、唯風浪ノ漂ハスニ任スノミ、漂流數日海波常ニ復シテ再ヒ天日ヲ見ルコトヲ得タリ、船會陸地ニ近ツキ、正ニ一港灣ニ漂著セルヲ見

ル、衆大ニ喜ヒ、其如何ナル國タルヲ知ルニ由ナキモ、試ニ上陸シテ水ヲ求メ食ヲ乞ハントス、忽チ見ル、陸上旌旗天ヲ蔽ヒ、劍戟閃閃トシテ戰正ニ酣ナルヲ、太郎右衛門以爲ク、今若シ上陸センカ、忽チ彼等ノ殺戮スル所トナルヤ必セリ、然レトモ、我等ノ一行ハ、素ヨリ魚族ノ餌タルヘカリシモノ、幸ニ一命ヲ拾フテ、此地ニ著スル、事ヲ得タル豈ニ我國神ノ冥護ニ非ラサルヲ知ランヤ、我等今我國民ノ特性ヲ發揮シ不義無道ヲ伐チテ無辜ヲ安ンセンカ、是レ國神ニ報ユル所以ノ途ノミト、之ヲ衆ニ謀ル議一決ス、然リト雖モ、何レニ黨センカ、何レカ無道ノ軍ナリヤ、一同大ニ迷フ、太郎右衛門即チ一智ヲ案シ郷里ノ産土神八幡宮ヲ祈念スルコト少時、圖ヲ抽テ、之ヲ定ム曰ク、防守ノ軍ニ黨セヨト、衆踴躍ス、即チ海賊防禦ノ爲メ、船底ニ藏メタル、甲冑ヲ取出シ、之ヲ著シテ刀ヲ提ケ突入ス、攻撃ノ軍、突然背後ニ敵ヲ受ケ、衆狼狽ス、防守ノ軍之ニ力ヲ得、内外挾撃、遂ニ敵ヲ塵ス、戰收マリテ後、初メテ防禦軍ノ國王ニシテ叛臣ノ攻撃ニ遭ヒタルモノナルコトヲ知ル、國王太郎右衛門ノ勇武ニ感シ、將軍ト稱シテ一城ノ主トナス、富貴比ハシ、後此地ノ安南國タルコトヲ知ル、居ルコト多年、望郷ノ念禁シ難ク、乃チ國王ニ請ヒテ暇ヲ得、一船ヲ繕シテ、珍玩奇寶ヲ滿載シ、正保四年

安南ヲ拔錨シ、長風萬里、恙ナク長崎ニ著シ、意氣揚揚直ニ上陸セントス、而ルニ當時鎮國ノ禁嚴シク、一タヒ足ヲ海外ニ出シタルモノハ、上陸ヲ許サ、ルノ事由ヲ以テ之ヲ拒絕セラレタルノミナラス、齋ラス所ノ奇玩悉ク官沒セラル、太郎右衛門ノ遺憾思フヘシ、止ムコトヲ得ス、使ヲ以テ親戚故舊ヲ長崎ニ呼ヒ、生別ヲナス、始メテ彼地ヲ出テントスルヤ、郷里八幡宮ニ奉納センカ爲メ、畫工ニ命シテ正ニ上船歸國セントスルノ狀ヲ圖セシム、然ルニ是亦當ニ長崎官憲ノ沒收スル所トナラントス、歎願哀訴、漸クニシテ當時長崎來遊中ノ畫工、菱川師宣ヲシテ模寫セシムルコトヲ得之ヲ親戚ニ託シテ、八幡祠前ニ奉懸シ、名殘盡キサル我蜻蛉洲ノ青巒ヲ後ニシ涙ヲ吞ンテ安南ニ歸リシト云フ

伴嵩隱 名ハ資芳、閑田子ト號ス、八幡町商家ノ子、有名ノ國學者ナリ、少ヨリ文雅ヲ好ミテ、牙籌ヲ採ラス、京師ニ出テ、國學ヲ有賀長伯ニ學ヒ、後武者小路實岳ノ門ニ入ル、實岳薨去ノ後、獨リ古學ヲ研究シ、遂ニ一家ヲ成ス、文章和歌ヲ以テ名聲都門ニ喧シ、當時京都ニ於テ、蘆菴、燈月、慈延ト嵩隱ヲ併稱シテ、斯道ノ四天王ト云フニ至ル、洛東大佛ノ邊ニ住居シ、居ヲ閑田廬ト云フ、故ニ己亦閑田子ト稱シ、優遊著作ノ事ニ



從フ、兼テ漢學ヲ善クシ、且ツ佛理ヲ究ム、林泉院六如上人ト共ニ、方外ノ交ヲ結ヒ、往來最モ繁シ、六如嘗テ詩ヲ賦シ之ヲ贈ル、曰、老來幾部著書成、祇道屏居遂悄悄、最是紙田閑不得、長遭筆乘四時耕、ト嵩蹊乃チ悅テ曰ク、此詩ハ余カ實録ナリト、人ト爲リ、篤厚温順ニシテ、人ニ忤ハス、妙法院宮殊ニ寵遇ヲ賜フ、文化三年七月二十五日病歿ス、年七十有四、若ハス所、閑田耕筆近世畸人傳等甚多シ

西川吉輔 幼名ハ繁吉、通稱ハ善六、諱ハ吉輔、藏六、飯洲武ノ舍、君子樓、郁子園、竹菴、百竹等ノ號アリ、家世世八幡町大字仲屋元ニ居リテ、肥料ヲ商フ、父ヲ善六ト云フ、文化十三年七月生ル、資性剛毅ニシテ、慷慨氣節ヲ尙フ、始メ大津ノ僧教晤ニ就テ和漢ノ學ヲ修メ、後野之口隆正ニ從ヒテ、皇學ヲ學ヒ、大ニ得ル所アリ、爾後益々皇典ヲ究ム、弘化四年七月、平尾可寛ノ紹介ヲ以テ、平田篤胤歿後ノ門ニ入り、平田鐵胤ニ學フ、安政中幕府ノ處置屢、朝意ニ違フコトアリ、慷慨ノ士奮起シテ、尊王攘夷ノ說ヲナスモノ多ク、世論漸ク喧シ、偶、安政五年、大老井伊直弼兵ヲ率キテ、上洛、群議ヲ排シ以テ開港ノ勅許ヲ得ントスルノ說アリ、吉輔之ヲ聞キテ、大ニ驚キ、走セテ京ニ入り、谷森外記ニヨリテ、三條實萬卿ニ密訴ス、是ニ於テ事九重ニ達シ、幕府ノ計策遂ニ行ハレヌ、爲

ニ吉輔拘留其罪ヲ糾サレ、町内預ケテ命セララル、之カ爲メニ、隣保親戚等、屢々幕吏ノ嫌疑ヲ受ク、知友切リニ、將來國事ニ奔走スルナカラシメ、勸ム、吉輔聽カス、依然トシテ國事ニ勉メ、伊藤俊介、井上聞多等ノ諸名士ト密ニ相往來ス、吉輔志ヲ決シテ家ヲ出テ、密カニ上京シ、備後ノ士野呂久左衛門ノ寓居法皇寺門前ニ寓ス、志士此ニ集ルモノ多シ、既ニシテ慷慨悲歌ノ士、角田忠行等、同志九名、幕府不臣ノ罪蹟ヲ懲戒スト稱シ、文久三年二月二十二日ノ夜、風雨ニ乘シテ、洛西等持院ニ闖入シ、足利尊氏義詮義滿三塑像ノ首級ヲ奪ヒテ、凱歌ヲ舉クルノ事アリ、幕府其黨ヲ追捕シテ、大ニ其罪ヲ糾サントス、吉輔事ニ座シテ、彦根ニ捕ハレ、山城國中ヲ構ヘ、江戸十里四方追放當分ノ内親類預ケノ身トナル、町民亦吉輔ノ爲、幕府ノ災禍ヲ受ケンコトヲ恐レ、之ヲ除籍セリ、吉輔身ヲ措クニ處ナク、慶應三年、彦根藩ノ士、澁谷驢太郎ノ家ニ寄ル、次テ彦根藩ハ吉輔ヲ士籍ニ列シ、終身毎年米百俵ヲ扶持ス、大政維新ノ後、吉輔命ヲ享ケテ京ニ入り、金穀出納御用掛ヲ命セララル、慶應四年三月、同官ヲ免セラレ、同年十月十二日、更ニ皇學御用掛ノ命アリ、專ラ皇學ノ擴張ニ勤ム、明治二年十月三日、正七位ニ敘ス、四年六月、教部省九等出仕ヲ申付ケラレ、七年三月、日吉神社大宮司ニ任ス、十

三年一月彦根ニ於テ病ヲ發シ五月十九日遂ニ不歸ノ客トナル享年六十有五遺骸ヲ鄉里八幡日杉山ニ葬ル四十年五月特旨ヲ以テ從四位ニ追陞セララル

八幡山城墟 八幡町ノ西北ニ一山アリ俗ニ八幡山ト稱ス比牟禮山又法華峯ノ名ヲ付ス山高カラスト雖モ湖濱ニ聳エテ風景絶佳且ツ城址ヲ以テ其名顯ハル城ハ天正十三年豊臣秀次安土城ヲ毀テテ此所ニ築キ近江一州ヲ領シテ居城トナシ近江中納言ト稱ス十八年京師ニ歸リ秀吉ノ後ヲ嗣キテ關白トナル後秀次逝去シ廢城トナル本丸二三ノ郭埋門石垣等ノ礎石猶存ス今八幡町ニ通スル船入川ハ當時ノ外濠ナリト云フ比牟禮山上松樹舊ニヨリテ青ク八幡祠前老杉尙ホ天ニ參ス秀次ノ英魂長ニ此地ヲ護スルニ似タリ

沙々貴神社 安土村大字常樂寺ニ鎮座ス延喜式内ノ社ニシテ祭神四座大彥名命仁德天皇宇多天皇敦實親王之ナリ創建ノ年月詳ナラスト雖大彥名命ノ後裔佐々貴山公之ヲ崇敬祭祀セシヲ見レハ其年代頗ル古キカ如シ醍醐天皇延喜二年勅使參向ノ事アリ朱雀天皇亦勅使ヲ參向セシメ給フ村上天皇天喜四年敦實親王此地ニ居住シ給ヒシ時朝廷ニ奏聞セララル事アリ同八年五月朔日勅使勘解由次官藤

原佐忠參向シテ官幣ヲ納メラル敦實親王厚ク此社ヲ崇敬セラレシカ御孫源扶義公近江國守ニ任シ本社ノ祭事ヲ主ル之ヲ近江源氏佐々木家ノ始祖トス蓋シ宇多天皇敦實親王ヲ合祀セラレシハ此時ニアルカ如シ子源成賴始メテ弓箭ヲ執リ武事ヲ鍛練ス長曆元年大ニ佐々木山ニ城キテ之ニ居リ本社ノ神主ヲ繼キ社號ニ依テ佐々木氏ヲ稱シ本社ヲ氏ノ社トス其孫經方ニ至リテ長子季定ニ武職ヲ讓リ次子行定ニ祭神ノ職ヲ繼カシム武家佐々木ハ其本宗ヲ失ヒシモ祭祀ノ家今ニ傳ハリテ連綿タリト云フ後源賴朝此社ヲ崇敬シ報賽ノ爲自筆神號ノ額ヲ納メ社殿造營ノ事アリ後江南佐々木家ノ隆盛ニ趨クニ從ヒ本社ノ崇敬亦最モ厚シ六角家織田信長ノ爲メニ其守ヲ失ヒシモ徳川家康此社ヲ敬ヒ社領ヲ寄附スル所アリ且ツ佐々木六角家ノ敗亡ハ其族ヲ四散シタルノ結果却テ各地ニ其餘流ヲ生シ崇敬ノ誠ヲ致スモノ甚多ク神威益崇キヲ加フ今郷社ニ列ス

安土山 蒲生郡ノ神崎郡ニ接續シ觀音寺山ノ餘勢延テ湖上ニ突出スル處松樹蒼鬱總見寺ノ塔尖其間ニ隱見スルモノ之ヲ安土山トナス山ハ高サ二町餘周回一里半頂上ニ天守樓ノ址及本丸二城三城ノ殘礎石垣等猶存在ス又徳川家康羽柴秀吉

ヲ始メ、諸將ノ邸址アリ、山下今ノ下豊浦ノ地ハ、當時ノ市街ナリシナリ、城ハ天正四年正月、織田信長ノ築ク所、丹羽長秀ニ奉行ヲ命ス、明智光秀天守樓ヲ建ント請フ、始メテ目加多山ヲ改メテ、安土山ト稱ス、(安土ハ的塚ノ義ナリト云フ)四月朔日ヨリ大石ヲ以テ石垣ヲ築キ、中ニ天主ヲ建ツ、是レ本邦天守樓ノ始メナリ、天主ハ一重石倉ノ高サ十二間、二重ハ東西二十間、南北十七間、總テ七層ヨリ成リ、柱ノ數二百四本、總高サ十六間、七重ニ至リテ三間四方ナリ、城櫓門關總テ善美ヲ盡クシ、井月ニシテ成功ス、天正十一年六月、光秀信長ヲ本能寺ニ弑シ、一タヒ安土ニ歸リ、天主ノ貨寶ヲ取リ、復タ京師ニ入ル、既ニシテ光秀山崎ニ敗ル、ヤ、弟光春、安土城ヲ火シ、坂本ニ奔ル、今僅ニ城礎ヲ存ス、中ニ信長公ノ墳墓ト稱スルモノアリ、兆域十間四方、小濠ヲ繞ラシ、更ニ石垣ヲ構ヘ、一見莊嚴ナリ、然リト雖モ信長ノ墓ハ京都船岡山ニ在リ、或ハ是レ後人築キテ以テ英靈ヲ弔セシモノカ

總見寺 安土山ニ在リ、遠景山下號シ、圓鑑禪師ノ開基ニシテ、織田信長ノ本願ナリ、寺ハ元甲賀郡ニ在リシヲ、信長命シテ茲ニ移建セシム、寶塔ハ享徳三年始メテ、建立セルモノヲ、天正年間ニ移築セリ、仁王門ハ元龜三年ノ創建ニ係ル、其ノ他堂

坊僧舎、葦ヲ竝ヘ、安土山上松樹ノ間輪奐ノ美ヲ極メタリト雖モ、惜ムヘシ、安政元年十一月、烏有ノ災ニ罹リ、今僅ニ三重ノ寶塔ト仁王門トヲ存スルノミ、其ニ特別保護建造物タリ

抑、此城ハ信長近畿ヲ平定シ、正ニ大ニ其威ヲ天下ニ示サントスルノ手段トシテ、建造セラレタルモノナルヲ以テ、破天荒ノ城櫓ヲ營ミ、壯觀善美ヲ盡シ、麓ニハ諸侯大夫ノ邸宅、其、葦ヲ竝フ、蓋シ暴秦阿房ノ比ナランカ、天正十一年六月十四日、光春ノ一炬、城樓一片ノ焦土ト化ス、今登リテ之ヲ訪ヌレハ、巖石崔嵬トシテ、虬龍ノ形ヲ遺シ、松樹蒼鬱トシテ、總見院殿ノ古墳立チ、石壁礎石、依然トシテ、其形ヲ失ハス、北ノ方湖水ヲ望メハ、渺茫トシテ、白帆雲霞ノ間ニ走リ、竹生多景ノ諸島、盆石ノ如ク、碁布シ、湖西ノ連山、青帶ヲ引ク、翻テ南ヲ望メハ、田園隴隴トシテ、三上、鏡ノ諸山、前ニ在リ、眼界濶大、眞ニ雄偉ノ氣象ヲ起ス、七層樓上大盃ヲ引キシ、信長ノ得意思ヲ可キナリ

遊湖上登總見寺

麻島松南

秋風何處弔英靈

古壘雲蒸雨氣醒

烽火消來切灰冷

萬燈影裡佛燈青

登安土城墟

安土城高雲裡攀

霸縱化作老禪關

一五八

賴 三 樹

晚霞如火人回首

一點青螺認叡山

淨嚴院 安土村大字慈恩寺ニアリ、往古ハ威徳院慈恩寺トイヒ、厩戸皇子ノ開基ニシテ、本尊ハ彌陀佛ヲ安ス、又釋迦堂ニ安置スル釋迦佛ノ像ハ山城嵯峨ノ釋迦ト同體ナリト傳フ、文中六角氏頼之ヲ崇信シ、代代ノ香華院トナス、後兵火ノ爲メ燒亡シ、僅ニ樓門ヲ殘スノミ、僧隆堯之ヲ中興シテ、金勝山淨嚴院ト號ス、織田信長安土ニ城クニ及ヒ、信スル所ノ僧明感ヲシテ、此ニ居ラシメ、本堂方丈ヲ修理シ、令ヲ國中ニ布キ、淨土宗ノ寺ハ總テ之カ末寺タラシム、是ヨリ念佛ノ道場トナル、本堂ハ多賀ノ彌陀堂ヲ移セシモノ、今特別保護建造物タリ

安土宗論 天正七年五月淨土宗ノ僧靈譽、關東ヨリ來リテ安土ノ町ニ說法ス、時ニ日蓮宗建部紹智大脇傳内ノ二人、法席ニ出テ不審ノ點ヲ問フ、京師ヨリ日蓮僧四人及宗徒來リテ諸宗ヲ誹譏ス、安土ノ臣屬之ヲ和解スレトモ聽カス、信長大ニ怒リ、兩宗ニ討論セシム、南禪寺ノ秀長老ヲ判者トシ、菅谷長谷川、堀、矢部、津田ノ五

士ニ命シテ之ヲ監督セシム、當院ニテ論議アリ、淨土宗靈譽及貞安二人議論明達ニシテ、日蓮ノ徒口ヲ緘ス、信長命シテ其衣ヲ剝キ、皆之ヲ斬ル、後信長益淨土宗ヲ信スト云フ

桑實寺 安土村大字桑實寺ニアリ、傳ヘ云フ、天智天皇ノ勅願トシテ白鳳六年之ヲ創建スト、今藥師ノ像ヲ安ス、世ニ桑峰ノ藥師ト云フ、聖武天皇、天平感寶元年閏五月六日ノ繪旨ニ曰ク、藥師寺絹五百匹、綿一佰屯、布一千端、稻千萬斤、水田一佰町、四至近江國蒲生郡東ハ神崎蒲生ノ境ヲ限リ、竝ニ沙々貴山長峰、南ハ鳥坂長峰ヲ限リ、西ハ五條畔ヲ限リ、北ハ大洞ヲ限ルト、即藥師寺ト稱セシ事アリシ者ノ如シ、又緣起ニ曰、白鳳六年十一月八日、定惠ヲ導師トシテ藥師佛ヲ安置ス、又元明天皇此寺ニ行幸ノ事ヲ記セリ、本堂ハ今特別保護建造物ニシテ、緣起繪卷物二卷ハ國寶ニ指定セララル、鏡山 鏡山村大字鏡ノ南ニアル山ナリ、山高カラスト雖モ、登リテ湖水ヲ望メハ宛然、鏡ニ對スルカ如シ、國名風土記ニ曰ク、壬申ノ亂ニ、天武天皇美濃路ヨリ近江ニ攻メ入り、大友皇子ノ兵ト戰フ、天武ノ將鏡大君戰死シ、此地ニ葬ル、後塚ヲ築テ鏡山ト云フ云云、諸説未タ決セス、古詠多ク世ニ傳フ

家集

我妹子かゝみの山のもみち葉は

家持

うつる時にそ物はかなしき

同

古も見すやありけん鏡山

兼盛

ゆくすゑ遠き豊のあかりは

建保百首

行年をかゝ見の山の冬の月

順徳院

見る影さへにくもりなきかな

拾玉

春と見るかすみなりけりかゝみ山

慈鎮

ここに波うつ志賀の曉

✓鏡宿 今ノ大字鏡ノ地古ハ宿驛トシテ頗ル繁盛ヲ極メタリ

太平記ニ曰ク「觀應二年八月十八日源尊氏卿高倉入道追討の宣旨を賜はり近江國に下著して鏡宿に陣す」云云

平治物語ニ曰ク「遮那王十六と申承安四年三月三日の曉鞍馬寺を出けり世の中に怖れて上にこそ惡む由なれ内に同宿の兒など名残を惜みけり其日近江の鏡の宿に著て夜はかりに髪をわれと剃り上げ日頃懐に持ける刀をさし烏帽子の

ほこり押拭ひ著けたり翌朝立たんとする時呼ばはつて曰く遮那王元服して候名は源九郎義經なりと云云

鏡神社ハ鏡山村大字鏡ニアリ天日槍ヲ祭ル村社ニシテ社殿ハ特別保護建造物ニ指定セララル

蒲生野 武佐村ノ近傍一帯ノ地ヲ云ヒシモノ、如シ古詠多ク且ツ史乘此名ヲ載スルコト多シ日本書紀ニ曰ク天智天皇七年夏五月五日蒲生野ニ獵ス萬葉集第一ニ曰ク天皇蒲生野ニ遊獵シ時ニ歌一首ヲ作ル皇太弟内臣及群臣悉ク從フ日本紀略ニ曰ク延暦二十二年閏十月紀朝臣梶長ヲ近江國蒲生野ニ遣ハス類聚國史八十三ニ曰ク二十二年近江國蒲生野ニ行幸スト屢行幸ノ事アリシヲ見ルヘシ

拾遺

かまふ野の玉の緒山にすむ鶴の

讀人しらす

千歳は君か御代のかすなり

續後拾遺

きのふまで冬籠せし蒲生野に

好忠

蕨のとくも生いつるかな

名寄

かまふの若むらさきの藤はかま

匡房

千代の秋まで句へこそ思ふ

老穰森並鎌宮 老蘇村ニ在リ、或ハ追初、又息磯ノ字ヲ用ウ、古歌ノ名所ニテ、今モ紅葉或ハ新緑ノ候、頗ル景趣ニ富ム、近時鎌宮ノ境内ニ、公園ヲ隣接シ、多クノ櫻樹ヲ樹栽セシカハ、花時節ヲ此ニ曳クモノ多ク、勝區更ニ一層ノ妙ヲ加フ、鎌宮ハ延喜式神名帳載スル所ノ奥石神社ナリト云フ、祭神ハ天兒屋根命、今本殿ハ特別保護建造物ニ指定セラル、古詠アリ世ニ傳フ

後拾遺 東路の思ひ出にせん時鳥

大江公資

おひその森の夜半の一聲

新勅撰 かくて世に我身時雨は降はてぬ

源泰光

おいその杜の色もかはりて

堀川百首 涼しさに老その森の下なれと

忠房

なつてふことそむすられにける

夫木 はこへともつきせさりけり御調物

經衡

おひその森の道のまもなく

拾玉

置露はおのか涙か鳴せみの

慈鎮

聲も老その森の下くさ

観音寺古城址 蒲生神崎兩郡ノ境、十方嶺ノ絶巔、城礎累累トシテ、江南佐々木家四百年ノ基業ヲ示スモノ之ヲ観音寺ノ城址トナス、山ハ登阪十八町、嶺ヲ駒眼ト云ヒ、十方嶺三國嶺等ノ名アリ、峰ニ三石トテ大石アリ、三國ノ間ト名ツクル大殿ノ跡アリ、是レ佐々木ノ世世國政ヲ取リシ政廳ナリト云フ、東北ノ峰ニ、布施淡路守丸、東ノ峰ニ、大夫殿丸池田丸トテ、其跡存セリ、登路ハ本政赤阪アリ、大門ノ路、下馬門、犬追物庭、七曲、桑峰越等ノ跡アリ、此城ハ佐々木季定ヨリ承禎義治マテ十八代四百四年ノ舊跡ナリ、正親町天皇、永祿十一年九月、織田信長、足利義昭ヲ援ケテ上洛ノ時、之ヲ攻陷シ、義賢父子國ヲ捨テ、逃亡ス、箕作山古城址亦蒲生神崎ノ郡境ニ在リ、佐々木承禎、永正十六年ヲ以テ、之ヲ城キ、子義賢ヲシテ、此ニ居ラシメタルモ、観音寺城ト共ニ織田氏ノ爲ニ攻陷セラル

梅松論ニ曰ク、正慶二年、六波羅北方は越後守仲時、南方は親衛時益、二人相議して、主上を奉じて、東國へ下る、かゝる處に、守山邊より、野伏とも山野に起りて、敗軍を

追詰けるほかに討取られ、疵を蒙るもの數を知らず、其夜は近江國觀音寺を一夜の皇居とす、翌五月九日東へさして落行云云

觀音正寺 老蘇村大字石寺ニアリ、天台宗ヲ奉シ、本尊千手觀世音ヲ安ニス、西國第三十二番ノ札所トシテ、賽客甚多シ、寺傳ニ云フ、推古天皇十三年厩戸皇子ノ創立ニシテ、本尊ハ皇子ノ自カラ彫刻シ給フ所、堂塔坊舎、巍然トシテ、夔ヲ列ヘタリ、天曆中宇多天皇ノ皇子、敦實親王、此地ヲ領シ給ヒテ、深ク之ヲ崇信セラル、其裔孫佐々木氏ノ繁榮ニ從ヒ、當寺亦昌ヘ、僧坊七十餘院ニ及フ、天正年中佐々木氏ノ織田信長ニ滅ホサル、ヤ、寺亦兵燹ニ罹リテ、寶器多ク燒亡ス、後慶長二年再ヒ堂宇ヲ修メ、漸ク舊觀ノ一部ヲ存スト云フ

佐々木氏 姓ハ源宇多天皇ノ皇子、敦實親王ニ出テ、子雅信始メテ源姓ヲ賜フ、次子扶義始メテ近江國沙々貴莊ニ移ル、孫章經近江守ニ任ス、曾孫秀義三郎ト稱シ、年甫テ十三源爲義ニ從フ、爲義其武幹ヲ愛シ、約シテ父子トナル、保元ノ亂源義朝ニ從ヒテ、白河殿ヲ攻メ、平治ノ亂源義平ニ屬シテ、平氏ト戰フ、戰敗レテ其領邑ヲ失ヒ、族ヲ率キテ、奥州ニ奔ル、途相模ヲ過キテ、平重國ニ依リ、遂ニ其女ト婚ス、秀義澁谷ニアル

二十年、會義朝ノ子賴朝流サレテ伊豆ニアリ、秀義之ニ勸メテ兵ヲ舉ク、子定綱經高盛綱高綱皆之ニ從フテ功アリ、秀義功ヲ以テ、近江守護ト爲ル、壽永三年、伊賀ノ人、平田家繼兵ヲ起シテ甲賀郡ニ入ル、秀義年老テ佐々木莊ニ在リ、部下ヲ率キテ南ニ出テ大ニ大原谷ニ戰フ、矢ニ中テ油日ニ戰死ス、年七十三、孫信綱寛喜三年十一月ヲ以テ近江守ニ任ス、信綱ノ時、近江十二郡ヲ分チテ二トナシ、長子泰綱ニ江南六郡ヲ領シテ六角氏ト稱セシメ、次子氏信ニ江北六郡ヲ領シテ京極氏ト稱セシメ、二家互ニ近江ノ國務ヲ執ル、泰綱ノ子賴綱之ヲ嗣キ、時信氏賴ニ至ル、延元元年、足利尊氏、關東ヨリ來リテ、京師ニ入ル、氏賴年幼シ、觀音寺城ヲ守ル、新田義貞、後醍醐天皇ヲ奉シ、比叡山ニ據リ、來リテ之ヲ攻ム、城陷リテ氏賴出奔ス、既ニシテ義貞越前ニ赴クヲ以テ氏賴城ヲ復ス、氏賴足利氏ノ爲ニ屢戰功アリ、和歌ヲ好ミ、又佛ヲ信ス、老後髮ヲ剃リテ崇永ト號ス、應安三年六月卒ス、年四十七、子義信天セシヲ以テ、將軍義滿ノ弟、滿高ヲ養フテ子トナス、明德二年、南北兩朝ノ和成リ、滿高其間ニ立チテ、幹旋大ニ勤メ、遂ニ三種ノ神器ヲ護シテ京ニ入ル、子滿綱其後ヲ承ケ、久賴高賴相次テ城主タリ、應仁ノ亂、高賴山名氏ニ黨シテ、京極氏ト戰ヒ、近江一州ヲ統一セントス、京極政信來リ攻

高頼屢敗北ス、又延曆寺ト難ヲ構ヘ、屢之ト戰フ、應仁九年高頼京師ニアリ、將軍ノ旨ニ忤フテ歸ル、將軍義尙召セトモ應セス、長享元年義尙來リ伐テ、互ニ勝敗アリ、義尙鈎ノ里ニ薨ス、明應九年九月、後土御門天皇崩ス、高頼葬祭ノ料ヲ獻ス、勅シテ菊桐ノ徽章ヲ賜ヒ、昇殿ヲ許サル、永正十七年八月卒ス、次子定頼其後ヲ襲キ、大永元年淺井亮政ト江北ニ戰フ、敗レテ歸ル、既ニシテ近江守護北陸道總管トナル、其子義賢相次テ威ヲ江南ニ震フ、大永十五年十二月、將軍義輝坂本日吉ノ祠前ニ首服ヲ加フ、定頼加冠ス、義賢既ニシテ髮ヲ剃リテ承禎ト號シ、父子益、兵威ヲ振フ、既ニシテ織田信長近江ニ入り、承禎父子ヲ招ク、應セス、永祿十一年九月信長諸城ヲ攻ム、江南ノ十八城皆降ル、承禎觀音寺城ニ居リ、子義弼箕作山城ニ據リテ之ヲ拒ク、信長ノ兵破竹ノ勢ヲ以テ、之ヲ攻メ、其勢當ルヘカラス、承禎父子甲賀山ニ逃レ、城陷ル、元龜元年六月承禎甲賀ノ土兵ヲ率キテ、野洲川ニ出テ、柴田勝家佐久間信盛ト戰フ、兵敗レテ死スル者七百餘人、承禎再舉ヲ謀リテ成ラス、元龜元年十一月、遂ニ信長ニ降ル、慶長三年三月卒ス、年七十八、次子高定德川氏ニ仕ヘ、祿二千石ヲ賜フ

市邊押磐皇子墓 市邊村大字市ノ邊ニアリ、昔ハ、コボシ塚ト云ヒ、東西二基アリ、相

距ル十間ナリ、明治八年八月七日、教部省ヨリ此地ヲ以テ、皇子ノ御墓ト確定シ、兆域ヲ定メラル

日本紀ニ曰ク、顯宗天皇元年春二月、詔シテ曰ク、先王多難ニ遭遇シテ命ヲ荒郊ニ殞ス、朕幼年ニ在リ、亡逃自ラ匿ル、猥リニ求迎ニ遇ヒテ、大業ヲ纂ク、廣ク御骨ヲ求ムルモ能ク知ル者ナシ、詔シ畢テ皇太子億計ト泣哭、憤恚シ給フ、是月耆宿ヲ召聚シテ、天皇親ラ歷問ス、一老嫗ノ進ムアリ、置目ト曰フ、曰ク、御骨ノ埋處ヲ知ルト、是ニ於テ天皇皇太子億計ハ老婦ヲ將テ、近江國來田綿蚊屋野中ニ幸ス、掘出シテ之ヲ見ルニ、果シテ婦ノ言ノ如シ、穴ニ臨ミ哀號ス云云、又曰ク、仲子ノ屍御骨ニ交リテ能ク別ツモノナシ、爰ニ磐坂皇子ノ乳母アリ奏シテ曰ク、仲子ハ上齒墮落ス、之ヲ以テ別ツヘシト、是ニ於テ乳母ニ由リテ、髑髏ヲ別ツト雖モ、竟ニ四支諸骨ヲ別チ難シ故ニ蚊屋野中ニ双陵ヲ造リ相似ル一ノ如クシ、葬儀異ルナシト

第十二章 蒲生郡東部

綿向岳突兀トシテ江勢ノ境ニ聳ニ海ヲ拔クコト、三千六百尺、山勢西北ニ延ヒテ數



條ノ丘陵ヲ作り、日野左久良ノ谿流滄滄ノ音ヲナシテ其間ヲ流レ、地勢西北ニ向テ傾ク所、村落相接シ、人煙相望ム、之ヲ蒲生郡ノ東部俗ニ所謂上郡ノ地勢トナス、古ノ日野ノ牧野草路ヲ埋ムルノ荒原モ、鬼室集斯等ノ族此地ニ移住スルアリ、人煙次第ニ多ク、蒲生氏ノ居城ハ日野ヲシテ遂ニ蒲東ノ一市街タラシム、地勢雄偉人自ラ偉ナルモノアリ、蒲生氏郷山陬ノ一小城主ヲ以テ一躍百萬ノ巨祿ヲ占メ、奥州唯一ノ雄鎮トナリ、日野商人氏郷ノ人格ニ陶冶セラレテ亦大ニ發展ス、山河美ナル處偉人アリト宜ナル哉

音羽山古城址 西大路村大字音羽ニ在リ、蒲生智閑ノ居城ニシテ庭石、井戸等ノ跡アリ、今之ヲ修メテ公園トナス、登リテ之ヲ望メハ綿向山ノ麓、日野川ノ白沫ヲ飛ハシ、地勢自カラ雄偉ニ、西北湖水ヲ望メハ平野丘陵相錯綜シテ遙ニ琵琶湖ノ青鏡ヲ眺メ景趣頗ル美ナリ

中野古城址 西大路村ニアリ、樹木鬱蒼トシテ丘山ヲ被ヒ、日野川之ヲ圍リテ要害ヲ占ムル處、是レ即チ蒲生氏歷世ノ居城ナリ、蒲生氏姓ハ藤原田原千晴ノ後季俊ヨリ出ツ、初メ秀郷近江田原莊ニ居ル、故ニ田原藤太ト稱ス、子孫近江ニ居ル、季俊ノ孫

俊賢源頼朝ニ仕ヘ、蒲生郡ヲ食ム、其子俊信始メテ蒲生氏ト稱ス、裔孫定秀六角氏ニ仕ヘテ功アリ、國政ニ參與ス、子賢秀孫氏郷織田豊臣二氏ニ仕ヘテ戰功アリ、天正十二年南勢五郡ノ地十二萬石ヲ賜ハリ之ニ移リ城廢ス

蒲生氏郷 幼名ハ鶴千代長シテ忠三郎ト稱ス、初メ教秀賦秀ト言ヒ、後氏郷ト改ム父ヲ賢秀ト云フ、賢秀始メ六角氏ニ仕ヘテ忠功ヲ勵ム、六角氏亡フルニ及ヒ、織田氏ニ屬ス、此時忠三郎始メテ信長ノ侍臣トナル、永祿十二年八月信長伊勢ヲ徇フルヤ氏郷年始メテ十四、先登シテ首級ヲ得、信長之ヲ賞シ女冬姫ヲ以テ之ニ妻ス、天正十年、信長本能寺ニ弑セラル、ノ時、父賢秀ハ安土城ニ氏郷ハ日野城ニ在リ、變ヲ聞キ氏郷手兵ヲ率キテ、信長ノ夫人生駒氏ヲ日野城ニ迎ヘ、己レ亦織田信雄ニ從ヒテ上洛ス、秀吉深ク之ヲ賞ス、後屢戰功アリ、從五位下ニ敘シ、飛騨守ニ任ス、天正十二年六月伊勢ノ松島城ニ封シ、十二萬石ヲ賜フ、十五年島津征討ノ軍ニ從ヒ殊功アリ、十六年正四位下左近衛少將ニ任ス、十八年亦秀吉ニ從ヒテ小田原城ヲ攻メ功アリ、北條氏亡フルニ及ヒ轉シテ奥羽ヲ征服ス、遂ニ會津城ニ封セラレ、四十二萬石ヲ領ス、會中秋月皎皎タリ、氏郷潛然トシテ涙ヲ垂ル、傍人怪テ問テ曰ク、今大封ヲ受ケ憂色ア

ルハ何ソヤ、氏郷答テ曰ク、微祿ト雖モ封ヲ京畿ニ受クレハ、緩急事ニ及フヘシ、今山川遼遠事ニ及ハス、故ニ快々タル耳ト、是ヨリ奥羽ノ諸寇ヲ平ラケ專ラ鎮撫ニカム秀吉切リニ封ヲ加ヘ、百二十萬石トシ、十九年十二月參議ニ任シ、從三位ニ敘ス、文祿元年征韓ノ役、那古耶ノ行營ニ赴ク、時ニ會津城ヲ改メテ若松城ト稱ス、舊邑蒲生郡若松森ヲ慕テ之ヲ擬スト云フ、二年春病ニ罹リ、三年病ヲ扶ケテ上洛シ、四年二月京師ニ薨ス、年四十、辭世アリ世ニ傳フ

限りあれば吹かねと花はちるものを

心みしかき春の山風

馬見岡綿向神社 日野町大字村井ニ鎮座シ、天穗日命ヲ祭ル、傳ヘ云フ、欽明天皇六年四月、綿向嶽ニ鎮座シ、後此地ニ移スト、康永年中火災ニ罹リ、松波左衛門尉光兼等願主トナリ、僧聖源勸進シ、社殿ヲ再造ス、大永三年兵火ニ罹リ、社殿延焼ス、天文十年蒲生下野守定秀之ヲ造立シ、社領ヲ付ス、徳川氏又社領十石ノ朱印ヲ付セリ、今縣社ニ列ス

鬼室集斯墓 蒲生郡東櫻谷村大字小野ニ在リ、日本紀ニ曰ク、天智天皇四年春二月

鬼室集斯ニ小錦下ヲ授ケ、復百濟ノ百姓四百餘人ヲ以テ近江神崎郡ニ居ラシム、三月神前郡ノ百濟人ニ田ヲ給ス、八年十二月佐平鬼室集斯等男女七百餘人ヲ以テ、近江蒲生郡ニ遷居セシム、墓碑アリ、高サ一尺六寸、文字鮮ナラスト、雖モ左ノ如ク刻ス

右 朱鳥三年戊子十一月八日歿

正面 鬼室集斯墓

左 庶孫美成造

之ヲ按スルニ、天智天皇ノ時、久シク我國ニ倚賴セシ百濟ハ、遂ニ唐兵ノ滅ス所トナリシヨリ、勢ヒ敵國ノ粟ヲ食ムヲ潔シトセス、去テ我國ニ歸化セシモノ多カリシカハ、當時人口稀疎ニシテ、地力豊富ナル地點ヲ選ミテ之ヲ配置シ、以テ一面荒蕪地ヲ開カシムルト共ニ、一面彼等ニ職ヲ授ケタマヒシコトハ古史ニ徵スルコトヲ得可ク、鬼室集斯同シク我國ニ歸化シ、而モ學殖豊富能ク學頭ヲ授ケラル、ニ至ル、後此地ニ隱栖シ終焉セシモノカ、庶孫美成ナルモノハ如何ナル人ナリシヤ、未タ詳ナラスト、雖モ子孫此地ニ祭エ、祀ヲ絶タサリシハ明カナリ、小祠今ニ存シ、祭日ハ鬼室集斯ノ歿日十一月八日ヲ以テ之ヲ行ヒ、其同族ハ之ヲ室徒ト稱ヘ、現今其家數十九ヲ

## 第十三章 神崎郡

釋迦嶽海拔三千六百尺ノ高度ヲ以テ江勢ノ境ニ峙テ、谿流之ヨリ起リテ愛知川ヲナシ、蜿蜒九里ヲ流レテ琵琶湖ニ注ク處、蒲生、愛知兩郡ノ間ニ介在シテ帶ノ如キ地勢ヲナスモノ之ヲ神崎郡トナス、面積僅ニ七方里餘、戶數七千三百、人口三萬七千ヲ包容ス、東部ノ幾分ヲ除クノ外、平野坦坦トシテ湖濱ニ達ス、人口ノ密度野洲郡ニ次キ、一方里五千ニ垂ントス、愛知川ノ作リシ沖積層ハ、次第ニ湖中ニ斗出シテ河川漸ク人ヲ集ム、天地自然ノ配劑亦妙ナル哉、史上神前又ハ神崎ノ名ヲ見ルコト多ク、何レモ三韓人ノ配置ヲ記スヲ見レハ、土地ノ豐饒ヲ開發スル、一ニ移民ノ來化ヲ歡ヒシモノカ、幕政以後、土民領主ノ苛斂ニ刺撃セラレ、一箇ノ天秤棒ヲ肩ニシテ、天下ヲ横行シ、到ル所肆店ヲ設ケテ、其利ヲ占ム、近江商人ノ發展實ニ此時ヨリ起ル

**建部高光** 建部村ノ地ハ、今ノ官幣大社建部神社ノ元鎮座アリシ所、所謂日本武尊ノ武勇ヲ記念センカ爲、其子稻依別王ニ命シテ、此地ヲ領セシメ給ヒシモノト傳ヘ

ラル、王十二世ノ孫郡少領建部益人ナルモノ、建部神ヲ祭祀シ、氏神トシテ世世郡務ヲ司ル、今ノ旭村大字伊野邊ニ祀レル建部ノ宮、後佐々木六角家ニ屬シ、家長タリ、依テ源氏ヲ授ケ一門ニ列ス、建部高光幼ヨリ僧トナル、壯年兄ノ仇ヲ復シ、名世ニ聞ユ織田信長其勇武ヲ聞テ之ヲ召シ、近江守山ノ地五萬石ヲ授ク、後秀吉ニ仕ヘテ若狹一國ノ郡代職ヲ蒙リ小濱ニ住ス、又攝津ヲ奉行シテ尼ヶ崎城ニ移リ、慶長五年ノ役大阪方ニ黨シテ大ニ東軍ヲ苦シム、役後罪ヲ赦サレテ本領ヲ安堵ス、十五年五月卒ス、子孫相襲テ德川氏ニ仕ヘ、播磨林田ノ地一萬石ヲ食ミテ明治ニ至リ華族ニ列シ子爵ヲ授ケラル

**瓦屋寺** 建部村大字瓦屋寺ノ地ニアリ、寺傳ニ云フ、推古天皇元年聖德太子ノ創立ニ係ル、攝津四天王寺建立ノ時、蘇我大臣ノ奏請ニ依リ、太子此地ニ行啓アリ、石崎山ニ於テ十萬六千枚ノ瓦ヲ造リ、其用ニ供セラレタル靈跡ニシテ、寺名亦此ニ起ルト云フ、按スルニ、往古瓦屋ハ寺院ノ別名ニシテ必シモ造瓦ヲ意味セス古ヘ三韓人多ク此地ニ移住セシコトアレハ、或ハ此等ノ人人ニ依リテ造立セラレシモノカ、或ハ移住ノ三韓人中ニハ造瓦ノ工人多カリシヲ以テ此地ヲ選ミテ瓦ヲ造ラレシモノ

トモ云フ何レカ是ナルヲ知テス。太子其後伽藍ヲ山上ニ建立シ、僧房ヲ經營シテ名ヲ石崎山瓦屋寺ト稱シ、自作ノ千手觀世音竝ニ四天王ヲ安置シ給フ。文祿中兵火ノ災ニ罹リ、往古ノ堂宇悉ク烏有ニ歸シタレトモ、本尊竝ニ四天王ノ像ハ災ヲ免レタリ。正保二年香山和尚之ヲ再建シテ中興ノ業ヲナス。師ハ元文五年八月、佛海湛圓禪師ノ諡號ヲ賜ハル。今臨濟宗妙心寺派ニ屬シ、境内ニ四十八坊ノ柱石及十六坊ノ古跡ヲ存ス。當時ノ隆昌想見スルニ難カラス。

**右馬寺** 南五個莊村大字石馬寺ニ在リ、御都織山石馬寺ト稱シ、推古天皇二年聖德太子ノ創立スル所傳ヘ云フ。太子靈地ヲ近江國ニトシテ佛塔ヲ營マント欲シ、駿馬ニ駕シテ蹄ニ任セテ諸方ヲ經廻シ、此地ニ來ラセ給フヤ、駒忽チ其歩ヲ進メス。太子即チ駒ヲ山麓ノ松樹ニ繫キ、親ラ山ニ登リテ地形ヲ觀察シ給フニ、風光秀麗ニシテ瑞雲飄颻タリ、深ク御威ヲ動カシ給ヒ、積年ノ宿望此靈地ヲ得タルヲ喜ヒ、再ヒ山麓ニ下ラセ給フニ、曩ニ松樹ニ繫キシ駒ハ已ニ化シテ石トナリアリシカハ、太子其奇瑞ニ感シ、直ニ寺院ヲ建立シテ石馬寺ト號ケ給フト。永正元年佐々木高頼篤ク當山ニ歸依シ、其臣石塚實定ヲ奉行トシ、悉ク堂坊ヲ修理シ、寺領千石山林五十餘町歩ヲ

寄附セシカハ、久シク荒廢ニ委セシ靈蹟モ再ヒ法燈ノ赫灼タルヲ見ルニ至レリ。永祿十一年織田氏ノ兵燹ニ罹リ、復タ昔日ノ觀ナシ、其後長ク荒廢ニ委セシカ、慶長八年徳川氏ノ知ル所トナリ、十四年寺領ヲ付セラル、ニ及ヒ漸ク再興ノ機運ニ向ヒ、後碩徳ノ留錫スルモノ多ク、漸ク舊觀ノ幾分ヲ復スルニ至レリ。今京都妙心寺派ニ屬シ臨濟禪ヲ奉ス。

方丈 寛永十一年將軍家光上洛ニ際シ、伊庭村ニ御茶屋御殿ヲ造營セシカ、當時ノ寺僧小堀遠江守ノ命ヲ受ケ、接待ノ任ニ當リシカハ、其賞トシテ建物一切ノ寄附ヲ受ケ、此處ニ移築セシモノト云フ。

寶殿 正徳元年龍光禪師ノ再建スル所、本尊十一面觀世音竝ニ四天王、地藏菩薩、聖徳太子等ノ像ヲ安置ス。

其他太子堂山門、行者堂等ノ堂舎甚多シ。

**宇賀神社** 八幡村大字神郷ニ在リ、宇賀明神ト云フ。祭神豐遠賀比賣命、白山比賣命。延喜式所載乎加神社是ナリ傳ヘ云フ。昔大和國ノ人太丸ト云フモノ、所緣アリテ夫婦眷族ヲ伴ヒ、此地ニ來住ス。妻ヲ秦氏ト云ヒ子七人アリ、赤貧洗フカ如シト雖モ、賢